

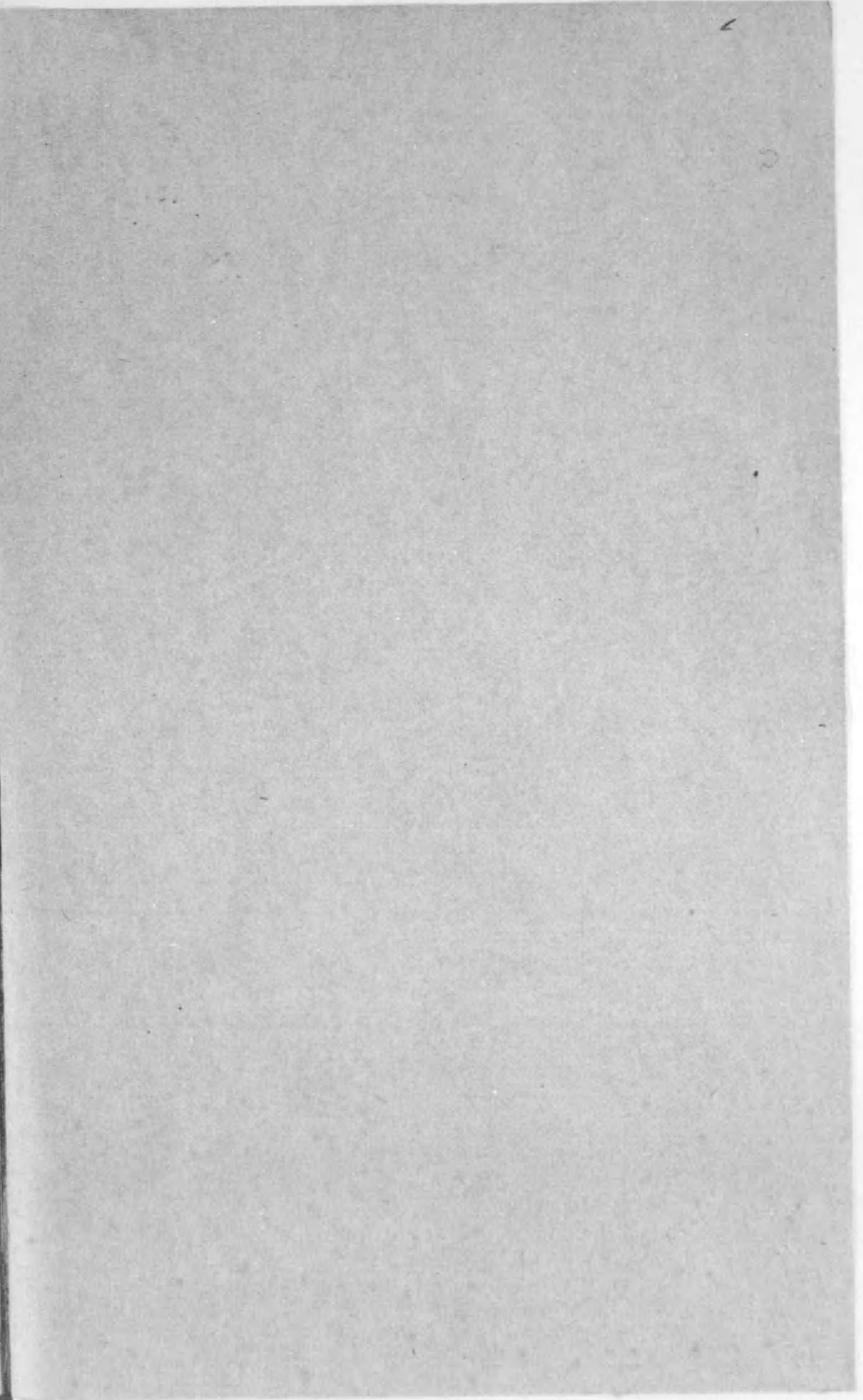
324

316



始





324
316



日蓮宗高僧傳 全

324-316

塔嶺 菱沼哲之介著

白蓮宗高僧傳全

發行所

東京 牛込 江戸新報社

大正
1.10.15.
丙寅



高祖日蓮聖人尊像



高祖晩年身延山に棲るに親らかなる水鏡に寫し
白像を描き給ふ有名なる水鏡の尊像は是なり

景眞寺遠久山延身



三門 上段は當山三門にして昔時創建にかゝるものは慶應年中悉く灰燼に歸し現今のものは第七十八世の山主日良上人の發願によりて再建する所壯大一山の偉觀たり

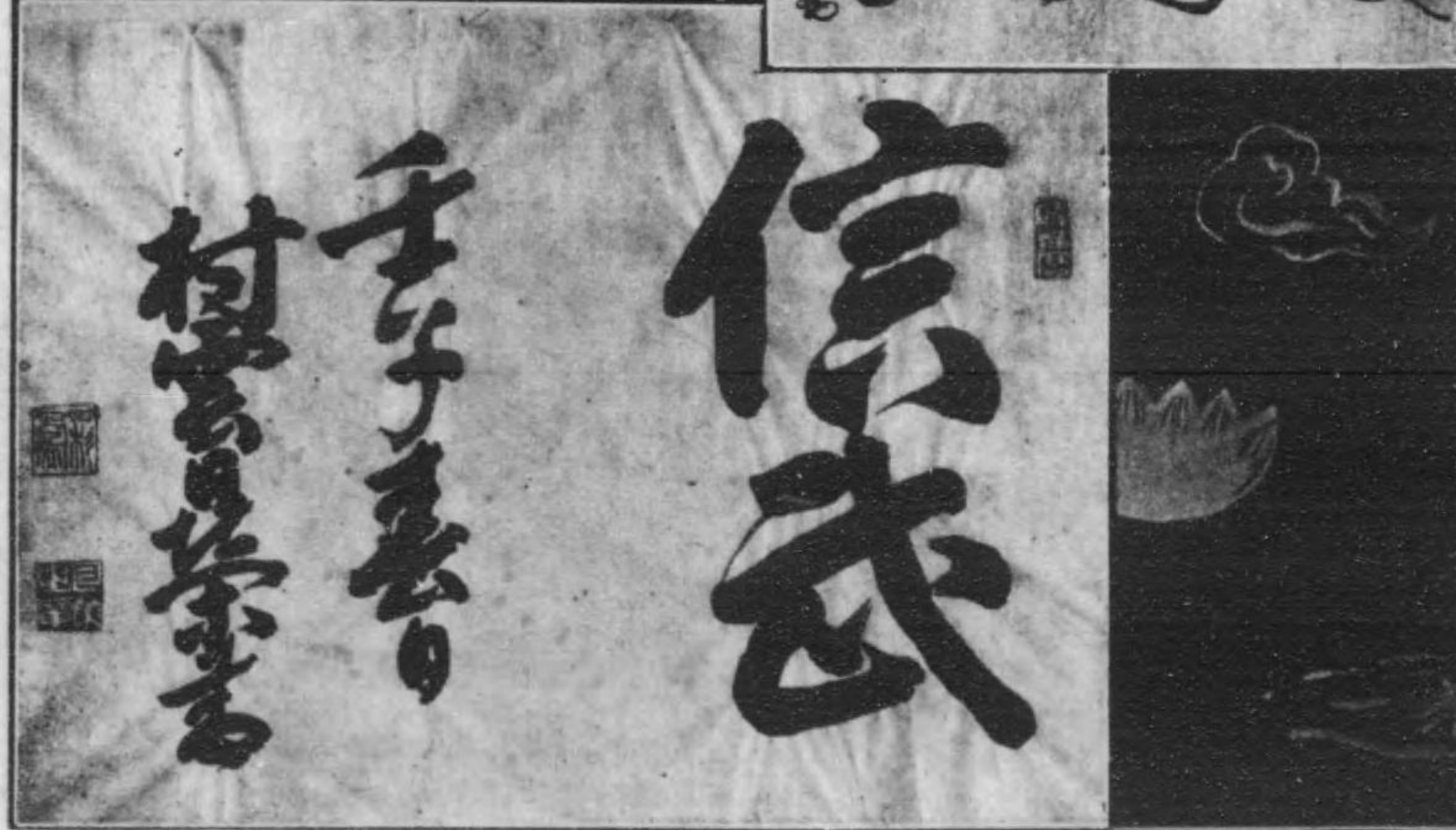


祖師堂 中段は明治十三年日鑑上人の代に建立せる祖師堂なり五彩燦爛として眼を奪ふばかりなり奉安せる祖師の靈像は日法上人の作にかゝり左右に高祖の御父母妙日妙蓮の兩尊並に波木井日圓上人の像を安置せり



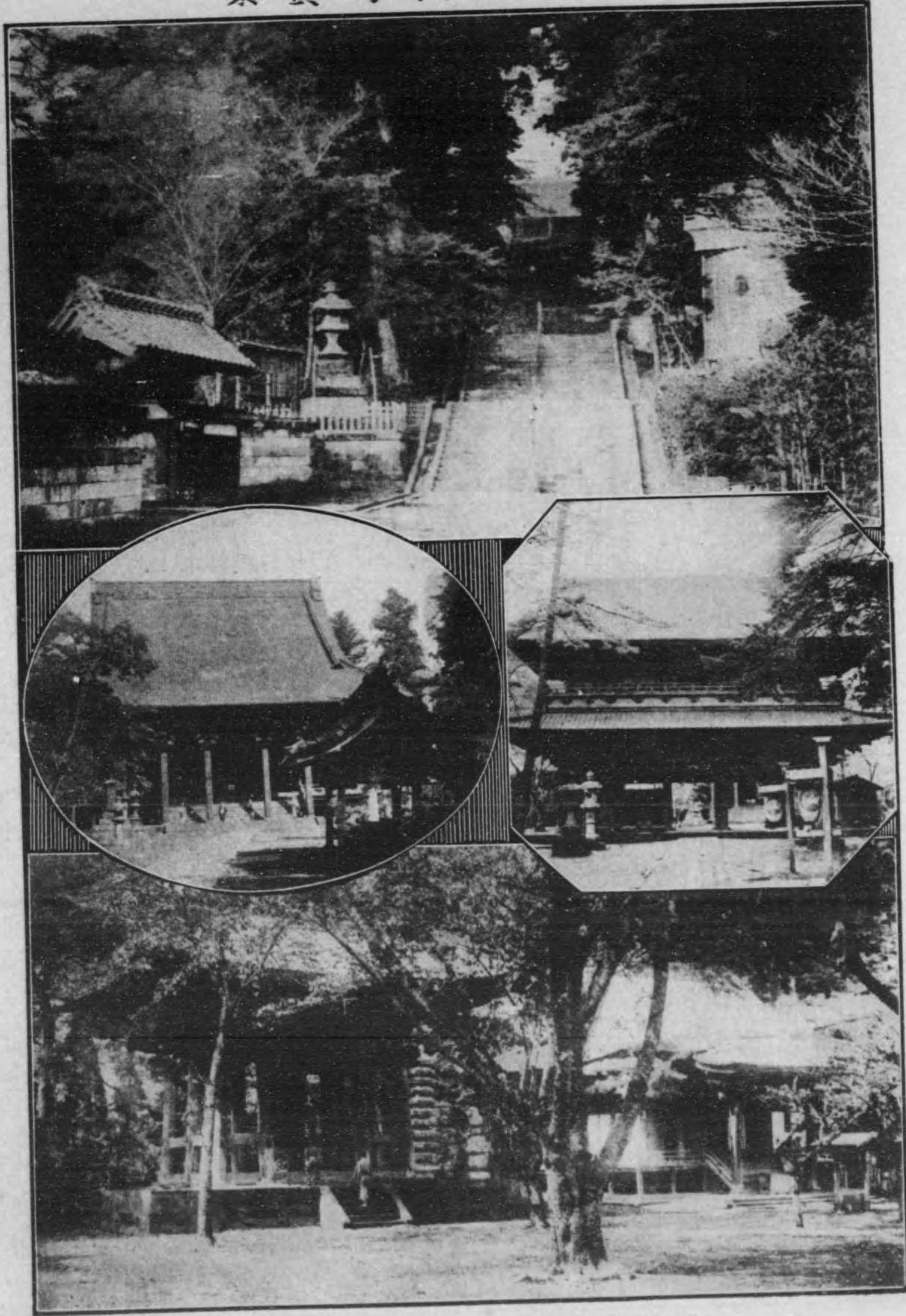
御眞骨堂 下段は高祖の御靈骨を奉安せる御眞骨堂也右方に僅に見ゆるは拜殿にして五間に四間の建築なり拜殿より廻廊を通過して周邊各五間八角形の寶藏に至る金銀八寶をも飾れるが中に眞碎の御舍利を拜するを得べし

(段上) 筆眞御人聖祖高



(段下) 筆眞下殿公尼榮日雲村

池上本門寺眞景



門王ニ(右段中) 部一口り登(段上)
樓 鐘(段下) 堂師祖(左段中)

自序

高祖日蓮上人が威徳宏大無邊、古來我國の高僧智識の中
 ても、又世界の宗教家の中でも、最も優れた大偉人であつ
 た事は云ふまでもない。日蓮宗の教旨が、他の諸宗と異つ
 て、高祖獨創のものであつたばかりでなく、其布教の方法は、
 にも亦一大特色があつた。即ち上人の法門弘通の方法は、
 自から進んで法敵の中に入り、身命を賭して最終の効果を
 收めやうとした、例へば古への武士が、單騎敵の陣中に斬
 入り、縦横無盡に奮戦苦闘するの概があつた。高祖の眼中
 には、念佛なく、眞言なく、天台なく、禪宗なく、又執權
 なく、將軍なく、唯南無妙法蓮華經あるのみであつた。幾

たびか兵火に包圍され、又の下を潜り、幾たびか孤島に放たれ、衣食の窮乏に堪へ、百難を排して起つた大勇猛心の結果、信者は漸く諸方に増加し、正法弘布の功績着々として現はれ、後世無比の隆運を見るに至つたのである。高祖が斯かる花々しき大法戦に、遂に最後の効果を收むるを得たのは、固より其の偉大なる人格、火の如き熱辯、百難不撓の精力に依るのであるが、又上人に随つて法戦に加はり、上人の滅後諸方にあつて法華弘通に従はれた諸高僧の力に依ること甚大である。勇將の下に弱卒なして、上人は始めは孤軍奮闘の有様であつたが、次第に多くの法弟が出来、其の法弟として多数の高僧を持たれた點に於ては恐らく他に類を見ざる程である。先づ六老僧を始めこして

次で十八中老、又日朗上人の下には朗門の九鳳、他の諸上人も亦それ、多くの門弟を持たれて居た。高祖の滅後、よく法燈を継ぎ、宗門の勢力擴張に努められたのは、即ち是等の高僧たちである。故に後世、正法流布の次第、宗門の勢力擴張の歴史を知らうとするには、多士濟々たる諸高僧の事蹟を知らねばならぬ。然るに、高祖上人の傳記は、從來許多の人の筆に成つたものがあるが、諸高僧の傳記に至つては殆ど絶無と云つてもよい。是れ即ち、予が淺識不文を顧ず、宗門景仰の餘り筆を起すに至つた所以である。若し遺漏誤謬の點あらば、大方の識者幸に高教を賜はゞ、予は喜んで之を訂正する積りである。

終りに臨んで、予が本書の材料を蒐集するに當り、多大の便宜と懇篤なる注意を與へられたる諸寺院住職、及び各構中構元、世話人等の諸士に對し、茲に謹で滿腔の謝意を表する。

大正元年十月一日

編者識

目次

第一 高祖略傳

- 一 其の生立……………一
- 二 修學時代の二十年間……………一
- 三 正法樹立……………八
- 四 辻說法……………三
- 五 松葉ヶ谷と伊東の法難……………九
- 六 小松原の難……………七
- 七 龍の口の奇瑞……………三
- 八 佐渡の配流……………九
- 九 宗門免許……………五
- 一〇 身延の幽棲……………五
- 一一 其の終焉……………六

第二 老僧

- 一 日昭上人……………五
- 二 日朗上人……………三
- 三 日興上人……………六
- 四 日向上人……………六
- 五 日頂上人……………一〇
- 六 日持上人……………一〇

第三十八中老

一	日法上人	106	二	日家上人	107
三	日源上人	108	四	日滿上人	110
五	日秀上人	111	六	日忍上人	113
七	日進上人	113	八	日賢上人	114
九	日保上人	115	一〇	日辨上人	116
一一	日門上人	117	一二	日高上人	118
一三	日實上人	119	一四	日傳上人	120
一五	日祐上人	120	一六	日位上人	123
一七	日合上人	123	一八	天目上人	123
第四	朗門の九鳳	124—126	二	日輪上人	126
一	日像上人	126			

第五 名刹歷代略傳

三	日善上人	126	四	日傳上人	120
五	日範上人	123	六	日印上人	123
七	日澄上人	124	八	日行上人	125
九	朗慶上人	126			

一	身延山歷代	127	二	池上本門寺歷代	126
三	京都本國寺歷代	127	四	京都妙滿寺歷代	123
五	京都妙覺寺歷代	123	六	小湊誕生寺歷代	125
七	其他諸刹歷代	125			

第六 諸刹開山略傳

126—126

第七 諸刹住職傳

126—126

附 錄

第一 日蓮宗寺院緣起 一—六

第二 日蓮宗構中由來 一—三

目 次 終

日蓮宗高僧傳

菱沼哲之介著

第一 高祖略傳

(一) 其の生立

時に貞應元年二月十六日、淺けれど春立ち初めた南海の、波も靜かに風爽やかな小湊の朝ぼらけ、空もまだ深い眠りから全くは明けやらず、地も夢見心地の仄闇い中を、沙魚捕る漁夫、海藻刈る海女等は今日もまた海の幸多からむ事を祈りながら、おのがじゝの生業に出づる爲め濱へ集うた。

朝風穩かに涯の涯まで風ぎ渡る、淺綠色なす東雲の海の面は、宛ら絹を敷いたやう。この平和に満てる自然の中に、漁夫と海女とが、波打際の漁船を卸さんとして、力を併せ聲を揃へた曳々聲の暫らくは打ち續いてゐた。

と思ふ間、忽然として眼も眩むばかりの赫灼たる光がバツと四邊を輝かして、現ながらに物皆な光線の波の中にビリビリと蘇つたやうであつた。忽ち見る、今までは只うす暗くうす青かつた海の面は一樣に怪しき光に輝き溢れ、そのキラ／＼した一面の光の中に青い蓮華の花が眼覺めるばかりに咲き群がつてゐた。

何たる奇蹟ぞ！

男も女も齊しく驚いて、手を止めて海の方を眺めやつたが、餘りに不思議な其眺めに果ては唯呆然と、暫らくは片唾を飲んで、驚歎の聲さへ立てるものもなかつた。

抑もこの世に又とあり難き此不可思議な奇瑞は何事を語つてゐたのであらうか。わが法界の大偉人、法華經の大行者日蓮大上人は實に此日を以て安房國長狭郡小湊村の漁家に生まれたのであつた。

順序として今爰に高祖が家系の略を述べなければならぬ、その遠い御先祖は有名な大職冠藤原鎌足公で、高祖は實に二十三代目の孫に當らせられる。

鎌足の子不比等に四人の子があつたが、高祖が血筋を引いてゐられるのは第二子たる房前である。房前の子を大納言真楯と云ひ、その子が左大臣内膳次いで左大臣冬嗣、中納言良門を経て、贈太政大臣高藤に至つた。高藤の第二子を利世と言ひ、その子を共良と云ふ。累代相嗣いで右衛門佐良春、筑前守良宗、備中守共資等に到つた。それまでは何れも京都に居住してゐたのであつたが、共資の時に到り、一條天皇の正暦年間、初めて京都を去つて遠州敷地郡村櫛に住し、遠州の國司となつた。永延元年正月朔日、井谷八幡宮の社司某、ある日境内の傍なる井戸の中に小兒の泣聲を聞いたので、不思議に思つて探し求めたところ、容貌清らかな小兒を見つけたので、拾ひ上げて家に歸り、大切に育くむだ。ところが共資はそれを聞いて大變奇妙に思ひ、養つて自分の子となし、十五歳の時、元服して共保と名乗らしめ、娘と配はせた。そして、初め井戸の中にあつたと言ふところから、井伊と稱し、その井戸の傍に橋の木があつたので橋を家紋とした、是れ實に井伊家の先祖である。共保の子備中次郎共家、九郎共直、新太夫惟直、佐太郎盛直(奥山氏の祖)を

經て貫名四郎政直に到つた。政直は遠州山名郡貫名の郷を領してゐたので、貫名を氏としたのである。その子二人、行直、直友（石野氏の祖）と言つた。行直の子が重實、重實の子が重忠で、高祖は實に此の重忠と其妻梅菊との間に生まれた子である。重忠三十歳の時、平氏の殘黨富田基則、三浦盛時等が伊勢伊賀の兩國に兵を起したので、重忠も之に加はつて、その一支城若松城を守つてゐたが、軍破れて、徒黨の面々、何れも誅戮、流竄、放逐等に處せられ、重忠も其一人として安房へ流されて來たのであつた。高祖が生まれられた時は、父は魚漁を唯一の頼みの果敢ない生活で、幼名を善日磨と言つた高祖は、十有餘年の貧しい春秋を漁家の一隅で送り迎へたのであつた。

(二) 修學時代の二十年間

人にして人にあらず、佛の更生とまで敬ひ尊ばれてゐる高祖の事ゆゑ、幼

ない時から人並勝れて聰明で、何處となく偉大な風格を備へてゐられた。そして早くも法教に心を傾けられ、出家を以て願としてゐられたので、父母もその心を察して十二歳の時小湊千光山清澄寺に送り、法印釋の道善に就いて台密の事を學ばしめた。名を藥王磨と改めたのは此の時で、(一説には經王磨と言つたともある)。時に天福元年五月十二日であつた。致々として學ぶこと數年、十六歳の時には學徳共に秀で、長者を凌ぎ、山中の徒弟中その右に出づるものがなかつたので、師も大いに喜ばれて爰に初めて髪を剃り姿を更ためて蓮長と稱した。それより愈々努め勵みて、翌曆仁元年更に佛道の奥義を窮める爲め鎌倉に赴かうとし、往き／＼である日の日暮、武藏國隅田川の片邊りなるある家に宿を借りた。然るに此の家の主人は偏執の淨土信者で、その兒は佛像を玩具とし、主人は法華經を以つて襖の破れを繕つてゐたので、高祖は見て大いに驚ろき、懇ろに諭してやめさせた。それから夜を日に次いで鎌倉に行き、淨土を時の高僧然阿に、禪律をその道の碩學に就いて學び、得る所頗る多かつた。居る事四年、二十一歳の時再び清澄寺に歸つて「戒體

即身成佛義」を著はされた。之れ高祖が最初の著述である。

滞留數ヶ月の後復鎌倉に行つたが、偶々叡山の高僧尊海に知られ、その歸るに隨つて比叡山に登り、日夜研學、居る事殆んど十二年に及んだが、偶々天台の講ずる所が傳教大師の教義に反對してゐるのを知つて、之れより高祖の胸は深い疑問に鎖された。その間、或ひは近江の三井寺に赴むき、或ひは高野山に登り、或ひは當時宋より歸朝した名僧道隆にその道を問ひ、又法華堂の別當眞廣に昵むで東寺、仁和寺の藏書を一覽したり、その紹介によつて冷泉爲家から和歌を教へられたりした。その前後に戒法門、「色心二法抄」、師子頰王抄、「堯舜禹王抄」、諸願成就抄等著す所抄からす。かくて建長四年山を下つて、斷えて久しき故郷の空を志したが、その時高祖の胸中には新宗教創立の成竹が既に成つて居たのであつた。試みに、その歸る途次伊勢大廟に詣で、一心に祈られた高祖の言葉を聞け。

「昔世尊靈山に法を説き給ふ。然るに末世皆私見を以て世尊の正法を蔑す。蓮長不肖の身たりと雖も大誓願を發して法華の正法を立てんと欲す。あは

れ神明、願はくは此の正法の行者に力を降して弘通なさしめ給へ。」

以つて高祖が意のある所を知り得やう。十何年振りに歸つて來られた高祖の姿を見て、故郷の父母はどんなにか喜

ばれたであらう。嬉し涙に胸は塞がつて、とみには言葉も出なかつたが。

「蓮長よ、雨の夜風の朝汝の上を思ひ出で、今日は何所に宿つてゐるだらう、變りはないかしら、無事で居てくれよと思ひ願はぬ事はなかつたぞや。

さぞや、志もし遂げたらうから、願はくは之れからは長く此の地に留まつてゐてくれよ。師の道善坊も汝の上を頼母しく覺されて直ぐにも彼の寺を譲ら

んと仰せあるほどに、又となき幸福ではないか」と右から左から二人して説き勧められた。

高祖は聞いて深き憂愁に沈ませられた。親の恵み、師の情け、思ひやれば

やるほど辱なさに胸は一杯になり、止まつて海山清き故郷の土に安靜な生涯を送りたいのは山々ながら、その願ひにも代へ難き、更に尊とく大いな

る望みがあるのを如何せん。あはれ今末法の淺ましき、法教の道亂れに亂れ

て麻の如く、人は迷ひ迷つて亡者に似てゐる。衆生濟度の大念願、此の故にこそわが身は生まれ來たり、此の故にこそわが身は生きつゝある、その神をも佛をも凌がんず大勇猛心は、遂に一生を故郷の土に埋めやうといふ女々しく弱い感情に打勝つてしまつた。あはれ世の爲め、人の爲め、正法の爲めならば、親も物かは、師も數ならず、況して況んや己れ一身の安樂をやと、高祖は遂に猛然として起られた。

(三) 正法樹立

時に佛滅後二千二百〇一年、わが朝の建長五年四月二十八日の朝ぼらけ、七日の三昧を終つた高祖は清澄山の一角、爛々として荒海の波濤を昇り來つた旭日に向つて起つた。瞑目祈願、突如口を衝いて唱へ出だされたる南無妙法蓮華經の七字題目は、如何に凜乎として澄み渡りたる天と地とに響いたで

あらうか。あはれ此の時、日本六十餘州の法界に大いなる驚愕と鳴動と革命とを與へて、執權北條氏の威武をすらつひにその膝下に排伏せしめたるわが正法蓮華宗は初めて生まれたのであつた。此の日附近の僧侶を會して、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と唱破し、法華一人成佛すべしと説いて更に曰く、

「正直に方便を捨て、たい法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱業苦の三道法身般若解脱の三諦即ち一心に顯はれ、その人所住の處常寂光土である、一度び妙法蓮華經と唱ふれば、一切の佛一切の法一切の菩薩一切の聲聞一切の梵王、帝釋、閻魔、日月、衆星、天神、地神、乃至地獄餓鬼、畜生、修羅、人、天、一切衆生の心中の佛性を唯一音に喚び顯はし奉る、功無量無邊である、我が己心の妙法蓮華經を本尊と崇め奉つて我が己心中の佛性南無妙法蓮華經と喚び呼ばれて顯はれ給ふ處を佛とは申すのである、譬へば籠の中の鳥鳴けば空飛ぶ鳥の呼ばれて集まるがやうなもの空飛ぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするのと同じである、妙法蓮華

經と呼び奉つれば我が身の佛性も呼ばれて必ず顯はれ給ふ、梵王帝釋の佛性は呼ばれて我等を守り給ふ、佛菩薩の佛性は呼ばれて喜び給ふ、されば若し暫らくも持つ者は我れ即ち歡喜す、諸佛亦然り」と説き給ふは此の心故に三世の諸佛も妙法蓮華經の五字を以つてなられたので、三世諸佛出世の本懐一切衆生皆成佛道の妙法といふはこれである、是等の趣を能く心得て佛に成る道には我慢偏執の心なく、南無妙法蓮華經と唱へ奉るべきものである、云々。

念佛無間、禪天魔、何て傍若無人な言葉であらう、眞言亡國、律國賊、何て人もなげなる言葉であらう。並みある群集は一齊に耳をそばだて眼を怒らした。「我れは釋尊出家の本懐だ」と高らかに呼はつた自信に満ちた高祖の御聲も、年頃日頃、邪法に雙い暗むのである衆愚にはたゞの世迷言とも聞こゑたであらう。遂には高祖を呼ぶに狂人を以てし、地頭東條左衛門を初め何れも憤然袂を拂つて去つた。

かくて高祖は悠々として山を降られんとしたところ、法兄淨顯、美淨等袂

を控へて、東條左衛門が道に要して高祖を斬らんとしてゐる由を告げたので大事の前の小事、さらばと道を問道に探つて難を逃れ、一先づ兩親の許に歸つて、父母に戒を加へた。之れ本門受戒の初めである。法名を日蓮と改めたのも亦實に此の時、妙日と云ふ父の名、妙蓮と云ふ母の名から各々その一字づゝを取つてつけたのである。

高祖が思ひたまふには、

「わが尊とき法華の正法を普ねく天下に知しめて無明の闇に迷へる衆生を救ふには、かゝる海南の極地にあるよりは、天下の政權の集まれるところ權門のいらか雲の如きかの鎌倉に赴かねばならぬ」と。別れを惜しむ父母に再會を約して、旅衣着つ、馴れにし東路を鎌倉さして下つたが、路に花房を過ぎると、念佛信者たる其所の地頭某、折柄一字の彌陀堂を造營して開堂供養の導師たらん事を高祖に請うた。高祖快諾その講席に進むて曰る、には、

「釋迦一代の説法を分つて二とする。華嚴、阿含、方等、般若の四十餘年の經々は權經として時を待つ間の假の方便にして、後八年の法華經こそ如來

出世の一大事、これを眞實經と名づくるのである。そは私の義にあらず、四十二年の説法終りし時、佛の「是れまで種々に説法せしは皆方便にして未だ眞實を顯はさず」と宣ひしに明らかである。

「その上彌陀は西方十萬億土即ち他方の佛に在すのである。此土有縁の釋迦世尊、法華經第二の卷に、「今此の三界は皆我が有なり、その中の衆生は悉く我が子なり」とあるものを、我が親を捨て他人を尊とむを正しき道と言はれようか、さればこそ念佛等の御經は淺ましくも四十二年の内方等部の經なれば名ありて實なき極樂往生、頼む甲斐なき阿彌陀佛、その理も分らないで念佛開祖の法然御房、煙のやうなる阿彌陀佛を捉へ本佛釋迦を振り捨てよと人を惑はす地獄の罪業、例へば家に飼はれた狗子の下男奴僕に尾を振りて主人を見ては却つて吼ゆるに同じである。賤しきに押れ尊とを惡む、狗の眞似する諸宗の元祖の淺ましきよ、この事を天台大師は狗作務に押れたりと釋し給ひしぞや。」

舌端火を吐くが如きその言葉に、地頭を初め檀徒の人々大いに怒つて、こゝでも危害を加へられやうとしたが、僅かに逃れて鎌倉に往かれた。

(四) 辻説法

建長六年、高祖三十二歳の春、初めて松葉ヶ谷に庵を結び小町が辻に法幢を立てられ、朝に弔に出で、法を説き、夕べに庵に歸つて筆を執られた。寐ぬる間も食ふ間もつゆ怠り給はぬ正法の弘通、あはれ此の爲めならば血も涸れよ、肉もそげよ、この心雄々しく、一寸一秒の暇たりともわが身一つの安樂を顧みるやうな事は無かつた。麻の衣に無紋地の袈裟、鐵脚の素足に荒編の半草履を引擦りながら、小町ヶ辻の群集の中に起つて、

「我れは釋尊出世の本懷、法華經の行者日蓮なり。」
と、叫び出ださるゝ第一聲に依つて、先づ人々の荒膽を奪ひ、次いで唱へ

出ださる、南無妙法蓮華經の七字題目、さてこそ今この日本國中に未だ曾つて聞きし事なき外道の聲ぞ、つまりは我れ等の本願を呪ひに出でたる天魔破旬の喚叫ぞ。」と、一時に立騒ぐ群衆の頭上へ、

念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊。」と隙間もあらせず浴せかけ更に、「覺めよ人々、天に二日なく地に二王なきに、まして十方法界の大神教主たる佛の道に入宗十宗の差別あるべき道理は無い、今より歲月を遡ること二千二百〇四年、大聖釋迦如來將に涅槃の雲に隠れんとし給ふ時、出世の本懐一代の結經とせられたは只これ法華經の唯一乘だけぞ。されば爾前の四千餘年、華嚴、阿含、方等、般若の一切經は皆是れ三乘方便の權教として四十餘年未顯眞實と宣ひ無二無三と説かれたる、その眞實こそ五味中の醍醐味である。かくも尊とき一乘根本の法華經ありながら實教に迷へる權教の法師ども末代混濁の惡世に乗じて凡下凡俗の愚人を唆かし、正法の澄みたる流れを愈々益々汚さんとする。」と説き來つて、諸宗を片端より罵り去つた末、

「そもこの法華經は世尊が一期の化導を終りて後、これを滅後衆生の爲に遣して末世五濁の世を救はんとせられたが、會下に參せし藥王彌勒の諸菩薩にすら、述化他方の外時國不相應なりとて本門の弘通を許し給はずた久遠の一大因縁、別に大地湧出の本化薩陀を呼んで上行菩薩に別付されたる法華經の眞意、加之も上行出世の約束を示して曰はく、「正法千年、像法千年、末法萬年の初期に當りて闢譯堅固、白法陰没の秋なりと誓はれたぞや、また瑜珈論の佛識には、東方に小國ありその中に唯大乘の種性ありと。また肇公翻經には佛日西に入て遺耀東に及ばんとす此の經典東北に縁ありと、さらに我朝の傳教大師これを釋いて曰く、代を語れば即ち像の終り末の初め、地を尋ねれば則ち唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生闢譯の時なり」と、さてこそ人々、指を數ふれば佛日西天に没してより正像を経來たりしこと二千年、第五の五百歳、今や末法の初めに當りて正しく五濁闢譯の世となつたるぞ、天竺より東海の一小國と云へば遺耀の東に及べる我が日本國である、この日本國に唯大乘の種性ありとは慧心の唱へ

た圓機純熟、時は今、國は此所である。佛の未來記に末法の大導師として出世を約し給ひし上行菩薩はいづこに在すだらう。日蓮はその人に在らねど今この國に生まれ今この時に遇うて、權實大小こもく亂れたる末代の惡世に唯一人此の法華經の行者となり、地涌の菩薩の出でさせ給ふべき先驅となり、況滅度後の鋒鋦に當る事、さのみ分に過ぎたる業とも思はぬ。そもく去る年の四月二十八日生年三十二の曉に南無妙法蓮華經と唱へ始めて以來、もはや生命は法華經に奉つたる身ぞ。如來現在猶多怨嫉、まして末世の日蓮いかでか此の肉身が無事であらう、されど臭き人間の頭を以て無上道の如意寶珠に換ゆるかと思へば、凡そ日本國中に日蓮ほどの冥加者また二人とは有るまいと思はれる。正像二千年後の末法末代に生まれて釋尊出世の本懷を弘通するかと思へば、六萬恒沙の菩薩よりも立勝りて尊かるべき日蓮である。」

紅焰萬丈、その聲は雷霆の如く、姿は不動明玉にも似てつゆ冒しがたき威容に打たれた人々は初めは陞者の如く默然として物云はなかつたが、中に一

團の他宗の面々は、

「あはれ法敵、憎むべき賣僧、佛罰の觀面を見ろ」とばかり、瓦礫を投じ、馬糞を飛ばしたが、日蓮之れしきに屈さばこそ、晏如として動せざること金剛の如く、咽喉を轉び出る聲も朗らかに叫んで曰く。

「あら有難や、昔釋尊は法華經の爲めに九横の大難に逢ひ給ひ、不輕菩薩は法華經の爲めに杖木の難を蒙り給ひしところ聞く、今末法の世に生まれて瓦石の雨に打たる事、日蓮身にぞつて果報の極みぞ。」

惡口罵詈も何の物かは、瓦礫杖木何の恐る所ぞ、正法の爲め衆生の爲めあはれ此の身は粉に碎くるとも一毫も假借すまじの意氣雄々しく、聲涸れ咽喉裂くるまで叫び去り叫び來たつていつかな怯まなかつたのであつた。

かくて高祖三十三歳の暮より前後六ヶ年、市中の説法に庵中の著書に、法華弘通の念願一瞬として止む間無く、法衣の紐を結び解る、束の間にも尙ほ且つ誦して止まれなかつた題目の功力は次第に現はれて來て、法弟には日昭、日朝、日興等の高足を得、檀越には鎌倉武士の四條金吾頼基、進士太郎善春、

房州天津の領主工藤左近吉隆、武州池上の池上右衛門太夫宗仲、同國荏原の
荏原左衛門義宗、下總八幡の郷の富木播磨守胤繼、甲州波木井の南部六郎實
長等を得て、愈々勢ひを増させられた。その間岩本實相寺に赴いて藏經を
閲され、父君の喪に逢つて勿惶故郷に歸られたりなど、東奔西走、日も維れ
足らぬ趣があつたが、然かもその匆忙の中に在つて、寸暇を惜しむでは法華
經流布の著述に心をそゝがれ、弘長三年伊豆の伊東に流され給ふまでの七年
間に著はさるゝ冊數三十に垂むとしたといふに到つては、その努力精進のは
ごも推し量られて、有り難さ尊ささに涙が流るゝを禁じ得ないものがある。
かの有名な、立正安國論も此の間に出來たもので、その腹案は正嘉二年鎌
倉を去つて駿州岩本の實相寺に入り、約一ヶ年の間その藏經を繕いて天地災
厄の由來を經文の證據より探り出だせしもの、高祖一代の心血は洩がれて此
の一卷の中に流動してゐると言つても不可では無い。鎌倉に歸つて後、當時
の碩儒として世に聞こゑ、然かも法華經の歸依者として人の知らなかつた大
學三郎に字句の校訂を請うて、愈々前の執權北條時頼の前に差し出された、

時に文應元年庚申七月十六日、相次いで到れる天變地異に上下の人心恟々たる
折柄とて、文字の上に鬼神躍り、言論の下に魔王吼ゆるの概ある此の一卷
立正安國論を手にした時は、さすがの名執權最明寺入道も思はず顔色を失ひ、
心膽を寒くした。

(五) 松葉ヶ谷と伊東の御難

さらぬだに、常日頃より法界の強敵、邪法の流布者として、天下の憎悪と
怨とを一身に荷ひ給へる高祖、況して今臆面もなく天下の七難三災を叫んで
眞正面より堂々と時の天下取を喝破せし「立正安國論」を奉つた事とて、何
條此のまゝ無事であるべき。折あらば、隙あらばと覗がひ寄つてゐた法敵の
輩はこれこそ又となき究竟の時機ぞとばかり、一味相謀らひ、同類相語つて
時しも八月二十七日の夜暗を幸ひ、松葉ヶ谷の草庵を焼き討ちした。

折柄高祖は、今宵勤めの讀經も終り給ひて、星影に時を知らむと縁の遣戸を押し開け給ひし折から、此の春より檀越諸家の鑑定に叶つて人知れぬ守護に付けられた熊王四郎と云ふもの、庵の横垣を飛び越えて入り來たり、法敵共が今宵の企らみを告げまゐらせた。高祖は莞爾と打ち笑みながら見れば、茂れる庭の松の葉越しに闇を焦がす一團の遠火、赤く夜風に靡いて間も無く近づき來たれる氣勢に、日昭、日朝、日興を呼んで、釋迦佛と法華經とを負はせて先きに落とさし、高祖御自からは別に唯一人、露を踏むで靜かに背後の山に分け入り給ふた時、ごつと揚る関の聲諸共、四方より取り圍むた數百の投げ松明に正法一味の庵は炎々と燃え上つて、見る／＼灰燼に歸し去つた。後日になつて高祖自から當時の事を次の様に記された。

「正嘉元年に書を一卷註したりしを故最明寺の入道殿に奉る、御尋もなく御用もなかりしかば、國主の御用なき法師なればあやまちたりとも科あらじとや思けん、念佛者並に檀那等、また、さるべき人々も同意したるごぞ聞えし、夜中に日蓮が小庵に數百人おし寄せて殺害せんごせしかごも如何

したりけんその夜の害も免がれぬ。」
不思議にも斯うして虎口の危うさを逃れ給ひし高祖は、一先づ身を避けて下總の富木氏の許に赴むき給ひ、暫らくそこに留まつて、霜牙え渡る八幡の里の朝夕、中山の峰吹く木枯を餘所に百座の道場を開いて、いよ／＼こゝに轉法輪の光輝を放たれた。

「それ佛法の本意は王法を扶けて國家を守護し、風雨順次諸難を攘ひて一切衆生を救ふにある。然るに今の世高僧と呼ばるゝものも成覺世尊の意を知らず、妄りにその家々の宗祖に泥みて時機相應の教に反するの故に反つて國家を亂し、衆生をして暗きに迷はしむ、こゝに於てか日蓮深く之れを憂ひ、正法を説いてその邪見を翻へさんとすると雖も數年流弊の蹟を磨くに至らず、却つて佛敵の汚名を蒙むり且つ狂僧と嘲けられる。その故如何となれば念佛無間等の四箇の邪法を語ればである。」

高祖はこゝに又勘からざる信徒を得た。
明くれば弘長元年、不敵にも再び鎌倉に入り込むで元の松葉谷に庵を

結び、益々大音聲に叫び出だす法華の功力。そののみか、この世を毒惡の末世と罵しり、この國を謗法の惡國と喚き、今に見よ、天下取の北條殿一門の中に同士討あるべく、やがては此の日本國に押し寄せ來たるべき異國の災あるべしと、口にするさへ身の毛もよだつべき不幸の事を誰れ憚り氣もなく叫び廻られた。

彌陀の怨敵、禪律の惡魔、まして近ごろ鎌倉殿にまで見放された名越の日蓮め、遂に狂してあらぬたは言まで口にし出したるぞや、と、寄ると觸ると鎌倉中の噂とり、あれほどのものむざ／＼と生かし置いては今に如何なる事仕出來さんも知れず、日本の爲め佛の爲め今のうちに除かすむばとは、法敵は固より、幕府仕官の人々の齊しく口にしてゐた所であつたが、果たせる哉、北條陸奥守重時が嚴命として五月十二日の朝まだき、一隊の兵士は物をも言はず松葉ヶ谷の庵に亂入して高祖を高手小手に縛めまらせ、由比ヶ濱の浪打際に引き立てた。流罪の船はそこに装ひせられて、高祖を乗せて鎖を解かんとする一刹那、轉ぶが如く馳けて來た日朗上人、生死ともに師弟一

體ぞ。と鎖に掴まつて離れじと藻がいたのを、情も荒き警固の兵士共鐵鞭を揚げて發止と打てば上人は衣を裂しが如き悲鳴の下に砂上に仆れた。

高祖は船の上より見やり給ひて、水火の責苦にも動じ給はぬ雄々しき眼に思はず一杯の涙を溜め給ひ、

「やよ日朗」と呼びかけて、

「いかに日頃の教訓は忘れたるか。今淺ましき末法の世、お經を弘むれば杖もて打たれ、流罪に逢ふべしとある法華經の金言、鏡のやうに明らかである。思へば本門の廣宣流布疑ひなし、惜めず臆せず正法の爲め身を粉に碎けよ、日蓮例へ流さるゝともゆめ／＼布教に怠るな。此地と伊豆とは西東、海上遠しと雖も日登らば汝鎌倉にありと思はん程に、日西山に入らば日蓮伊豆にありと知れよ。」

「さらばぞ日朗」と宣ふ聲も次第に遠ざかる海と陸、見交す顔も臆ろ／＼に隔たり行つて、親子も及ばぬ師弟の姿は、やがて立ち迷ふ比由ヶ濱邊の朝霧に隠れ終つた。

かくて流罪の船は夕暮近く伊豆の岬に近づいたが、陸に着くと思ひの外、船は名も知れぬ沖の離れ岩に立ち寄つて、そこへ高祖唯一人を打ち上げたまゝ後も見返らずに漕ぎ去つた。さては流罪とは人の手前を繕ふ假の名で、實は日蓮の身を千尋の底ひも知らぬ海の底へ沈め終らむ下心であつたかと思はれたが、固より正法の爲め捧げし一身、斯くなるは覺悟の前と、そのまゝ岩上に安座して暮れ行く天の一方を打仰ぎながら海原遙かに響き渡る音吐朗々、聲を限りに法華經を唱へ給ふ、折から不思議や立ち置めし夏霞の奥より一葉の小舟颯々と漂よひ來たつて、高祖を助け參らせた。船中の漁夫、名は川奈の彌三郎、氏も素性もなき卑しき身ながら何となく高祖が凡ならぬ御姿に崇敬の念止めも敢へで、三十餘日の間篤くもてなしまゐらせたので、高祖も痛くその徳義に感じ給ひ、後伊東の配所に移られてから彌三郎の許へ送られた手紙にも斯う書いてあつた。

(前略) 日蓮去五月十二日流罪の時その津につきて候しに、いまだ名をもき、およびまゐらせず候ところに船よりあがりくるしみ候其どころにねん

ごろにあたらせ給候し事はいかなる宿習なるらん過去に法華經の行者にてわたらせ給へるか今末法にふなりの彌三郎と生れかわりて日蓮をあはれみ給か、たとひ男はさもあるべきに女房の身として食をあたへ洗足てうづみ給外さも事ねんごろなる事、日蓮はしらす不思議とも申ばかりなし、ことに三十日あまりありて内心に法華經を信じ日蓮を供養し給事いかなる事よしなるや、かゝる地頭萬民日蓮をにくみねたむ事鎌倉よりもすぎたり、みるものは眼をひききく人はあだむ、ことに五月のこなれば米もどぼしかるらん日蓮を内々にてはぐくみ給しことは、日蓮が父母の伊東かわなと云どころに生れかはり給か (下略)

弘長元年六月二十七日

日 蓮 花押

船守彌三郎殿許遣之

高祖はそれより引止めらるゝ衣の袖を振り切つて彌三郎の許を去り、自ら伊東の配所へ名乗り出られたが偶々領主莊司八郎左衛門朝高疫病にかゝり

て命旦夕に迫つたところ、高祖その枕邊に侍して熱心平癒の讀經をせられたので、さしもの病も忽ちに全快した。それより朝高は高祖を徳とし、篤く法華經の功力に感じて一門一族の律宗を法華宗に改め、同國葦山の江川太郎左衛門吉久、又高祖に歸依して朝夕の布施を運び、そのみか四條進士等の面々遠く鎌倉から訪ねて来て衣服調度を送り、高祖は配流の身でありながら些の不自由をも感じ給はず、却つて多くの信者を得て法華の功德を弘め給うた。かくて此の地に留まり給ふ約二ケ年、弘長三年の二月赦されて鎌倉に歸り給ふ。日昭、日朗等の喜びは言すもがな、檀越の人々何れも再生の思ひをなして法交前よりも更に濃やかに、法華經の弘通に益々努められた。六老僧の中特に異彩を放てる日持上人の來つて御弟子の列に加はつたのも此の年である。然かも不思議な事には高祖を捕へて有無を云はせず配流に處した發起人北條重時はその年の十一月三日名も知らぬ病ひの爲めに死し、十一月二十二日には天下の望みを一身に荷つて、この人ならではの思はれてゐた最明寺入道時頼死し、何となく人心穩やかならざるさへあるに、わけて激しく打續き

云

し飢饉疫癘、大火は鎌倉の半ばを焼き盡し、海嘯は由比ヶ濱より押し寄せたので、かつて高祖が叫び給ひし如き七難三災今にも一つになりて此の日本を粉碎するかとさへ思ひなされ、上下色を失つて恐れ騒いだ。

(六) 小松原の難

かゝる不安なる動搖の中にその年も暮れて、明くれば文永元年の秋八月、葛の裏葉を吹く夕風身にしみ、と露は滋く夜は更けて鎌倉山を鳴き渡る雁の鳴く音の悲しさにつけ、高祖は荒磯の風さへつらき故郷の海に只一人残し参せたる母の身の上を思ひ出られた。此の年頃日頃法の爲め衆生の爲め安否を訪ねまゐらす事もせざりしが、思へばわが身はこゝに法華經の行者として權門の邪教に打たれ、謗法の外道に虐たげられて日も安き事なき厄うき身の明日をも圖り難き生命なるに、母は年老ひ給ひて徒らに死ぬるを待つ身の

云

果敢なき身、幸ひ今は身に逼る災禍も無きに、此の間にたづねまゐらせて老
ひの御心を慰さめまゐらせ、兼ねては荒れ果て給ひぬらん父の墓を掃ひ、清
澄山に舊師の迷夢を醒まさせまゐらせばやと、日昭に庵の留守を頼み、折し
も更けし秋風を法衣の袖に受けながら日朗日澄の師弟三人散り行く木の葉の
様にも似て飄々と鎌倉をさまよひ出られた。
旅衣きつ、馴れにし道ながら、年久しく見ざりしものから、さすがに生れ
し故郷の山海、一として傷心の種ならぬはなき中に、わけても高祖の涙を絞
りしは、老ひて總髪悉く白くなり給へる母人が、入り來つたわが子の姿を見
ても物一つ云はず、身體も動かされなかつた事である。まして見まゐらすれ
ば布子いぶせき床の上、縁者や知る邊の人々まで寄り集ひて涙をすゝるもの
さへあるに、高祖は不思議に思ひつゝ、近づき給へば、何事ぞ、母は既に息絶
えて呼べど叫べど効験が無かつた。はるゝと露ふみしだきて幾十里、やう
やく辿り着きて嬉しや母の喜び給ふ顔見まゐらせんと思ひしものをと、至孝
の高祖しばしは亡骸に取りすがつて涙に咽んでゐられたが、やがて思ひ返し

て懐ろより取出だし給ひし珠數一聯、さら／＼と揉み返せば、不思議や死人
の眼自づと開いて、蘇生の喜びを見るを得た。

「わが子であつたか。」

「母上よ、なつかしかりし。」

と互に語らんとしても嬉しさに多くは語り得ざる無上の喜び。四邊の人々は
固より、近郷近在語り傳へ、聞き傳へて、世にも有り難き法華經の功力に今
更の如く感じ合ひつゝ、爰に又新らしく多くの信徒を得た。

此の上は清澄山に舊師を訪ひ參らせて、念佛の迷ひより救ひ奉らんと、あ
る日山に上つて心からの正法の教へ、口を極めてすゝめたけれど、道善坊は
當國隨一の念佛者にして兼ねて地頭たる東條左衛門や、年來の檀徒、寺中の
僧侶どもに心を置いて、つひに高祖の教へを容れなかつた。高祖は之れを生
涯の恨事としてその著「報恩鈔」の一節に左の如く云はれてゐる。

「故道善坊はいとし弟子なれば日蓮をばにくしとおぼせざりけるらめど
きわめて臆病なりし上、清澄をはなれじと執せし人なり、地頭景信をおそ

ろしといひ、提婆豊伽利に異ならぬ圓智實城が上と下とに居ておごせしを
 あながちにおそれていごとをおもふとしごろの弟子をだにもすてられし
 人なれば後生はいかにかと疑ふ。」
 かくて高祖は華房の蓮華寺に暫しの足を留めて信徒の教化に法敵の屈伏に
 力を盡されてゐたが、その霜月の十一日、かねての大檀那たる天津の工藤左
 近吉隆に招かれて、日朗日澄等七八人を引き連れ、夕暮近く天津に近い小松
 原にさし掛られた時しもあれ、
 「發止」夕闇に鏑の音して喉を狭める萱原の中から一時に起つた數百の伏勢
 何事ぞといふ間もなく早ひしく前後左右を取り圍むで、射る矢は雨の如
 くうつ太刀は電火の如く閃めいた。此方は珠數一本が頼みの得物、況して十
 人にも足らぬ小勢ゆる、手向ひは無用ぞと、高祖先づ口に題目を唱へながら
 身を躍らして圍を衝き給へば、行手に蹄の音して前に立ち塞がつたのは、東
 條左衛門景信であつた。真向に振りかざした大太刀、物をも言はず振り下ろ
 した利那、あはれ高祖の身は眞二つと思ひの外、傍に引添つてゐた徒弟鏡忍

蝗の如く飛び出で、身代りの血煙もろく仆れた間もあらせず、再び打ち下ろ
 した第二の太刀風を高祖突嗟に珠數を以て受け止められたが鋒銚あまつて右
 の額に傷を負はれた。
 折しも高祖の運きを案じて迎ひに出でた工藤吉隆、かくと見るや郎黨二十
 餘人と共に疾風の如く多勢の間に割つて入り、はや暮れ果てた宵闇の死に物
 狂ひ、目覺ましく戦つて討死したが、その間に高祖は、松原に濃く立ち罩め
 た霧にまぎれて、とても助かるまじき生命を又全うされた。後で高祖自から
 檀越の波木井氏に送られた手紙にこの時の状を記して、
 「如來現在猶多怨嫉、況滅度後の法門なれば、日蓮此法門の故に怨まれて
 死んことは決定也、今一度舊里に下つて親子人々をも見ばやと思ひ文永元
 年甲子十月三日に安房國に下つて三十餘日也、同十一月十一日には安房國東
 條の松原と申大道にて申酉の時計にて候しが數百人の念佛者の中に取籠ら
 れ、日蓮は唯一人、物の用にあふべき者は讒に三四人候しかども、射る箭
 は雨のふるが如く打太刀は雷光の如し、弟子一人當座に打殺され候又二人

は大事の手を負候ぬ、自身計は射れ打れ切れ候しかども如何候けん打漏さ
れてかまくらに登る。」
と言つてゐられるに見ても、當時高祖の御身の危ふかつたことが知り得やう
之を小松原の法難といふ。景信は此の時受けた傷忽ち腐れ、肉腫れ上りて大
熱を發し、苦悶の末遂に死んだが、里人は之を言ひ傳へて佛罰となし、益々
高祖の威徳に感じた。高祖は吉隆の難に死せるを悲しみて、妙隆院日國上人
なる法名を與へて出家の儀式を以て葬むり、鏡忍の死を憐れみてその後寺
を建て鏡忍寺と名づけられたが、その寺にいまだに傳はつてゐる一領の古袈
裟には血痕うす黒く斑らに残つてゐて、今尚ほ慘として六百餘年の昔を眼前
に語つてゐる。而して今尚ほ高祖の像に綿を纏うてゐるのは、小松原の難を
免れて市ヶ坂の山中に落ち延び給ひし時、傍を過ぎし一老婆、高祖が額の刀
痕より血の滴るのを見て、自から冠つてゐた綿帽子を取つてその額に冠せま
ゐらせたのに由來してゐるといふ。
さて、かくて不思議にも小松原の難を免れ給ふた高祖は生き残れる日朗日

澄等を伴うて、二個年の間上總下總常陸下野等一圓を教化し、更に轉じて房
州に入られたが、文永四年さしも心にかけてまゐらせた母が逝かつたので、泣
くくその墓に假の板屋を結び、百日の讀經供養を果して後鎌倉に歸られん
とした。路上總進生郡の大悲山笠森寺にさしかゝられた時、はらくと降り
出でた時雨を笠によけ給ふて、

うきに降る涙の雨にぬれじとてけふ笠森を身につくるかな

と詠じ給ひ、その年は下總若宮なる富木胤繼の館に送りて、明くれば文永
五年の春、松葉ヶ谷の草庵に長き旅路の衣を脱がれた。



(七) 龍の口の奇瑞

之れより先き、鎌倉には年々歳々打ち續く天變地異、飢饉疫癘はいつ止む
べしとも思はれざるのみか、無量寺に營まれし國家安穩の大修法會の真最中、

俄然として落ち来たつた暴風暴雨に寺堂粉砕して死人の山を築き、龜ヶ谷の峰々は一時に崩れて麓の人家を悉く地中に埋め、文永五年八月十七日には大地震してそれに伴へる大火は相摸一圓を嘗めて宛らの活地獄を現出した。それさへあるに何事ぞ、四百餘州の大支配者として勢威遠く歐羅巴の天地をまで震撼せしめた蒙古國、爪牙を遂に日本國にまで伸ばし来たつて此の年威赫の使者を送つて来た。

蒙古來、上下轉動色を失つて、あはれ今にも日本國中は夷狄の毒牙に引裂かれ掻き抓られんすの恐れに、爲すべき事も手に付かすに只慌てふためいてゐるのを外に見て、松葉ヶ谷の草庵に静かに筆を執られた高祖は、忽ちに左の一書を書いて、先づ時の執權職たる北條時宗に送られた。

謹令言上候、抑正月十八日西戎大蒙古國牒狀到來、日蓮先年集諸經要文勸之、如立正安國論、少不違附合、日蓮當聖人一分知未萌故也、然間重奉驚此由、速調伏蒙古國而令安泰我國、被彼調伏事、非日蓮不可叶也、諫臣在國則其國正、爭子在家則其家直、國家安危在政道直否、佛法邪正依經文明鏡、

(中略) 今日日本國既奪蒙古國豈不歎乎、豈不驚乎、日蓮申事無御用定後悔可有之、(中略) 敢非日蓮私曲偏懷大患故也、爲身不申之、爲神爲君爲國爲一切衆生所令言上也、恐々謹言、

文永五年十月十一日

日蓮 花押

これに續いて政道輔佐の任に當れる鎌倉中の權門、蒙古調伏の任に當れる一代の高僧等に同じ様の書狀を併せて十一通送ると共に、只さへ上下の憎しみを受けて常に敵の渦中にあるに等しきわが身、挑戰狀にも等しき書狀を送りしからは何れ無事にあるべくも思はれずと、信徒檀越等に最後の覺悟を促がす爲め左の如き書狀を發せられた。

「大蒙古國の牒狀到來に就て十一通の書狀を以て方々令申候、定めて日蓮が弟子檀那死罪一定ならんのみ少も之を驚くこと勿れ各々要心あるべし少も妻子眷族を思ふこと勿れ權威を恐るゝこと勿れ今度生死の縛を切て佛果を得せしめ給へ。」

「たとへ首を鋸にて引切り胴を稜鋒にて貫かれ足は枷を打て錐に捫まるゝと

も生命の通はんはごはた南無妙法蓮華經を唱へて唱へ死に死せよ。」
 明くれば文永六年の四月、蒙古の使者再び來たつて答へを促せしのみか、
 邊海對馬の民を捕へて己れの國への土産として拉し去つた。あはれ世は末法
 五濁の亂雜。國は愈々他國侵逼難、かゝる世に生まれ合せて正法の爲め衆生
 の爲め天下を敵に戰へるわが身は、思へば風前の燈にも似て明日をも知れぬ
 生命なるに、せめては今生の名残、後の世への紀念にせばやど、その年六月
 手書の法華經一卷を携へ、甲州の吉田口より登つて富士の半腹に埋めたまふ
 た。今なほ呼んで經嵩或ひは經ヶ嶽といふのは此所である。高祖の齡時に四
 十八歳であつた。

之れより先き高祖より受けられた挑戰狀に對して、扇ヶ谷の淨光明寺行敏を始
 めとして、諸山諸宗の面々、何れも同じやうなる日蓮彈劾の訴狀を問注所に
 送つたが、わけても極樂寺の良觀は北條一門の歸依頗る篤きを頼むで、巧み
 に奥深く取入つて高祖の處分を頼み込み、果ては權威ある上臈女房達にまで
 手を廻して閨門より幕府の心を動かさうとした。天下の早魃、雨乞の祈りに

こそ力を盡すべきに、さはなくて、緇衣の身を以て私の怨みに、心を碎いて
 ゐる淺ましき。心あるものは、さすがに世も末ぞ、法の燈も消え果てたりと
 密かに打ち嘆き、去つて法華に歸依するもの愈々歩きを加へたので、彼等他
 宗の僧徒等の嫉妬の火は愈々益々煽られて行つた。

學徳適ばれの高僧達の訴へ、勢威比ひなき權門の憎しみに、鎌倉の評定所
 も遂に捨て置き難くて、文永八年九月十二日、上を蔑り下を惑はし、名を佛
 法に借りて國を亂し民を迷はせるもの、その罪狀の下に、夕日に近き申の刻
 に平左衛門尉頼綱自から手勢三百騎を引具して松葉ヶ谷の草庵を踏みしだき、
 今しも徒弟の前に神力品を講じてゐられた高祖を高手小手に縛めまゐらせて
 鎌倉の大路より小町通り、若宮大路をも打ち過ぎて、極樂寺の切通しより七
 里ヶ濱の磯傳ひ、龍の口の刑場に引かれた時は日はとつぷりと暮れ果てた。
 高祖馬より下り給ひて、首の座に近づきながら、之れを最後と思ひ給へば
 御聲もいと嚴かに、

「この世界の中には日本國、日本國の中には相摸の國、相摸の國の中には片

瀬、片瀬の中には龍の口こそ日蓮が命を捨つるところなれば、この屍は朽つるども此の地は末法萬年の後までも光り輝やく寂光の土となるであらう、あなかしこく、」と宣ひし後、敷皮の上に端座して、許されてお傍近く差俯むきし四條頼基が男泣きに泣き入りし體を見給ひ、
「殿よ、これほどの願望に何で泣き給ふ事がある、笑へかしこく、さしもに平生の約束を忘れられたか、違へられたか、さりとては不覺で在さう、」と言ひ捨て給ひて、眼目合掌、唱へ給ふ題目もいと朗らかに、今死ぬる身とは思はれない程従容として頭に刃の當るのを待たれた。
切手は後ろに廻つた。振り上げし蛇胴の名劍今や打ち下ろすよと見えたり、利那、先き程より鳴りはためいてゐた雷霆一層の威を逞うして、暴風豪雨砂を捲き石を飛ばすよと見えたり、不思議や刀は三段に折れ、空を切つて閃めき渡る雷光の中に高祖は自若として静座してゐられた。
時に幔幕の外に聲あり、馬乗り捨て、息せきながら入り來つたのは南條七郎、鎌倉の評定一變して日蓮の死罪赦免、但し重ねての御沙汰を待て、この

下知狀を齎らした。吁、人にして人に在しなすまで、誠に釋尊の再生、例へ天下の權威を以てしても高祖の身は遂に如何とも成し得ないのであつた。

(八) 佐渡の配流

斯うして危うき御命を助かり給ふた高祖は十三日の朝、愛甲郡依智の里なる本間六郎左衛門重時が邸へ引かれ、暫らくそこに滞在して又の沙汰を待つ事となつたが、遂に十月の十日佐渡へ流罪と極まつた。越路より波路遙かに四十九里、加ふるに北海の怒濤常に激しく、昔より此所へ流されたもの、生きて再び歸れた例しは無い事とて、高祖も所詮屍を荒海に曝し給ふ覺悟して愈々といふその前日鎌倉の土牢にある愛弟日朗の許に人傳して一書を送り、翌十日嚴しき警固に取り圍まれて依智の里を出で、その月の二十一日越後の寺泊に着かれた。こゝより下總なる富木播摩守に送られた手紙の一節に云ふ。

(前略) これより大海を亘て佐渡の國に至らんとするに順風定らずして其期を知らず、道の間の事、心も及ぶことなく、また筆に及ばず、たゞ暗に推度るべし、また本より存知の上なれば始て嘆くべきにあらずと之れを止む(中略) 勸持品に云く諸々の無智の人ありて悪口罵詈す云々、日蓮この經文に當れり、及加刀杖云々、日蓮は此經文を讀めり、數々見擧出、數々とは度々なり、日蓮擧出度々流罪は二度なり、法華經は三世説法の儀式なり、過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品也、今の勸持品は未來の不輕品たるべし、その時日蓮は即ち不輕菩薩たるべし(下略) 寺泊に止まる事六日、月の二十七日に船出をしたが、今まで晴れ渡つた海上俄かに荒れて蒲原郡角田とやらんに吹き流され、その明くる日の朝風を待つて再び纜を解いたが、又もや狂風怒濤を捲いて船危うく覆らんとせし事幾度、帆綱は断たれ拵は流れて、漸やく佐渡の國加茂郡松ヶ崎といふ小濱邊に着いた。本間の館は新穂の里とてそこよりや、隔たつた遠方だつたが、護送の官人は無情にも高祖を濱邊に置きまらせたま、知らぬげに越後を指し

て歸り去つた。高祖はされど露恨み給ふ氣色もなく、船に勞れ食に飢ゑた身を提げてその夜はどある岩陰に冷たき夢を結び、明くる日やうく本間の役所に入れば、又そのまゝ直ちに引立てられて塚原といふ人の狼りに通はぬ草原へ追放された。時しも十一月の空寒く、況して北海の一孤島、死人を捨つる三味原の、そここゝに倒れかゝつた卒塔婆は、折から傾むく夕陽に悲しき影を地に落して、見入る流人の心に無量の感慨を催はさしめるものがある。わけて夕暮より雲は閉ぢ風は吹き荒れて、折檻として降り來たる俄かの大雪に法衣一枚の高祖の御身は凍らんばかりであつたが、之れしきに動すればこそ、原中の辻堂に端座して心靜かに法華經を誦してゐられた。 「たとひ我れ此の雪に埋もれて身體は死するとも、この心と法とは末法萬年の盡未來際まで断じて死なぬ。乃至また錦の袈裟を懸けて堂伽藍の壇上に死して況滅度後の行者となられやうか、人知れぬ北海の孤島に放たれ雪に凍え食に飢ゑて死ねばこそ、靈山の佛勅を二千餘年の東海に荷へる我れである、この雪積らば積もれ、今こゝに日蓮を埋め殺すまで、この風吹かば吹け、今

こゝに日蓮を吹き殺すまで。」
一難來たつて意氣更に昂り、一死重なつて勇氣更に倍す。雪降らば降れ、
風吹かば吹け、と、その日も翌くる日も、又翌くる日も日夜不動、端然とし
て覺悟の胸を固め給ふた高祖の御身は宛から大磐石の觀があつた。
こゝに日を経るに従つて、島中の人々は、都より日蓮と云ふ不敵の僧捕は
れて塚原の辻堂に在りと聞く、至べての佛門を惡口罵詈して、北條殿始め都
の高僧たちの怒りに觸れし惡僧とか、面白し、往いて生恥ひんむいてくれん
と、一人來たり二人來たつた中にも、阿佛房といふ念佛の行者、彼あはよく
ば及の鋪として念佛無間の墮地獄と呼びし息の根止めて呉れん、と、ある夜
更け渡る原中に辻堂の戸を叩いて高祖が面前に突つ立つたが、法華の功力か
高祖の威徳か、膽くもその夜の中に殺氣の膝を折り懺悔の身を抛げて島中第
一の歸依者となり、名も日得と改めて夫婦して糧に衣に密かに高祖を助けま
ゐらせた。かの有名な「開目抄」も阿佛房から借りられた筆と紙とを以て書か
れたのであつた。

「今日蓮末法に生まれて妙法蓮華經の五字を弘めてかゝる責苦に遇へり、佛
の滅後二千餘年日蓮の外法華經の故にかくまで身を苦しめたるものありと
も覺えず、日蓮本國の萬人は惡まば惡め、釋迦多寶十方の諸佛にだに譽め
られまゐらせばその面目喜び身に餘れり。」
「道雪に没し夜星なき時來たりて法を問はるゝや是れや如來の便なるべし、
さても御身の頼む淨土の三部彌陀經のその中に舍利佛尊者經に得る道無く
して法華經第二の會座にして妙法蓮華經を以て本光如來となり給ひしとぞ
ある、その上觀經彌陀四十八願の其中にも正法を謗るものは救はじと彌陀
如來に契ひしにあらすや、かゝるを知らざるかはしたなき行者かな。」
「日蓮は幼若なれども法華經は釋迦佛の御使ぞかし、僅かの天照大神正八幡
など申すは此の國には重むすれども梵天、帝釋、日月、四天王に對すれ
ば小神ぞかし、されど此社人などをあやまちぬれば只人を殺す七人半なん
ぞ申すぞかし、太政入道隱岐法皇等の亡び給ひしは是れ也、是れはそれに
似るべくもなし、教主釋尊の御使なれば天照大神正八幡宮も頭を傾むけ手

を合せ地に伏し給ふ事也、法華經の行者をば梵釋左右に伴ひ給へり、日月前後を照らし給ふ、かゝる日蓮を用ふることも悪く扱ひ給は、國亡ぶべし、何に況んや數百人に惡まれ二度までも流されぬ、此國の亡びん事疑なし、且つ誠めて國を助け給へ、日蓮が控ふればこそ今すでに安穩にありつれども法に過ぐれば罰に當るなり、又此度も用ひずんば大蒙古國より討手を向け日本國を亡ぼさるべし。」

「佐渡の國に流され給ひし以前の法門は只佛の再前經とおぼしめせ。」(三澤鈔) 又念佛禪律諸宗の法敵が數多尋ね來つて法願を營むだ時のさまを記された一節にいふ。
「いづこも人の心のはかなさは佐渡の國の持齊念佛者の唯阿彌陀佛、生喻房、印性房、慈道房等の數百人より令して僉議すと承る、聞ゆる阿彌陀佛の大怨敵、一切衆生の惡智識の日蓮この國へ流されたり、何となくとも此國へ流されたる人の始終いけらるゝ事なし、設けらるゝともかへる事なし、また打殺したりとも御とがめなし、塚原といふところに只一人あり、いか

に剛なりとも力つよくとも人なき處なれば集つてゐころせかしと云ふのもありけり、又なにさなくとも頸を切らるべかりけるが守殿の御臺所の御懷妊なればしばらくはからうべしと終には一定とさき、また云、六郎左衛門尉殿に申てきらすんばはからうべしと云、多くの義の中にこれについて守護所に數百人集りぬ、六郎左衛門云、あなづるき流人にあらず、過あるならば重連が大なる失なるべし、それよりは只法門にてせめよかしと云はれば、念佛者等、或は淨土の三部經、或は止觀、或は眞言等を小法師が首にかけさせ或はわきにはさませて正月十六日にあつまる。佐渡の國のみならず越後越中出羽奥州信濃等の國々より集れる法師等なれば塚原の堂の大庭山野に數百人、六郎左衛門殿兄弟一家、さらぬも百性の入道等、かすをしらす集りたり(中略)日蓮は暫くさわがせて後、各々しづまらせ給へ、法門のため聞こそ御渡りあるらめ惡口等よしなしと申せしかば、(中略)さて止觀眞言念佛の法門いち／＼にかれが申様をらつしあげて、承伏させてはさようごつめ一言二言にはすぎず、鎌倉の眞言師禪宗念佛者天台の者よりもはか

なきものごもなればたい思ひやらせ給へ、利劍をもてうりをきり大風の原
をなびかすが如し、佛法のおろかなるのみならず、或は自語相違し、或は
經文を忘れて論といひ釋をわすれて論と云、善導が柳より落、弘法大師の
三鈷を投たる、大日如來と現たる等をば、或は妄語、或は物にしるべる處
を一々にせめたるに、或は惡口し或は口を閉ぢ或は色を失ひ、或は念佛ひ
が事也けりと云ものもあり、或は當座に袈裟念珠を捨て念佛申すべきよし
誓言を立る者もあり(中略)

ちやつた。日朗の喜びは言はずもがな、長き牢獄の生活に重くなつた足を引
きすり、山を攀ち川を渡つて佐渡が島根の降り積む雪の中に久し振りに
高祖を見まわらせたが、餘りの嬉しさにこみには言葉も出でず唯涙にのみ咽
んでゐたといふ。もとより限られた日數の事とて御傍にある事僅か一晝夜の
後飽かぬ別れに袂を絞つて再び鎌倉に歸られたが、之れより又高祖を訪ね
まゐらせた事前後八回に及んだといふ。そののみか、日興熊王の兩人も又相
携さへて配所へ渡り、常に師の房の傍に待りて旦夕の勞を慰さめまわせた
が、間も無く鎌倉の沙汰として高祖は一の谷といふに移され、家を供された
のみか、衣服調度に到る迄與へられて、前とは變つた待遇に、昨日までの辛
苦も夢のやう、それよりは筆硯に心をひそめて一年に満たぬ間に、觀心本尊
抄を始め十種に餘る著作をものされた。

論に叫び給ひし事一々圖に當つて來たので、執權時宗もさすが我を折つて遂に高祖赦免の御狀を奉行宿屋光則にまで下された。光則即ちそれを日朝に與へたので、上人は一度は夢かと疑ひ、更に誠なるに驚ろき悦びつゝ取る物も取り敢へず直ちに鎌倉を發足した。時に文永十一年二月八日、都の春は花さへ咲いて鳥の鳴く音も長閑なれど、越路は寒き雪又雪、日朝上人は心も空に足地に着かず、三月七日といふに佐渡の小木濱について、夕日傾むく山路を一分一秒も休む時なく息せき切つて一ノ谷に志した。鎌倉を立ち出でて早一ヶ月、一日一食の乾飯に海山の旅路を走せ來りし事とて身は綿の如く勞れたれども心は勞れず、杖も失ひ草鞋も切れ果て、漸やく御座所の傍近く來た時は、最早息も絶え〜に成りて一步も進み得なかつた。たゞ苦しき聲のみ振り立て、

「日朝鎌倉より御迎ひにまゐりたり。」と呼ばはるのみ、それさへ次第に細つて行つて草の葉末の蟲の鳴く音にもまがふやうになつた時、庵にも聞き付けて聲を知る邊に日朝が尋ね來つた。

「日朝殿か。」
「日朝殿ではないか。」と呼び交はす聲も夢うつゝ、
「師の房の御赦免だ。」と聞いた時の日朝の喜び、二人は雲まだ残れる闇の中に手を取り合ひ伏し轉んだ、唯嬉し泣に涙を呑むだ。
佐渡が島根の沖つ白浪立騒がぬ日はよし有りとも、此の島に流されて生きて再び還りしものは古來一人たりとも無しと言はれた。高祖も覺悟は同じ思ひに、どうで終りは此の島の土となるものと觀念の臍を固めてゐられたのに不思議にも赦免と聞いて我れながら奇異の思ひに堪へられなかつた。思へば幾たび死なんぞして死なす、殺されんぞして殺されざりしぞ、今又捨てし生命を助かりて都の春に遇ふ事の、我れながら奇しき因縁よ、と、春あけ渡る鶯の鳴く音も晴れて朗らかなる三月十三日の朝ぼらけ、谷の庵りを後に見なして阿佛房夫婦を始め島中の老若男女に名残を惜しまれつゝ、十二日の旅路に幾度かの厄難を免かれて、その月の二十六日事なく鎌倉に入られた。四條進士その他の檀越の喜悅は言ふも更なり、此の人々等が心して日夜に工事を

急がせて成つた夷堂橋畔の新しい庵室に、旅に汚れし法衣を脱がれその夜は打寛ろいだ夢に長き三年餘りの疲れを休めたまふた。

(九) 宗門免許

然るにその翌月の四月八日、執權時宗の命として、夷堂橋畔の庵室に使者が来て、高祖は殿中に召出された。

何事ぞ、赦されまじき罪を赦されて再び鎌倉の土を踏みしさへ不思議なるに、昨日までは異端の妖僧外道の悪魔として北海の孤島に捨て殺し同然にされた身を、今日慰懃なる使者を以て執權自から殿中に召し出ださるゝとは、高祖晴れやらぬ疑ひの胸を法衣の袖に掻き合はせて赴むき給へば、さても居並びたり鎌倉中の大名小名、思ひくの装ひ美々しく綺羅星の如く控へた正面執權北條時宗、膽甕の如しと謳はれたに恥ぢぬ面構、さすがに雄々し

く静々と入り来たたまへる高祖をちつと見据ゑた。並大抵のものならば思はず頭を垂れ手を突いて面を上げる事さへ出来難かるべき中を、高祖は怯めず臆せず悠々と設けの座に就かれた。

時に平左衛門尉頼綱進み出で、高祖が恙なかりし御祝を由上げた後、「上人が前々よりの御言葉、わけても「立正安國論」中に説かれし七難三災の儀、悉くにはあらねど大方符合す。あの中なる他國侵逼難の一事、若し蒙古の襲來を指さるゝならば、何時頃にも現はれ来るべきか。頼綱に委細申し聞けありたい。」と言ふと、高祖は御聲も嚴然と遙かに時宗の方に眼を注ぎ、「御尋ねに答へ奉る前、今後此の日蓮が申し上げることを必ず御用ひあるべきや否や、その儀を確と承はりて後思ふ旨逐一申し上げませう。」と一步も退かじの威容端然と問返された。頼綱聞いて思はず冷汗を流しながら物も得言へず無言でさし控へてゐると、高祖疊み掛けて、

「詮ずるところは法華經を天下の法門として用ひ給ふか否かの御返事を承はり度いのである。無上道の法華經を用ひずして無得道の諸宗を信じながら、

たゞ蒙古來の一事のみを日蓮に尋ね給ふはそもく、本末輕重を誤まり給へる顛倒の御振舞ではありますまいか。但し強つてとならば御答へ申し上げんが、何月何日と確とは定め難けれど今年を出でざる事は疑ひ候はず。と、凜乎として言ひ放たれた音吐朝々、然かも天下の執權を前に控へて、宛ら曠野の中に一人立つてゐるにも似たる大膽不敵のその態度に、並みある人々今更ながら舌を捲いて何れも顔を見合はせるのみであつた。さすがの時宗何と思つてかその儘言葉も之無く座を起たれ、其日はそれで無事に終つたが、越えてその月の十三日頼綱再び高祖を召されて、上よりの仰せ、御房の好む所に寺門を建立しまゐらせ、美田千町を寄附して天下安全の御祈願所と仰がるべきが、如何。と言はれた、高祖答へて、

「台命有り難くは存すれども、無得道の諸宗と軒を並べて永田美祿は受け難い。」と、その衣の袖を拂つて去られた。次いで五月二日遂に宗門免許の牒状を發せられて、さしも高祖が多年苦心の本願の一部は漸やく成つた、その牒状に曰く、

頃年許多眞法の威力御威最深三國無比類妙宗後代難有僧何宗比之日本國中弘宗門事不可有妨也。

文永十一年五月二日

日蓮上人

城左兵衛奉す

(三) 身延の幽棲

然しながら高祖の本意は他一切の邪宗を退けて法華經のみを國家唯一の法門とせられんとするにあつたのだが、事志に添はず、よしや法華の弘通のみは許されたとはいふもの、時宗初め權門の諸公何れもいまだ淨土眞言の迷夢の中に眠つて居るのを見たまふて、今は之れまで、此の上は靜かに身を退いて二十餘年の艱難に傷つき破れた餘生を、雲白く水清き邊りに送らばやど、その年の五月十二日遂に鎌倉の庵を去つて甲州身延の山中に入られた。時に

御年五十三歳。溪流岩を嚙むで夏尙ほ寒きほとりに一字の草堂を造らへ、柱僅かに十二本、四面各々三間、屋根は茅を葺き、縁は竹を廻らし、中に一個の須彌壇を造つて此所を常住の座とせられた。鎌倉の濱土には日昭上人を、比企ヶ谷には日朗上人を、後事萬端を托せられ、御傍には、日興、日向、日頂、日持、日進の諸上人と、久本坊、態王丸の七人を従へさせられた。高祖自から身延山のたゝすまひを記し給へる文に言ふ。
「駿河の國は南にあたりたり、彼國の浮島がはらの海ぎはより此甲斐國波木の郷、身延の嶺へは百餘里に及ぶ、餘の道千里よりもわづらはし、富士河と申日本第一の早き河、北より南へ流れたり、此の河は東西は高山なり、谷深く左右は大石にして高き屏風を立並べたるがごとくなり、河の水は筒の中に強兵が矢を射出したるが如し、或時は河はやく石多ければ船破て微塵となる、かゝる所をすぎゆきて身延の嶺と申大山あり、東は天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺なり、高き屏風を四つついたてたるが如し、峰に上りて見れば草木森々たり、谷に下てたづぬれば大石

連々たり、大狼の音山に充滿し猿猴のなき谷にひゞき鹿のつまをこうる音あはれしく蟬のひゞきかまびすし、春の花は夏にさき秋の草は冬なる、たまたま見るものはやまかつがたき木をひろうすがた、をりくどぶらう人は昔なれし同法也、彼の商山の四皓が世を脱し心ち、竹林の七賢が跡を隠せし山もかくやありけむ。」
又曰く、
「誠に身延山の栖は、ちはやふる神もめぐみを垂れ天下りましますらん、無心しづの男しづの女までも心を留めぬべし、哀を催す秋の暮には草の庵に露深く檐にすだくさ、かにの糸玉を連き、紅葉いつしか色深くて、たまに傳ふ懸樋の水に影を移せば名にしおふ龍田河の水上也かくやと疑はれぬ、また後には峨々たる深山そびへて梢に一乗の果を結び下枝に鳴く蟬の音繁く、前には蕩々たる流れ堪て實相真如の月浮び無明深重の闇晴て法性の空に雲もなし、かゝる砌なれば、庵の内には晝は終日に一乗妙典の御法を論談し、夜は竟夜、要文誦持の聲のみす、傳へ聞く釋尊の住給けん鷲

峰を我朝此砌に移し置ぬ、霧立嵐はげしき折々も山に入て薪をとり、霧深
き草を分て深谷に下て芹をつみ、山河の流もはやき巖瀬に榮すゝぎ、袂し
ほれて、干わぶる思は、むかし人丸が詠ける和歌の浦にもしほ垂れつゝ世
を渡る海士もかくやとぞ思遣る、つくゞと浮身の有様を案するに佛の法
を求給しに不異（中略）此等をさまゞ思つゞけて觀念の床の上に夢を結
べば、妻戀鹿の音に目をさまし、我身の内に三諦即ち一心三觀の月曇り無
く澄けるを、無明深重の雲引覆つゝ昔より今に至るまで生死の九界に輪廻
する事、此砌にしられつゝ自かくぞ思ひつゞける。

立わたる身のうき雲も晴ぬべし

たえぬ御法の鷲の山風

身は貧しけれども心は富めり、境は峻しけれども意は安らかなり。たまた
ま儼石の蓄に盡きてをりゝ炊煙ののぼらざる事はありしかど、風月の殘生
涯いかに心は静かであつたらう。天上の至幸、地上の至福、あはれ此の世か
らの極樂境に、師弟八人の宵々の夢は月影よりも圓かに、松風よりも爽やか

かであつた。曾て一夜の嵐に假の庵の一支へもなく打ち倒れたのを、師弟も
ろども木よ竹よと馳け廻つて修覆してゐた所へ、檀越の上野氏より芋二駄を
送つて來た、その返書の如きは、此の至樂なる幽棲の面目を語つて躍如たる
ものがある。

「はしらくち、かきかべおち候へども、なをす事なくて、よるひをさばさね
ども月のひかりにて聖教をよみまゐらせ、われと御經をまきまゐらせ候は
ねども風おのづからふきかへしまゐらせ候しが、今年は十二のはしら四方
にかうべをなげ、四方のかべは一じにたうれぬ、うだいたもちがたければ、
月はすめ雨はとどまれとほげみ候つるほごに、人ぶなくしてがくしよう
（學生）どもをせめ、食なくしてゆきをもちて命をたすけて候ごころに、うへ
のどのよりいも二駄これ一だはたまにもすぎ候。」

然れども、かゝる樂しき幽棲も長くは續かなかつた。高祖が此の地に隠れ
住み給ふ事を聞き傳へて遠近より訪ね來る老若次第に數を増して、中には米
麥の布施を積み、鹽味噌の供養を運ぶものさへ出で來つたので、今までは人

跡断えた身延の奥もいつしか般販の俗市となり、遂には常住の門下一百を數へるやうになつた。高祖が此の間の消息を記して人に與へられた手紙の一端に云ふ。

「人はなき時は四十人、ある時は六十人、いかにせき候へども、これにある人々のあにとて出來し舍弟とてさしいでしきぬ候ぬれば、かかはやさにかにもゆへず、心にはしづかにあじちむすびて小法師と我身計、御經よみまゐらせんとこそ存て候に、かゝるわづらはしき事候はず、又としあけ候はいづくへもにげんと存候ぞ。」

此の時しも鎌倉には愈々近く蒙古の襲來あるべしとて上下ともに一日も安き心なく、加持に祈禱に全ゆる神佛の力を以て禍を未發に防がんとしたが効無く、幸か不幸か高祖が豫言適中してその年の十月五日、わが筑紫の一角に鯨鱈山の如く押し寄せ來たつて、浪白く松青かつた邊海は忽ち血汐の花を咲かせた、翌建治元年の五月八日、此の事に關して高祖が身延の山中より一の谷入道に送られた書簡の一節に曰く。

「但日蓮一人ばかり此事を知りぬ、命を惜て云はずば國恩を報せぬ上、教主釋尊の御敵となるべし。是を恐れずして有りのまゝに申なば死罪となるべし、例ひ死罪は免ることも流罪は疑なかるべしとは兼て知てありしかども、佛の恩重が故に人をはいからず申ぬ、案にたがはず兩度まで流されて候し中に云々（中略）。去文永十一年十月に蒙古國より筑紫によせて有しに、對馬の者かためて有しに、宗馬尉逃ければ、百姓等は男をば或は殺し或は生取にし、女をば或は取集て手をとをして船に結付、或は生取にす（中略）。又今度は如何が有らん（中略）。日蓮は愚なれども釋迦佛の御使、法華經の行者なりとなりの候を、用ざらんだにも不思議なるべし、況や或は國々を追ひ或は引はり或は打擲し或は流罪し、或は弟子を殺し或は所領を取る、現の父母の使をかくせん人々、よかるべしや、日蓮は日本國の人人の父母ぞかし、主君ぞかし、明師ぞかし（後略）。

右の文中、又今度は如何が有らん、この杞憂は不幸にも事實となつて、弘安四年又々再度の元寇あり、以前にも増したる勢ひ鋭く瞬く間に九州の一角

は敵の蹂躪する所となつて、鎌倉の上下一層狼狽を極めた。之を見て、法華の檀徒中、これぞわが法華經を侮り憎しみたる報ひぞ、思ひ知れやと誇り罵るものがある由を聴かれて、高祖直ちに左の廻文を一切の檀越信徒に飛ばされて固く戒められた。

「小蒙古人寄來大日本國之事、我門弟並檀那等中、若向他人、將又自不可及言語、若違背此旨、可離門弟由、所存知也、以此旨可示人々候也。」

弘安四年六月十六日

花

押

(二) 其の終焉

かくて身延山に在る事九年、その間も説教に著述に老の身を一日も休めたまはず、孜孜として正法の弘通に努めてゐられたが、さしも鐵石に在りし身身の櫛風沐雨の多年の辛苦さすがに身に應へ給ひしか、弘安五年の春の末

から何となく心地勝れさせず、夏も過ぎ秋もや、閑になつてよりは、愈々病ひ重らせ給ふた。誠に、匆忙として今日は東に明日は西にと奔命に日も維れ足らなかつた三十餘年の憂き艱難、配流の島の鹽風に曝されて海松に命を繼ぎし事前二回、劍戟の閃めきに危うき命を全うせし事幾そ度、疾にも死ぬべかりし身を不思議に今日まで永らへしも、思へば限りある人間の定業、まして今は正法弘通の礎も固く、廣宣流布疑ひなきに、あはれいつまで老の身を碌々として横たふべきやと思ひ給ひしが、徒弟の願ひ檀徒の嘆きに餘儀なくせられて、時しも九月の初めつきた、露しげき山路を黒鹿毛の駒の蹄に分けさせて、身に染む秋の山嵐に法の袂を翻へしながら、住み馴れた身延の山の庵を後に、常陸の温泉指して出で立たれた。御供には、日興、日向、日頂、日持の諸上人と熊王丸。途中萬一の警護として波木井實長の一子彦次郎實繼

二十餘人の郎黨を引具して馬の前後を守りまゐらせた。然れども途中で病ひ重らせ給ふてその月の十八日武州池上なる池上右衛門太夫宗仲の邸に入られた時は、再々馬背の人となる事かなはず、止むなく

暫らくの間を此所で療養し給ふ事となつたが、高祖は生命もはや長からざるをあらかじめ知り給ふてか、そこより身延の實長の許へ左の一書を送られた。「畏申候、みちのほごべち事候はでいけがみまでつきて候、みちの間、山と申河と申、そこばく大事にて候けるを、きうだちにす護せられまらせ候て難もなく、これまでつきて候事、おそれ入候ながら悦存候、さてはやがてかへりまいり候はんする道にて候へども、所らうのみにて候へば不ちやうなる事も候んすらん、さりながら、日本國にそこばくもあつかうて候みを九年まで御きえ候ぬる御心ざし申ばかりなく候へば、いづくにて死候ともはかをばみのふのさわにせさせ候べく候。」
更に又病中筆を執りて左の書をものされた。
「時に六十一と申、弘安五年壬午九月八日身延山を立つて武藏國千束郷池上へ着ぬ、釋迦佛は天竺の靈山に居して八個年法華經を説せ給、御入滅は靈山より良に當れる東天竺但尸那城、跋提河の彌陀が家に居して入滅なりしかども、八個年法華經を説せ給ふ山なればとて御墓をば靈山に建させ給き、さ

れば日蓮も如是身延山より良に當りて武藏國池上右衛門大夫實長が家にし可死候歟、縦いづくにて死候とも九個年の間心安く法華經を讀誦し奉り候山なれば墓をば身延山に建させ給へ、未來の際までも心は身延に可住候日蓮は日本六十六個國島二の内に五尺に足ざる身一つ置處なく候しが、波木井殿の御育にて九個年の間身延山にして心安く法華經を讀誦し奉り候つることはいつの世にかは思忘候べき、しらすや此人は無邊行菩薩の再誕にてや御座らむ。」
然して高祖の絶筆として今も尙ほ傳はつてゐるものは七月七日付に書かれた左の一書である。
「日蓮は日本國人王八十五代後堀河院御宇貞應元年壬午安房國長狹郡東條郷の生れ也、佛滅後二千一百七十一年に當る也、八十六代四條院天福元年己丑二歳にして清澄寺に登り道善御房に於て學文、延應元年亥十八歳にして出家し其後十五年が間一代聖教總じて内典外典に亘りて残り無く見定め、生年三十二歳にして建長五年丑四月二十八日念佛は無間の業なりと見出だし

けるこそ時の不祥なれば如何にせん、此の法門を申さば誰か用うべき返つて怨となるべし、人を恐れて不申ば佛法の怨となり大阿鼻地獄に隨べし、經文には末法に法華經を弘むる行者あらば上行菩薩の示現也と思へし、言はざる者は佛法の怨也と云説給へり、經文に任せて云ならば日本國は皆一同に日蓮が敵となるべし、釋迦佛は娑婆に八千度生まれ尸毘王とありし時は鳩の生にかはり薩埵王子とありし時は飢たる虎に身を與へ靈山童子たりし時は半偈の爲めに身を投げ賢勢鹿とありし時は千頭の鹿王となつて我が身を獵師に射られて妊胎の鹿を助け三千大千世界に我が身命を捨置給はざる處無し、此の功德は皆な一切衆生の中には法華經を信する人々に與んと誓給ふ、我不愛身命の法門なれば命を捨て、此の法華經を弘めて日本國の衆生を成佛せしめん、纒の小島の主君に恐れて是を言はずんば閻魔の責をば如何せん、國主の用ゐ給ふ禪天魔なる由、鎌倉殿の用ゐ給ふ眞言の法亡國の由、極樂寺の良觀房國賊なる由、淨土宗の無間大阿鼻獄に墮つべき由、一々に記し立立正安國論を作り宿谷の禪門を使として見參に入れ奉る、之

れは生年三十九の歳文應元年申歲也、日蓮が申立て法門を一偈一句も答ふる人一人も無し、上下一同に惡み嫉みて譏奏申すに依つて生年四十弘長元年亥の歲五月十二日には伊豆伊東の莊へ配流し伊東の八郎左衛門尉の預りて三箇年也、同三年亥二月二十二日赦免せられ如來現在猶多怨嫉況んや滅度後の法門なれば日蓮此の法門の故に怨まれて死せんことは決定也、今一度舊里へ下て親き人々をも見ばやと思て文永元年十月六日に安房國に下て二十餘日也、同十一月十一日には安房國東條の松原と申大道にて申西の時計に數百入の念佛者に取籠られ日蓮は但一人物の要にあふべき者は三四人候しかども射る箭は而の降るが如く打太刀は電光の如し弟子一人當座に打殺され候又二人は大事の手負候ぬ、自身計り射られ打れ候しかども如何候はん打漏され候てかまくらに登り西明寺殿の見參に入奉りしに御祈禱申べき由有しかど日蓮云建長寺極樂寺等の念佛者禪宗者が堂塔を燒拂ひ彼等が頭を由井が濱に悉く切失なはるべく候然らすんば只今此の日本國の人々他國より責られ同士打して自界叛逆難あるべし、かまくら中の持齋の僧を

御供養候事は但々牛を飼せ給てこそ候へど申たりしかば日蓮房西明寺殿を
牛飼と申候と譏奏申に依て文永八年未辛九月十二日には頭の座に登り相摸の
龍の口へ遣はさる、今は幸と思ひしかば五郎の宮の前にて馬引熊王丸を使
として四條左衛門尉に知らせしかばかちはだしにて馬の口に取付て路すが
ら啼悲んで事實にならば腹切らんとせし者を何の世にかは忘るべく候、法
華經に命を進らせ日蓮より前に腹を切らんと思ひきりし事をば釋迦佛先づ
知食して候也、既に首切れんとせしが其夜は延候て相摸の依知へ流され本
間の六郎左衛門が預り明くる十三日あけ方に不思議現す、大星下庭の梅
の枝に懸る、死罪を宥られ流罪に行る佐渡國に遣さる、十月十日相摸の依
知を立て同二十八日佐渡國へ着ぬ、本間六郎左衛門殿が浮見の家より北に
塚原と申て死人を送る三味原の野邊に垣もなき草堂に落着ぬ、夜は雪ふり
風はげし、きたる簀をきて夜を明す、北國の習なれば北山の頂の山おろ
しのすき風身にしむ事思はせ給べし、彼國の守護も國主の御計なれば日蓮
を怨む、其外萬民も皆其命に従ふ、かまくらにては念佛者禪律真言等が一

同に申て何れも日蓮を鎌倉へかへさぬ様に計らふ、極樂寺の良觀坊も武藏
の禪司殿の私の御教書を申て弟子に持せて佐渡の國へ渡りて怨む、其れに隨
て地頭並に念佛者等の日蓮が居たるあたりに夜も晝も立副て通ふ、人を強
にあやまたんとすれば叶ふべき様も無し、何くよりも問ふべき一人一人も無
し天の御計ひにてや候ひけん、阿佛房の日蓮を扶持せし事は偏へに慈母の
佐渡の國に生まれ替らせ給て日蓮が命を助給歟、漢土に背公と申者あり、
王相辰紫重て勅宣を下して背公うつて進らせたらん者には捕忠の賞給ふべ
き宣旨ありしかば背公山邊に隠居して命助かりがたかりしに背公が妻山邊
に尋行きて時々助け候き、夫妻なれば年來の情捨てがたければ尋ねけん、
是れは人目を隠れ忍んで日蓮を憐愍し、或は處追はれ或は過代を引なんど
せしかば内に志ありし人も何とも申す一人一人もなし、さすがに凡夫なれば
他國に住ぬれば故郷の戀しき事申ばかりなし、日蓮謬り無く日本國の一切
衆生成佛の志こそなからめ日本國の一切の男女等はさて置きぬ、禪律僧
真言宗淨土宗の人々日蓮を見たりしは夜打強盜謀叛殺害の人を見るよりも

猶恐しげなり、されども法華經の正理なれば別の謬り無し、佐渡の國にて
四箇年と申、同十一年戊申二月十四日付赦免同三月二十六日に鎌倉へ上り又
同四月八日平左衛門尉云、御房は法華經の法門は今止まり給ふやと云ひ
しかば日蓮云、王地に生れたれば身は隨へられ奉る様なりとも心は隨ひ奉
るべからず念佛は無間地獄禪は天魔の所爲なる事は無疑殊に眞言宗が此國
の大なる禍也、末法に法華經の行者人に怨まれてかゝる難有べしと佛説玉
ひて候へば但偏へに釋迦如來の御神ひ我が身に入らせ給てこそ候へ、され
ば我身ながら悦び身に餘れり、日蓮は日本の大難を拂ひつべき日本國の柱
也余を失ふならば日本國の柱を倒す也、但今此の國に大惡魔入り満ちて國
土亡滅せん時こそ日蓮が立て申す法華經の法門の正義は見え候べけれ、經
文限りあれば力無しその時こそ人々は思ひ知り給らめと云しかば、日本國
を咒咀し申者也とて法華經の第五卷を以て日蓮がつらうつ事は梵天帝釋
も御覽ありかまくら八幡大菩薩も見させ給ひき如何に今は叶ふまじき世也
國の報恩の爲めに國に留り三度は諫むべし用るすんば山林に身を隠せとの

本文也本より存知す何なる山中にても籠つて命の程は法華經を讀誦し奉ら
ばやと思ふより外は他事なし時に五十三、同五月十二日かまくらを立て甲
斐の國へ入る路次のいぶせき峯に登れば日月をいたゞくが如し谷に下れば
穴に入るが如し河たけくして船渡らす大石流れて箭をつくが如し道は狭く
して繩の如し、草木しげりて道みえず、かゝる所へ尋ね入事淺からざる宿
習也、かゝる道なれども釋迦佛は手をひき帝釋は馬となり梵天は身に立そ
ひ日月は眼に入かはせ給らん故にや同十七日に甲斐國波木井郷に着ぬ、波
木井郷も對面ありしかば大に悦び今生は實長身に及ぶ程は見つき奉るべし
後生をば助け給へと契りし事はたゞことゝも覺えず偏へに慈父悲母の波木
井郷の身に入かはり日蓮をば哀れみ給ふ歟、其の後身延山へ分入て山中に
居住し法華經を晝も夜も讀誦し奉り候へば三世の諸佛十方の諸佛菩薩も此
砌りにおはすらん、釋迦佛は靈山に居して八箇年法華經を説き玉ふ日蓮は
身延山に居して九箇年の讀誦也傳教大師は比叡山に居して三十餘年の法華
經の行者也、然れども彼の山は濁る山也我が此の山は天笠靈山にも勝れた

り然れば吹風にゆるぐ木葉流水の音までも此の山には妙法の五字を唱へず
と云ことなし、日蓮が弟子檀那等は此の山を本として参るべし此れ則ち靈
山の契也、山に入て九箇年也佛滅後二千二百三十餘年也、日蓮ひとり志あ
り一七日して返る様に安房國にかへりて舊里を見ばやと思に時に六十一と
申、弘安五年壬午九月八日身延山を立ちて武藏國千束の郷池上へ着ぬ、釋迦佛
天笠靈山に居して八箇年法華經を説き玉ふ佛入滅は靈山より長に當る東天
竺俱尸那國跋提河の西彌陀が家に居して入滅なりしかども八箇年法華經を
説せ玉ふ山なればとて御墓をば靈山に建させ給ひき、されば日蓮も如是身
延山より長に當て武藏國池上右衛門大夫實長が家にして可死候歟、縦ひい
づくに死候と云とも九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉り候山なれば墓を
身延山に立させ玉ひて未來際までも心は身延山に可住候、日蓮は日本六十
六箇國島二の内に五尺に足らざる身を一つ置處なく候しかば波木井殿の御
育みにて九箇年の間身延山にして心安く法華經を讀誦し奉り候つる志をば
いつの世にかは思ひ忘るべく候、日蓮は日本第一の法華經の行者也、日蓮

が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はば梵天帝釋四大天王炎魔法
王の御前にても日本第一の法華經行者日蓮房弟子檀那也と名乗て玉ふべ
し、此の法華經は三途河にては船となり死出の山にては大白牛車冥途にて
は燈となり靈山へ参る橋也、靈山へましまして良の廊にと尋させ給へ必ず
待ち奉るべく候、但し各々の信心に依るべく候信心だに弱くばいかに日蓮
が弟子檀那と名乗らせ給ともよも御用ひは候はじ心に二つまし、て信心
弱く候は、峰の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思食し大阿鼻地獄疑
はあるべからず、其時日蓮ばし恨みさせ給な返す、も各信心に依べく候、
大通結縁の者は地獄に墮ちて三千塵點劫を得候き久遠下種の輩は地獄に墮
ちて五百塵點劫を得たる事大惡智識にあふて法華經ををろかに信せし故也、
返す、も能々信心候て異なる故なく靈山にまし、て日蓮を尋ねさせ給
へ其時悉く可申候、南無妙法蓮華經。

弘安五年壬午七月七日

波木井殿其外人々御中
右の文どもに再び起つ能はずなつた後々の事まで何くれとなく言ひ及ぼされてあるのに見ても高祖が既に豫め死を覺悟してゐられた事を知り得やう。然れども、身は亡ぶとも法華經の正しき教法は亡ばすべからず、一身の生死苦樂を唯一の正法に捧げ盡くし給へる高祖は篤き病ひに起居し自由ならざる身を強ひて、病床に集まれる徒弟檀越に法を説く事二十餘日、十月十三日の曉に到り、その倦まず撓まざる精進の力遂に盡きて、法界不二の大偉人日蓮大菩提薩埵は涙の雨降り香烟の花薫する中に眠るが如く微笑むが如くにその不退轉の生涯を終られた。壽を保たる、事六十有一歳。入滅に先だつある日師孝第一の日朗上人を召して立像の釋迦、立正安國論に左の御譲り狀を與へてその弘通をなすべき由を告げられた。

讓與

南無妙法蓮華經

末法相應一閻浮提第一立像釋迦佛一體立正安國論一卷

右爲妙法流布一切利益於法華中一切功德者所與大國阿闍梨也、至盡未來際、爲佛法捨身命、可弘通妙法者也。夫迹本雖廣不出妙法五字普迹今本也、廣略要中取要中要可令弘通一閻浮提雖撰肝心之要豈捨廣略乎、迹門實相說是久成本也、壽量遠本命迹顯也、今此迹本二門俱迹佛說也、迹無本者不得顯本、無迹依何垂迹、本迹雖殊不思議一、是經一部正意亦是如來第一實說也、釋尊一代深理、又日蓮一期功德、無所殘付屬日朗者也、壽量品云、我本立誓願乃至皆令入佛道每自作是念乃至連成就佛身。

弘安五年十月三日

吁、高祖人間無常の身を以てして法號不滅の此の大業を成す、塵裡の富貴俗界の功名は得て我れ等の學び易く成し易き所、彼等に於て何等の偉人を見ず。高祖に到つてはその形骸は滅ぶれどもその精神は千萬年の久遠に到るまで常に活きて法門一味の衆生の胸に在る。人にして人に在らず、佛にして佛に在らず、高祖の如きは我れ等凡愚の猥りに思議するを許されざるべき大器である。偉なる哉高祖、本化の大聖、本地の風光、我れ等は只俯して燦たる

不滅の法光の下にその偉風を讃仰するに止めんかな。



第二 六 老 僧

(一) 日昭上人

大成辨阿闍梨日昭上人は高祖門下の六老僧の随一人で、伊豆の國妙法華經寺の開山である。字は大成就、嘉禎二年下總の國葛飾郡平賀村に生れた。父は畠山祐昭と言つて上人はその仲子である。幼ない時から人並勝れた伶俐な性質で、佛教に志篤く、年僅かに十四歳で郷の山寺に入つて髪を剃り、名を成辨といつたが、後間も無く比叡山に登つて時の高僧尊海法印に師事し、曆仁元年の春登壇受戒した。時に年十八であつたといふ。それより愈々修業を積み、益々佛法の蘊奥を極めるやうに努めて居たが、ある時慈覺知證の書を讀むで、法華經大日經理同事勝の説に到つた時、多くの疑問に逢着した。之れを同門の誰彼に質したところ、

「卿は蓮長に嘗つて教へを受けた事は無かつたか」と言はれた。

斯う言はれて成辨は、
 「その蓮長とやらむ言ふ人、名もかつて聞いた事無く、顔も勿論見た事は無
 けれど、我れより先きに我れと同じ疑ひを抱き、我れと似たる説を立てゝゐ
 るとは……」と、何と無く空懐かしき思ひを起した。かくて更に無
 動寺の尊海と言へる人に尙ほも委しく高祖の事を尋ね参らせて崇敬の念愈々
 深くなり、遂に意を決して山を下り、先づ故郷に父母の安否を訪ねて後、鎌
 倉松葉ヶ谷の草庵に高祖をお訪ねした。時に建長六年、日昭の年三十四歳で
 あつた。
 青嵐、松葉ヶ谷の奥寂びて訪ふ人もなき庵の中、高祖は結伽趺座の題目に
 澄み渡つた心耳を傾むけることもなく傾むけてゐられると、松風ならで外面か
 ら聞こえて来る物音は、正しく人の訪ふ聲であつた。起つて座に請すれば、
 年の頃は三十路あまり、人品骨柄卑しからぬ立派な僧、慇懃に高祖の前に純
 づいて、
 「貧道は成辨とて年久しく叡山に學びたる者に候らへども、此の日頃教法の

上に疑ひを生じ、慈覺大師は傳教大師の法を亂せしものならむとの不審解け
 やらず、頻りに人々に問ひ質す中、端なくも貴僧の御事を漏れ聞いて慕はし
 さの心止み難く、かつは宗風の濁りたる叡山に長く止まる事も本意なきま
 ま、則ち三塔を後に見捨て、人傳のみを唯一つの頼みに、遙々と此の地ま
 では参つたのである。あはれ貴僧こそは慕ひ参らする蓮長師に在さうほごに
 曲げて貧道が願ひ御聴き濟みの上、御膝下に朝夕の尊とき御教へを垂れさせ
 給へ」と、誠心を面に現はして申上げた。
 高祖は聴き終つて、その熱心と眞面目さに感せられ、「兎も角も」と庵に
 止めて、色々物語の末様々に問ひ試みられた所、辨才かしこく、思慮又明
 に、凡庸ならぬ才器が見えたので、遂に大戒を授けて改ためて弟子とした。
 日昭と名乗つたのは此の時からである。上人はそれから愈々高祖の教へに
 服して、奉仕する事極めて篤く、高祖も亦二なきものに思し召されて、何吳
 れとなく相談相手にされた。殊に門下とは言ひ條、年齢も高祖より一歳の兄
 であつたから、呼ぶに「辨殿々々」と仰せられ、常に、

「我れは諸宗を對敵にして、兼ねてより大法戰に生命は無きものと覺悟し居る身の何時死するやも計られぬ。卿は後に蹈み止まりて後陣の備へを崩さぬやう」と言ひ諭されてゐた。高祖御難の事毎に、上人がいつも逸早く姿を晦まされるのは、一に高祖の此の御訓戒に依るのであつて、わが一身の安きをのみ貪らうとする卑怯な心からではないのである。正嘉二年高祖が父の喪の爲めに安房に歸られてからは、代つて松葉ヶ谷の草庵を守り、高祖が流された佐渡に在つた三ヶ年間も、常に草堂に在つて孜孜として布教に努めた。文應六年諸宗の暴徒の爲め草庵は焼かれて悉く灰燼に歸した。上人刻苦して一度は之れを再建したところ、文永八年九月十二日に到り、時の鎌倉幕府の憎む所となり高祖將に危うく龍の口に斬られむとした時、再び毀たれて、上人が折角の苦心も水泡に歸してしまつた。其の時日朝、日進の兩上人は捕はれて獄に送られ、他の一門の宗徒皆何れも追放をされたが、上人は巧みに逃れて跡を晦まし、喰ふに一椀の粥なく寝ぬるに樹陰をも憚るといふやうな辛苦を忍んで、漸やく法敵の追求を免かれ、濱に庵を構へて時の到るを待

つてゐた。文永十一年高祖が流罪から許されて鎌倉に歸られた時は、二人互ひに手に手を取り合ひながら泣いたといふ。斯くて文永十一年甲州波木井の豪族南部六郎實長が甲斐の身延山に寺を築いて高祖を招かれた時、高祖は上人に命じて長興山の主たらしめやうとしたが、上人は謙讓してそれを日朝上人に譲られむ事を請ひ、自から濱の草庵に潜むで身延山に赴かなかつた。十一月池上右衛門太夫宗仲が武州池上に長榮山を築いて高祖に供し、別に別院を構へて上人を招かれた時も、法弟大進を遣はして監督とし、自身は矢張り鎌倉に止まつて、益々布教に努めると共に諸宗との應接幹旋にも盡された。弘安五年、高祖病ひを得て常陸の温泉に赴むかれんとし、身延山を發して池上まで来た所、病勢重つて進む事が出来なかつたので、長榮山に止つて病を養はれた。上人往いて枕頭に侍り懇ろに看護に盡されたが、夏去り秋來つて病は愈々重るばかりであつた。高祖も己れが天命の在る所を曉られてか上人を枕邊近くお呼びになつて種々後事を托された後、手書の「註法華經開

結十卷「法華之部要文三卷」「本理大綱一卷」を與へられて間も無く眠るが如く天に歸られた。時に十月十三日である。

上人は日朗上人と相謀つて茶毘に附した後、宗徒を率ゐて身延山に赴む。六老僧各子院を造つて喪に籠つた。上人の構へたのは常不輕院と云ひ、俗に南の房とも云つた。弘安六年正月二十三日喪明けから自ら身延山清規を造られ、その年の十月長榮山に會して高祖の遺文百四十餘篇を輯め、上人自ら手書して録内の書と言つた。これ等の後事悉く終つてからは、又退いて靜かに濱に潜居してゐたが、正安二年京都に舊師尊海を訪ねられた。尊海時に年九十一、病むで病床に在つたが、絶えて久しい對面に互ひに嬉し涙に咽ばれた後、上人は舊師に本地久遠の説を説き、本化別頭の戒を授けられた。その時座に智祐といふものがあつた。上人の法話を聞いて甚く感じ入り、頓悟して口決を受けたので、尊海見て大いに喜び、直ちに智祐を上人に與へた。上人即ち日祐といふ名を與へ、本門圓頓戒相承血脉譜を製して授け、懇ろに尊海が看護を頼むで鎌倉に歸つた。

之れより先き、越後信濃兩國の大守たる風間信昭といふ人、上人の弟子となつて那瀬に一寺を設け、上人を請じて法王山妙法寺と名づけて開堂供養した。上人爰にも長く留まらず門弟日成を院に残して再び鎌倉の草庵に歸つた。ところ、近在の信徒淨財を集めて一字を構へ上人の居とされん事を請うた。即ち名づけて弘延山妙法華經寺といひ、信徒の好意に酬るん爲め暫らく住つてゐたが、間も無く傍に小庵を設けて移り、日祐を召して寺務一切を任せた。斯うして安靜な生活に在る事七年の後、元享三年の春病を得た。上人は最早再び起つ事が出来ない事を知つたので、風間信昭を召して北陸弘法の事を託し、日祐を召して寂後の事を何くれと告げた後、三月二十六日瞑目された。壽八十八歳。遺骸は松籟颯々ど不斷の調べを奏で、ゐる法華經寺山上に埋められた。

此の寺は、後正慶建武の交兵燹の爲めに焼けたので、伊豆の檀越雲金村に東金山妙本寺を造り、少時して濱の寺をも雲金に合して遷した。元祿年中第十三代の日苞上人、田方郡賀殿村に妙法華經寺を再建し、元和年間第十六代

日高上人官命を受けて今の玉澤に開き、名を經王山と改めたといふ。
日昭上人の著作はその數頗る多いけれどくゞしいから略す。

(二) 日昭上人

大國阿闍梨日昭上人は六老僧中の第二位に位してゐる。日昭上人よりも幼
なき時から高祖に師事し、且つ艱難を嘗めた事も日昭上人以上だったので、
その名もより多く著はれてゐる。下總本土寺の開山で、字を大國と云ひ、號
を筑後房といつた。寛元三年四月四日下總國猿島郡能手村に生まれて、幼名
を吉祥丸と言つた。父は伊東治郎右衛門有國といつて、平家千葉の族である。
上人が始めて高祖に見えたのは年僅かに十歳の時で、父有國に伴はれて鎌
倉に行つた時である。父は高祖を一目見るや、その人格と教法とに少なから
ぬ歸依崇敬の心を起し、直ちに吉祥丸を捧げてその膝下に侍せしめられむこ

とを請うた。日昭とは、その時始めて高祖から與へられた名である。正嘉元
年高祖が父の喪に逢つて故郷安房に歸られた時も、駿河國岩本の實相寺に到
つて大藏經を閲された時も、上人は御伴して常にお傍を離れた事は無かつた。
謂はゞ子飼の弟子である。髪を剃つて得度を受けたのは文應元年上人十六歳
の時であつた。
それ故に高祖の御覺えも一しは深く、朝夕お傍に侍つて、歡びあれば共に
歡び、悲しみあれば共に悲しむと云ふ位、親子も斯くはと思はれる程の間柄
であつたから、弘長元年五月十二日の朝高祖が鎌倉幕府の怒りに觸れ、捕は
れて伊豆へ流された時の上人の悲嘆は、傍の見る目も慘はしい程であつた。
上人は、その朝高祖の依頼に依つて寫經の紙筆を求めに松葉ヶ谷の草庵を
立ち立で、町へ行つたが、折しも琵琶小路の一角へ差し掛ると、時ならぬ物
騒ぎ、右往左往に往き交ふ人々の氣勢の只ならぬまゝ、耳を澄ませば、「あら
心地よや、三國傳來の諸宗を破つて北條殿を罵りし名越の妖僧日蓮、俄かの
不意に縛められて、今あの辻より由比ヶ濱に率かれたるぞ。親の死に目に逢

はずとも彼が身の果を見ろ、と罵る法敵の聲や、
「あなうたてや、世にも尊き法華經の大行者、松葉ヶ谷の上人殿が、邪教
に眼眩みし者共の爲め捕はれて流罪に逢はせ給ふぞ。あはれ往いて、叶はぬ
までも暫しの名残を惜まうではないか」と悲しみ惑へる宗徒の聲などが聞こ
えた。

「さては、と、上人は驚愕の餘り一度は大地に吸はれたやうに倒れたが、又
忽ちに跳ね起きて、息も切れよ、血も吐けよと眞一文字に宙を飛んだ。材木
座も夢うつ、前濱、西濱打ち過ぎて由比ヶ濱に来て見れば、朝風寒き磯馴
松、寄せては返す波打際に警固の兵は充ち満ちて、高祖を乗せた流罪の船は
今や將に纜を解かむとする一刹那であつた。

上人は見るより、今年まだ十八歳の少弱い身ながら警固の荒武者三四人を
突き飛ばし、むづと纜の端を握むで、

「我は日蓮の弟子である。師に罪あれば我にも罪がある、あはれ願はくばそ
の船に此の身を投げ入れて、師の往く所に赴かせ給へ、と、聲を限りに泣き

叫むだ。死ぬることもやはか離れじ、と、一念籠つた力強く、纜を掴むだま、
づる／＼と曳かれて行つた上人の右の手は、その突嗟警固の武士の鐵鞭に發
止と打たれて、悲鳴もろ共砂の上に倒れたが、そのまゝ氣も心も遠くなつた。

「日朗、日朗。」

ハツと我れに返れば、やゝ遠くは離れて居れど、嬉しや船端に高祖の御姿
打ち仰いで胸に逼つて來た涙に物も得言へず、たゞ左の手ばかりふるはせな
がら、南無妙法蓮華經を幾たびか唱へた。

高祖は溢るゝ涙の眼を光らせ給ひ、身を伸して聲高く、

「やよ日朗、我れたとへ無ければとて、怯めず臆せず退かず撓まず、たゞ法
華の正法の爲め身を捨て血を注ぎ肉を裂くとも盡してくれよ。生命あつて再
び逢ふまでの間、この地と伊豆の伊東は西東、八重の沙路に煙りて見えすと
も、朝日東天に昇らば我れは汝鎌倉に在りと思ふぞよ、月西山に傾かば日蓮
伊東に在りと知れよ。さらばぞ日朗。」

上人は、あはれこれこそ懐かしき師の坊の御聲の聞き納めにもやなるらん

ど、はふり落つる涙の眼を上げて見はるかせば、船は浪のまに、次第に遠く岸を離れ、御聲もやがて微かに、立ち給へる御姿のやがて水天髣髴の間に消え去つた。渚に取り残された上人は、かくて暫らくの間砂の上に泣き伏したまふ、容易に去らうとしなかつたのであつた。その後の三年間、高祖が留守の庵を守つてゐた間の上人の心は、ごんなにか寂しく辛く悲しかつたであらう。親とも兄とも、果は生ける現前の御佛とも頼みまゐらせた高祖を慕ふのあまり、夜な夜な由比ヶ灣邊に立つて伊豆の方を望みながら、一日も早く救されて歸り來まさん日をのみ願つてゐたが、あの夜波間に漂よつてゐた一木を拾ひ來たつて高祖の像を刻み、この像を生ける高祖と思ひまして日夜忠實々々しく禮拜してゐた。その心中、推し量りまゐらするだに健氣ではないか。此の像今は武藏堀の内妙法寺に在る、風貌凛乎として生けるが如く、信徒は必ず一度は禮拜すべきである。朗門九鳳の一人たる日澄上人が上人の許に入門したのは高祖が留守の間であつた。弘長三年、上人の誠天に通じてか高祖は赦されて再び鎌倉の土を踏まれ

た。上人がその時の喜びは今爰に筆にする必要はあるまい。越えて翌文永元年の秋八月、高祖は鎌倉山に啼き渡る雁の聲、淋じき夜半の枕に通ふに連れて、遠き故郷に一人なる母の上思ひ出で、かつは別れて久しい清澄山の師の房にも見え參らせむとて、安房へ旅立たれた。上人は日澄諸共御供をしたのである。かくて高祖の故郷にある事數月、その年の十一月の十一日に兼ねてからの大檀那たる天津の工藤吉隆に招かれて、高祖は上人をも御供の列に加へながら、夕暮近くとある小松原にさしかゝつた時、法敵東條景經に襲はれた。上人は身を以て高祖をかばひまゐらせつゝ、危うきを免かれて、それより上總下總常陸下野一圓の教化に従ひ、五年を経て漸やく鎌倉に歸つた。それより四年に涉つて上人は益す布教に努めたが、文永八年、又も諸宗の讒によつて高祖は佐渡へ流され、上人は日進もろ共捕へられて宿屋光則の邸内なる土牢に投せられた。折から十月の空さへ氷る初冬の、板敷もない土牢の中にあつて、情ある人から送られた高祖の手紙を、冷たい冬の月影に透して讀むだ時

の上人の胸中はごんなであつたらう。その文面は左の如くであつた。

日蓮はあす佐渡の國へまかるなり今夜のさむきに付てもらうのうちのありさま思ひやられていたはしくこそ候へ、あはれ殿は法華經一部を色心二法ともにあそばしたる御身なれば父母六親一切衆生をたすけ給べき御身なり、法華經を餘人のよみ候ば口ばかりことばばかりはよめごも心はよます心はよめごもみによます、色心二法ともに遊ばしたるこそ貴く候へ、天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害を説かれて候へば別の事はあるべからず籠をばし出させ給候はばとくく來りたまへ見たてまつり見えたてまつらん。

十月九日

日

蓮花押

筑後殿

上人時に年未だ二十七歳。

上人はその後とても起伏につけ、飲食につけ、片時も高祖を慕ひまゐらせやまず瞬間も題目を唱へて怠らなかつた爲め、牢守共その誠心に動かされて自然念佛を捨て、法華に心を傾けて來た。ある時牢守の一人が橋の實を七

八つ上人にまゐらせると、上人は見るより、

「あはれこれこそは師の坊の好ませ給ひし物である。まゐらせんにも師は海山遙けき空の彼方、我れは出る事叶はぬ牢の中なれば、思ふのみにして果たし得ぬ口惜しさ」と、潜然と泣かれた。牢守共も上人の熱き至情に動かされて同じ涙に咽んだが、遂に密々語り合つて、

「さまでに思ひ給は、我れ等密かに圖らひて御坊を暫らく牢中より出だし、師の坊の在する佐渡に渡らせまゐらせんほどに、構へて疾く行き疾く歸り給へ」と、旅費や乾糧までも恵むだ。上人は喜び給ふ事限りなく、八重の沙路をはるく、佐渡に高祖を訪ねまゐらせ、飽かぬ別れに又歸つて、再び更に訪ねまゐらせた。斯くする事前後八回、文永十一年の三月に到り赦されて牢を出で、その月の八日に高祖赦免の狀を携さへて公に佐渡に渡つた。日暮れんとして路遠し、荒海を僅かに越えて來は來たもの、路峻しくて身は疲れた。五歩にして躓き、十歩にして休み、杖は折れ足は傷いて遂には一步も歩めなくなつたので、せめてと聲を振り絞つて、

「師は何處に在しますぞや、日朗御迎ひに參つた」と呼びかつかつ叫んだが、峯の反響に松風が交つて聲は空しく消えてしまつた。咽も渴き聲も涸れて今はこれまでと思つた折から、天祐か、抑も高祖の御威徳か。不思議にも日興上人の來たり求むるに逢ひ、負はれて高祖の庵に行つた。赦免の状を見せまらせて主従四人手を取り合つて喜むだ時の有様は、到底筆紙の盡くし得る所

で無い。かくて、晴れて鎌倉へ歸つた上人は、再び高祖の膝下に侍つて朝夕忠節を怠らなかつたが、間もなく甲州身延山に退かるゝに及び、上人は止まつて長樂山妙本寺を主り、兼ねて池上なる長樂山本門寺をも治めた。それより高祖が八年間の身延在山中も、屬々尋ねまゐらせて何くれとなく宗門に盡したが、弘安五年十月十三日高祖病を得て池上に滅せらるゝとき、長興長榮兩山の監督を遺囑せられ、伊東の感應佛像一軀、立正安國論一卷、伊豆佐渡兩島の赦狀二枚を譲られた。六老僧各々身延山に小院を構ふるや、上人は正法院を修して喪に籠つてゐた。正應四年九月大曼荼羅を書き、日輪上人に附して兩山

に主たらしめ、文保二年年七十四歳にして池上南窪に庵居し、以て閑寂な餘生を樂しむでゐたが、元應二年正月二十一日、七十八歳にして逝かつた。即ち遺命により松葉ヶ谷に茶毗して猿島山に塔した。その門下たる日像、日輪、日善、日傳、日範、日印、日澄、日行、朗慶の九人を稱して朗門の九鳳といふ。上人は又朗門派の開祖にして下總本土寺の開山である。

(三) 日興上人

白蓮阿闍梨日興上人は、六老僧の第四位であつて、兼ねて興門派(勝劣派)の開祖である。字は白蓮、一に伯耆阿闍梨とも呼んだ。俗姓は橋氏、美濃の刺史善根の裔で、父は大井庄司某、母は駿河の由比氏川合入道の女である。寛元四年五月八日に甲斐國巨摩郡の鍛澤に生まれ、八歳の時から駿河實相寺の播摩二位律師嚴譽の許で經卷を學んで、建長五年に得度し、康元元年には

嚴譽の命に依つて三井寺に學び大いに學才を發揮したといふ。時に十一歳。正嘉二年十四歳の時母の喪に逢つて郷里に歸り、喪止むで師の許に在つた時、高祖大藏經を閲さん爲め實相寺に來たが、嚴譽は憎むで逢ふ事だにしないかつた。然るに時の學頭だつた智海が衆と議して高祖に摩訶止觀の講義を請うたが、座に連なつた日興上人は、高祖の學識の秀れたると人格の高きに感じ入つて心動き、高祖の侍者だつた吉祥丸と交を結び、密かに高祖に近づかむ事を待つた。智海も又高祖の學德に敬服してゐて、ある日上人に向ひ、「日蓮こそは一代の名僧高德である。我れも心密かに弟子の禮を執りて法華經の教へを請はんとは思へども、今直ちに寺を捨て衣を更へむ事は憚りありければ機の來るを待たうと思ふが、御身は幼年、往いて教へを請はんには將に究竟の時である。往き給へ、往きて日夕その高風に接し給へ、我れも又時を待つて御身の跡を逐はうから」と言はれたので、上人は改宗の念愈々強くなり、遂に意を決して、高祖が歸途に就かるゝや、跡を追ひ參らせて首尾よく弟子の列に加へられた。

文應元年、吉祥丸と共に手度を加へられて名を日興と興へられ、白蓮と字された。それより高祖に仕へまゐらす事益懇ろに、「立正安國論」の草案の如きも多く上人の手に成つたと言はれてゐる。文永八年九月、高祖は龍の口の厄に罹つて佐渡に流され、日昭上人は逃れ日朗上人は獄に下されて、松葉ヶ谷の草庵は跡方もなく毀たれ、従つて一門の輩皆離散した時に、上人は日昭上人と共に専ら濱に蟄居して靜かに時の到るのを待つと共に、一方日向上人と共に交々佐渡に高祖を訪ねまゐらせて安否を尋ね、苦難を慰さめまゐらせた。同十一年高祖赦されて佐渡より歸るや、上人は日朗上人と共に隨侍して長興山に入り、次いで身延山に隠れた。弘安五年、高祖池上に病ませられたるまで多くその傍に侍つて親しく御教へを受け、病みて床に就き給ふてからは暫らくも側を離れず、晝夜を忘れ寢食を思はぬほど熱心に看護に努めた。が遂に空しくなり給ふに及んで泣くゝ御遺骸を池上に茶毘に附し、身延山に歸つて常在院に籠り喪に服した。翌六年正月喪終つて皆々思ひゝに退散した時、上人は駿河國富士郡上野に草庵を結んで暫らくの閑日月を此所に樂

しむでゐた。

弘安八年、日向上人、身延山に行つて滞在してゐた時、檀越波木井實長、日向上人に告げて言ふには、「高祖の龕塔を輪番に守ることは法の爲め山の爲めに宜しくない。諸山は各々主人あるを以て益々盛んなれども身延山は然らず、主従共に旅泊の思ひを成すを以て益々衰へやうとする傾きがある。あはれ高祖が尊とき御靈の宿り給へる世に又となき此の靈窟を、若し衰へ荒ましむるが如き事あらば悔いて臍を噛むとも及ぶまいから、願はくば上人等の尊慮をわすらはさむ事を」と。

之を聞いて日向上人も尤もだと思はれたので、日昭日朗等諸上人に謀つたところ、何れもその言葉を一理ありとしたが、さりとして今俄かに高祖の遺命に背くわけにも行くまいと思つたので、何れも如何すべきかと思ひ惑うた。然し日興上人のみは一人頭を振つて、「我れ等六人遺命を受けていまだ一紀にも満たざるに、猥りに檀越の言を容れて尊とき遺命に戻るとは何事ぞ。法運の盛衰通塞の如き俗人の識る所で無い」と言つて憤然その議を退けた。翌年

安房北野郡保田村に往つて小庵を構へ、籠居して唱道讀經を事とした。後に中谷山妙本寺と言つたのは此の小庵である。

然るに永仁五年に成つて、駿州富士郡上野の邑主某新たに寺を造つて再三上人を招いた、最初は辭つて受けなかつたが、數次の懇望黙し難きまゝ遂に駿河に歸つた。その寺は一大石の上に在つたので大石寺と名づけたと云ふ。後北山に移つて本門寺を初め此所に住まつた。此の他相州串橋の長五寺、甲州一の瀬の本宗寺、駿河大宮の大泉寺、同袖野の光徳寺等は皆上人の創めた所で、何れも身延山に屬してゐる。正慶元年病に罹るや再び起つこと能はざるを知り、二月七日諸徒を召して後事を托された後、從容として逝られた。歳八十八歳であつたと云ふ。

(備考) 日興上人は後に本述二門勝劣派の祖と言はれた人である。初め富士に住してゐた時分はまだ宗義に異論がなかつたが、稍後に至つて他の諸上人と執る所を異にしたやうである。

(四) 日向上人

佐渡阿闍梨日向上人は六老僧の第三位で、身延山第二代である。京都の人で俗姓は小林氏、父の名は民部實信と云つた。元久元年父實信は高祖の父重忠と伊勢平氏に與みして謀叛をしたので、捕へられて上總國埴生郡藻原郷へ放逐されたが、上人は此の配所で生まれたのであつた。時に建長五年二月十六日である。梅檀は二葉より芳し、とかで、上人は極めて幼少の時から僧侶の真似をなし、常に遊び戯むれるにも他の兒童等と違つて、布を結んで袈裟となし、貝を貫いて念珠となし、合掌して三寶の名を唱へるのを習ひとしてゐた、父は何れかと言へば武邊一途の人とて上人の此の風を見て喜ばず、早く髪を修し烏帽子を加へて呼んで藤三郎實長と言つた（一説には藤十郎と言つたこともある）時に僅かに五歳であつたといふ。

然るに弘長二年、上人の年十歳の時重い病にかゝつた。醫者よ薬よと百方手を盡したが何の効驗もなく愈々重るばかりであつたが、その時上人が言ふ

には、

「我が病は如何に醫藥の力を盡くすとも所詮助かるべくも思はれず、但し若し神佛の助けを借らば或ひは免かるゝを得んか」と。そこで父母は安房の千光山に虚空藏菩薩を祈り、誓つて、「もし此の子の生命助かりなば捨て、佛子となさん」と言つたら、果して祈願空しからず、さしも重病も見るゝ本服した。その時、かつて實信がまだ仕官の日に交り淺からなかつた比叡山高乘院主の某、鎌倉に赴むく途次駕を枉げて來訪したが、上人の何となく人並勝れた所を見て懇ろに請うて比叡山に伴ひ歸り、手度を加へて民部卿と言つた。

上人が高祖に初めて逢つたのは文永二年である。上人の父實信は素高祖と多少の交りがあつたので、文永元年高祖が房州に母の安否を尋ね旁々歸られた時、往つて言ふには、

「小生に兒がある、幼きより佛像を好み、泣て出家を求めを以て遂に比叡山に遣はし今は彼所に在れど、若し今より聖人が御弟子の數に加へ給はゞ我

兒もごんなにか喜ぶであらう」と。高祖聽いて快諾されたので、翌年使をつかはして上人を召し歸し、携へて高祖の下に投じた、時に上人は十二歳であつた。これより高祖の膝下にあつて朝夕法華の道を學び、その餘暇には高祖の母に事へまゐらす事自分の實母にも劣らない位に懇ろであつた。文永四年十二月高祖母の喪を終へて鎌倉に歸つた時上人も亦隨つて歸り、高祖が龍の口の厄にかゝられるまでの四年間、幼弱の身でありながら法華經の弘通に席の温まるひまがなかつた位である。高祖が佐渡に流されて、松葉ヶ谷の草庵に毀たれるに及び、上人は日興上人と共に日昭上人を輔けて跡を晦まし、幾多の艱難辛苦を嘗めて、日興日頂日持の三上人と更るゝ佐渡に渡り、高祖の徒然を慰さめまゐらすのを勤めとしてゐた。文永十一年高祖赦されて鎌倉に歸り間も無く身延山に入り給ふや、上人亦隨つて常にお傍を離れ無かつた。その折上人が眼にし耳にした高祖の法話の數々を集めたものが、即ち、「日向記」である。建治二年の春、高祖の先師たる安房清澄山の道善坊が計に當り、上人命を受けて往いて佛事供養をして歸る

六

や、又命に依つて駿河國富士郡なる龍泉寺に赴いた。此の寺はもと眞言宗の大刹であつたが、寺の學徒身延山に高祖を訪ひて眞言亡國の理を問ひ、その高説に服して弟子の禮を執り、寺を改めて高祖に捧げたもので、上人の代つて赴くや法規を一新して治績頗る擧つた。後寺を法弟日慧上人に譲つて退き弘安五年高祖の計に逢つて身延山に喪に籠つた。弘安八年上人身延山に宿つた時、波木井南實長の請ひを容れて、日朗上人その他とも相談の上身延山第二代の主となり、それより寺務に携はる事二十六年の後、正和三年微恙を感じたので日進上人に後を譲り、上總坂本村の法華谷に退いた。此の世を去つたのは同年九月三日で、眠るが如き安靜な往生であつたといふ。歳六十二。上總國藻原の常起山妙光寺、武藏の妙顯寺、相摸の妙勝寺等は何れも上人の開山である。

六

(五) 日頂上人

伊豫阿闍梨日頂上人は老僧の第五位で、下總真間山弘法寺の開山である。俗姓は橘氏、伊豫守定時の長子で、弟妹二人あつた。弟は寂仙房日證、妹は乙御前と云つた。父の定時が駿河國重須村で戦死してからは、母に随つて鎌倉に往つたが、その時下總若宮の豪族なる富木五郎胤繼が妻を失つたので、上人の母を納れて家政萬般を司ごらしめる事となり、上人も随つて往つた。若宮の隣邑に真間山といふ天台宗の談林があつて、時の化主を了性といつたが上人が幼なきにも拘らず、學問を好むで世俗の煩を厭ひ、兼ねて僧儀を慕ふ風があるのを見て、胤繼に請うて弟子となし、やがて髪を剃つて伊豫房といつた。

見て胤繼に請ふたところ、胤繼も喜んで弟子とした。翌年高祖松葉ヶ谷に歸らるゝに及び、上人はそれより四年間常に行住座臥を共にして、愈々法華經の奥儀に達した。文永八年高祖が佐渡に流さるゝや、泣くなく後に留まつた上人は、日興日向等の諸上人と交るゝ萬里の波濤を冒して配流の御身を慰めまゐらせたが、同十一年佐渡から歸られて一先づ長興山に入られた時、上人は真間山に遷つて進山の式を擧げた。時に年いまだ二十三歳であつた。かくて此所に在ること八年間に及むだ。其間、富木胤繼が真間山に造立した本尊釋迦佛に、上人が點眼をしたのは有名な話である。弘安五年高祖池上に逝るゝや、匆惶赴むいて涙ながらに葬送を濟まし、終つて身延山に塔を建て、六僧が輪次に塔を守る事に決したので、上人は本國院を構へて籠つた。翌年春喪が明けるのを待つて再び真間山に歸つたが、乾元元年三月八日、寺を弟子日楊に譲つて行衛定めぬ行脚の旅に出掛け、駿河の富士郡重須村に到つて父が戦死の跡を弔つた。そしてその傍に小やかな庵を結んで亡父の靈を守る事前後十六年に及んだが、文保元年三月八日六十三歳を一期として遂に此

の世を去られた。その時日興上人が近く大石寺にゐたので、上人の遺骸をその山麓に葬むり、そこに常林寺を建て、上人を開山とした。

(六) 日持上人

蓮華阿闍梨日持上人は六老僧の第六に位して、駿河蓮永寺の開山である。一に能登阿闍梨ともいふ。生まれたのは駿河國庵原郡松野村、父は松野六郎左衛門と言つた。幼名を松千代といひ、早くから比叡山に登つて學問を修めたが、宗風が兎角心に染まらず、意に満たない節が多かつたので間もなく本國に歸つた。すると、ある日實相寺の智海から高祖の事を聞いたので、何となく慕はしく思ひ、「それほどの立派な人、もし許されて弟子となるを得ば如何ばかり幸ひであらう」と心密かに思ひながら、尙ほもあれこれと問ひ訂すと、智海は日興上人の例を擧げて、

「若し心だに誠ならば、喜んで弟子の列に加へられるであらう、往き給へ」と勵まされて、遂に意を決して鎌倉に赴むき、許されて首尾よく法弟となることを得た、日持と名のつたのは此の時からである。時に文永七年年齢二十歳であつたといふ。

上人が初め叡山を去つたのは、日昭上人と同じく法華經大日經理同事勝の決に至つて疑ひを抱き、深く慈覺、智證の二師を疑つたからで、當時深く思ひ惑つた揚句謂へらく、「摩訶止觀に行道の障を示すに三あり、自らを疑ひ、師を疑ひ、法を疑ふ之れである、苟も一も疑ひあらばその罪通れ難きに、我は今や甚だしく二大師を疑ひ、冥より冥に入る、あはれ此の魔障を如何しやう。寧ろ、學を廢して行を企て、佛祖の冥護を祈つた方が宜からう」と。遂に意を決して國に歸つたが、高祖に師事してから、日夕その傍を去らず親しく教法を聞くにつけて之れ等の疑問は氷の如く溶け去つてしまつた。そこで仕へまゐらすこと愈々篤く、心を傾けて何かと盡し、佐渡に流されてゐられた間も、最も忠勤を擧むでた。

弘安五年、高祖示寂されるや、上人は身延山に本應院といふ子院を構へて、喪に服したが、喪終るや、兼ねて高祖の俗弟子となつてゐた松野の邑主某が、その地に一寺を構へて上人を請じたので、赴むいて之れに住まつてゐた。貞松山蓮永寺之れである。

上人常に謂へらく、

「わが日本國內の弘化には日昭日朗等の諸老あれば、十分である。故に我れは異域に赴むいて法華經の功力を説き、邪法に迷へる國々の人々を救はう、もし海中颶風の危ふきに逢ひ、大魚の難に逢ふ事あらば、寧ろわが至願である」と。爰に於て永仁二年九月十三日、松野に於て宗祖の十三回忌大法會を營むだ後、十月身延山に詣で、祖塔を拜し、翌永仁三年正月一日寺を門下の日教上人に譲り、一笠一杖の姿も軽く、漂然門を出た。泣いて従はんことを求めた恩願の御弟子を心靜かに諭し、「我が身命はもとより佛祖に捧げまゐらせたるもの、設ひ江魚の腹中に葬むらるゝとも露惜しまぬが、同じ苦み同じ嘆きを汝等にまで及ぼさんことは、我れの忍び能はざるところなれば」と、袂

を拂つて、春寒き富士の裾野の露原がくれ、孤影飄々見えなくなつた。時に年末だ四十六歳、果して異域に赴むいたのか、それとも途中で空しく仆れてしまつたのか、今にその所衛は分らないのである。此の故に、今に到る迄正月元日を以て上人の忌日として齋會を營むのである。門下に、日教、日圓、日進、日信等の諸上人があり、何れも一時間こえた人々であつた。



第三十八中老

(一) 日法上人

日法上人は甲斐國立正寺の開山である。和泉阿闍梨と呼び、父の名は芝田左近と云つた。上人初めは山梨郡等力郷北原村の眞言宗の寺金剛山胎藏寺の徒弟であつたが、一日高祖がその寺の地藏堂の傍なる一石に踞して立正安國論を講じてゐられたのを聞いて、その時の胎藏寺の住持と共に高祖に見えていろくの法華經の事を聞くに及び、從來信じてゐた眞言宗の非なる事を曉り初め、遂に意を決して身延山に赴き、懇ろに高祖に師事しまゐらせた。日法と名のつたのはそれからで、住持も日乗といふ名を與へられた。胎藏寺の檀徒等も相議して法華宗に歸依する事となり、寺の名を安國山立正寺と改ため、上人を請じて居らしめた。高祖が後に休息村と名づけられたのは此の地の事である。後に駿河國岡倉なる天台宗の僧空存といふ人、高祖の教へに服

(二) 日家上人

て弟子となつてから、日法上人を招いて一寺を開いた、光長寺之れである。その逝つたのは曆應四年正月五日で、實に九十歳の長き齡を保たれてゐた。上人は極めて彫刻に巧みで、その名後世にまで傳はつてゐる。

上人は安房小湊誕生寺の第二代で、寂日房といふ名がある。生まれたのは上總國夷隅郡奥津村、俗姓は佐久間氏、父は兵庫の亮重吉と云ふ豪族で、上人はその第二子に當る。その兄十郎左衛門重貞父の祿を襲うて奥津村に居るや、三寶に歸依して草堂を築き、釋迦牟尼佛を安置して香花を供へ朝夕禮拜を怠らなかつたが、文永元年高祖、父の墓を拂ひ、老母の安否を尋ぬる爲め小湊へ歸られた時、重貞お目にかゝつてその爲人と教法とに深く歸心し、草堂にお招きして法を受けた。その時、高祖に請うてその子の長壽應と云ふの

に手度を受けしめ、日保といふ法名をまで與へられたので、上人も欽差の情に堪へず、進むで又手度を受け、竹壽磨といふ幼名を改めて日家と言つたのは之れからである。(日保上人も又十八中老の一人である、傳後に詳し)。それから叔姪相俱に草堂に在つて日夜法華經の研究に努めて居たが、ある日兩人相談して小湊に一寺を開き、高祖を推してその開山とした。高光山日蓮誕生寺即ち之れである。そして上人は自からその第二代となつた。弘安二年に高祖お手づから大曼荼羅を畫いて與へられたので、上人の喜悅措く能はず、間もなく又別に藥王殿を作つて殿中に高祖並びにその父母の肖像を安置しまゐらせ、且つ石を建て、蓮花潭、誕生井、天道松、藏發道場を表はしたが、後又更に一字の堂を建て、高祖の兩親の墳墓とした。正和四年七月十日、壽五十八歳で歿した。

(三) 日源上人

上人は駿河岩本山實相寺の開山なると共に、兼ねて、武藏雜司ヶ谷の法明寺、同碑文谷の法華寺、駿河傳法村の正法寺等の開山である。字は智海、初め播磨法印と言つて富士郡なる天台宗の古刹岩本山實相寺の學頭を勤めてゐたが、正嘉二年高祖が同寺に來て藏經を閲された時に摩訶止觀の講義を聞いて高祖の人格その他に多大の崇敬を拂つた。そして、その時日與上人を勸めて高祖の弟子たらしめたが、上人も又機あらばその門に入らうと思つてゐる事二十年。弘安元年遂に意を決して天台宗を捨て、身延山に到つて多年の望みを達する事を得た。後又實相寺に歸つて法華經の修業に心を傾けてゐたが遂に同寺の檀越等相議して、上人を推してその開山とした。間もなく、駿河國須津の領主たる冷泉中將隆房といふ人、上人の事を聞き傳へてその領地に一寺を開き、強いて上人を招いた、東光寺之れである。その入寂されたのは正和四年九月十三日であつたが、その年齢は詳らから

無い。

(四) 日満上人

上人は丹後妙宣寺の第二代で豊後阿闍梨と呼んだ。高祖が佐渡に流された時影になり日向になりして助けまゐらせた彼の阿佛房日得たる遠藤左衛門尉藤盛の子で、生まれたのは建長七年、俗名を九郎盛綱と言った。文永八年高祖が流されて佐渡へ來給ふた時は、上人は僅か十七歳であつたが、父阿佛房に従つて忠實々々しく高祖に仕へまゐらせた。高祖が許されて鎌倉へ歸つてからも、常にその教風を慕つて止まなかつたが、弘安二年、父の阿佛房が石田郷一の谷村で死するに及び、哀傷の念措く能はず、泣く泣く茶毘に附した遺骸の骨を拾ひ集め、海山遠き身延山まではるく高祖を訪ねまゐらせた。そして初めて父の墓前で髪を剃り、豊後房日満と呼んだ。幾許もなくして佐

(五) 日秀上人

渡の故郷に歸るや自分の家を改めて寺とし、父日得を崇めて開山とし、自ら第二代となつた。即ち佐渡難太郎阿佛村蓮花王山妙實である。後高祖が手書の大曼荼羅を贈られた。康永二年八月十五日、年八十九歳にして歿した。

上人は相摸實相寺の開山、丹後阿闍梨と呼ぶ。姓は源氏、高橋入道時忠の子で俗名は高橋出羽世といひ、上州墨田郡にゐた。父時忠高祖に歸依する事頗る篤く、弘安二年に其の次男を出家せしめて法弟とした。即ち日秀上人である。日向上人が藤原兼綱の請に應じて藤原山妙光寺に法教を開いたが、正應元年に到り更に甲州波木井氏の請に依つて身延山に移るに及び、上人を招いて代つて妙光寺の主たらしめた。此の寺初めは常樂山妙光寺と言つてゐた

が、かつて上人が上京した折、時の帝たる後醍醐天皇に親しく謁見しまゐらせた時、天皇から常在院の號を賜はつたので、それから改めて常在山と呼ぶやうになつたのである。上人此の寺に在る事四十有餘年の後、上州墨田の舊館に移つて此所を寺とし、以て父の冥福を祈つた。妙福寺之れである。又相摸國宮田に實相寺を開いて開山となつた。建武元年正月十日年七十にして入寂された。

(六) 日忍上人

上人は相摸長福寺の開山で、下野阿闍梨の名がある。姓は源氏、父は熱原甚四郎國重と云ひ、上人は正峰山日辨の俗弟である。高祖を慕つて出家をしたが、高祖の寂後、相摸の國相橋といふ所に草蘆を結び、後幾ばくならずして寺とした、即ち長福寺である。晩年に到り日辨上人の招きに應じて正峰山

第二代の席を繼いたが、應長元年四月十日に他界された壽は詳かでない。

(七) 日進上人

上人は駿河正法寺の開山、三位阿闍梨と呼ばれた。初めの名は日心、後日進に改めたので、一に日真といつたとの説もあるが確かでない。俗姓は源氏安倍貞任の後胤である。幼少から高祖を慕つて出家し、長くお傍に侍つて忠實に仕へまゐらせた點では十八中老の中上人を推して第一とする。文永八年九月十二日、高祖龍の口の厄に遇はれた時は上人僅かに十三歳であつたが高祖の御身を憂ひまゐらすの餘り日朗上人と共に赴いて高祖の難に殉せんとし、少しも一身の安危などは顧みなかつた。高祖佐渡に流され給ふや、上人は日朗上人等四人と土牢に投せられ、幼弱の身を以つて具さに艱苦を嘗めたが節を變へなかつた。十一年高祖許されて佐渡より歸り、身延山の幽栖に入

り給ふや、上人も御供して日夕その膝下に侍つた。上人の父日元、身延山に一庵を結んで住まつてゐたが、間もなく死するや上人その跡を次いで庵の主となり竹の房と號した。上人の弟もその時分又高祖の門に入つて日善と稱した。正安の初め、檀越の懇請止み難きまゝ、身延山を出で、駿河富士郡柚野村に移り、同所の竹養山正法寺に入つて主となつた。正和二年、身延山第二代日向上人が微恙の爲め上總の法華谷に退くに及び、上人に招かれて往つて同山の第三代となつた。上人時に年五十五歳、龍勉寺務を執られた事二十年に餘つたが、建武六年の初め病床に伏して再び起つ能はざるを知つて法弟日善上人にその跡を次がしめ、その年十二月八日に瞑目した。壽七十六歳であつた。

(八) 日賢上人

上人は駿河海上寺の第二代で、淡路阿闍梨と呼んだ。駿河國安東村の人で幼より高祖の門に入つて法華經の弘通に努めたが、高祖の滅後も長くその塔を守つてゐた。永仁の中頃、武藏雜司ヶ谷法明寺の日源上人、碑文谷の法華寺に移らんとして上人を招かれた。上人再三辭退したが遂に許されなかつたので、止むを得ずして出で、法明寺の主となり、多年同寺に在つたが、正和の頃駿河の村松に遷つた。上人の法化大に功あつて、村人の法華宗に歸依するもの頗る多く、大殿の後に本佛堂を建てた。曆應元年三月十七日、九十六歳の長壽を保つて逝つた。

(九) 日保上人

上人は上總妙覺寺の第二代で、卿公と呼ぶ。俗姓は佐久間氏、父は十郎左衛門重貞と云つた。正嘉二年七月朔日、上總國夷隅郡奥津郷に生れ、小字は

長壽磨、小湊誕生寺の第二代、日家上人の俗姪である。文永元年父の重貞が高祖を奥津の釋迦堂に招じて十日間その教法を聞いた時、叔父の竹壽磨即ち日家上人と共にその門に入り、叔父と同日に剃髪して名を日保と改めた。その時の釋迦堂が即ち廣榮山妙覺寺であつて、上人はその第二代となつた。後重貞が小湊に誕生寺を建立するに及び、日家上人を揚げて第二代としたので日保上人はその第三代となり、又日家上人は妙覺寺の第三代となつた。即ち叔姪交互に兩寺に主となつたわけで、その開山には何れも高祖を推した。曆應三年四月十二日、八十三歳にして歿した。

(三) 日辨上人

上人は上總妙興寺の開山で、越後阿闍梨と呼ぶ。駿河の國富士郡の人で、俗姓は源氏、熱原神四郎國重の長子である。もとは眞言宗で、富士山麓なる

同宗瀧泉寺の五人の學頭中の一人として學才に富むでゐたが、ある日高祖の教化を聞いて法華宗の教義に甚く感じ入り、遂に身延山に登つて弟子となつた。日辨とはその時高祖から與へられた名である。弘安四年駿河の加島に寺院を開き、蓮壽山常講寺と號して暫らく其所に在つたが、後又上總に鷲山寺を開き、下總に妙興寺を開き、晩年に到つて甲斐に定榮山遠照寺を開き、相摸に關本山弘行寺を開いた。應長元年の夏、病を得て再び起つ能はざるを知るや少納言日源上人を召して鷲山寺を授け、法弟にして十八中老の一人たる日忍上人を招いて正峰山妙興寺を託し、閏六月二十六日に此の世を去られた。年齢は詳かでない。

(二) 日門上人

上人は常陸國妙行寺の開山で、一乘阿闍梨の名がある。その俗姓も、世壽

も、履歴も何れも能く分らない。只常陸の築地に妙行寺を開いた事、その後陸奥地方を曆遊して宮城郡に光明山大仙寺を開いた事等が僅かに記録に残つてゐる位のものである。永仁四年七月二十日に入寂した。

二八

(三) 日高上人

上人は下總の中山法華經寺の第三代である。帥の阿闍梨と呼ぶ。俗姓は源氏、太田金吾乗明の長子で、高祖の門に入つて出家をした年代等は不明である。父の乗明も法華信者で、上總の北方地名不詳に一草堂を構へて住し、讀經唱題三昧に一生を終つたが、後にその草堂を寺として妙顯寺と云つた。永仁七年の春、上人日常上人の囑を受けて下總正中山法華經寺の第三代となり、晩年に到り、太田の妙本寺、金原の妙大寺、山崎の妙福寺、常陸隠井の妙法寺を開いた。正和三年四月二十三日入寂、時に年五十八歳であつた。

(三) 日實上人

日實上人は騎河國妙海寺の開山にして、但馬阿闍梨と呼んだ。其の俗姓は詳かでない。日昭上人と交り深く、高祖入滅後は鎌倉に止まつて日昭上人を助け布教に盡す所多かつた。後日昭上人が那瀬の妙法寺を退く際、上人に命じてせたらしめんとしたが固く辭して受けず、濱の法華寺を退いた際にも、その後任に上人を推薦したが矢張り應じなかつた。一人騎河の富士郡沼津村に退き一草庵を結んで靜かに讀經唱題に暮してゐたが、晩年に到り檀越の請に止むなく海會寺といふを作つてそこに一生を終つた。妙海寺とは後に改めた名である。正和三年十月二十三日逝去、年は明かでない。

(四) 日傳上人

上人は甲斐の國妙法寺の開山で、肥前阿闍梨と呼ばれてゐた。其の俗姓や履歴はあまり詳かでない。初めは眞言宗の僧侶であつたが、多年高祖の教化を受けて、遂に法華宗に改めた。身延山に茅舎を結んで自から醍醐と言つてゐたが、後その地を名づけて醍醐谷と呼んだ。今の志摩坊は其の舊趾である。歿したのは乾元元年二月十二日であつたが、年齢は不明である。

(三) 日祐上人

日祐上人は太輔公と呼ばれてゐた。高祖送葬の列の中に太輔公日祐の名もあり、且つ守塔勤書帖十八人の列の中にその花押、手書等もあるが、その後を嗣いだ後裔もなく、布化開山をした寺も無いやうである。従つて事蹟、年齢、逝去の年月日等も詳かでない。

(二) 日位上人

上人は駿河國本覺寺の開山で、治部卿の名がある。幼少の時から高祖の門に入り、法華經に歸依する事頗る篤かつた。晩年、駿河國有度郡池田の郷に隠棲し、一心精進して題目三昧にその日くを送つてゐた。同郡村松郷に瀧水山海王寺と呼ぶ寺があつた。初めは天台宗の道場であつたが、寺主上人の教化に服して法華に改宗し、頻りに上人に請うて止まなかつたので止むなく出で、暫らく同寺に住し、後法弟淡路阿闍梨日賢上人に席を譲つて池田に歸つた。

文保二年四月二十三日入寂、世壽不明。

(三) 日合上人

日合上人は下總妙興寺の開山、筑前阿闍梨と言つた。幼にして高祖の弟子となり、日夕傍に侍つて教化を受くる事尠くなかつた。後曾谷道崇と云ふ者下總國千葉郡野呂村に一字を構へて妙興寺と號し、上人を招いてその開山としたので、入つて晩年を送つた。永仁元年十月十一日の寂、年齢俗姓等は詳かた無。

(六) 天目上人

上人は下野妙顯寺の開山で、美濃阿闍梨と呼ばれてゐた。伊豆の國波多郷の人で、母は駿河の國熱原甚四郎國重の女である。國重高祖に歸依し信心頗る篤かつたので、上人の母も之れに倣つて上人をその幼時から高祖の門に入

らしめた、高祖入寂後は専ら他の諸上人と共に遺教の弘通に努め、下野阿蘇郡奈良淵の妙顯寺を開いた。晩年に至り一旦退いて武藏國荏原郡品川村に草庵を結んで閑生涯に入つたが、後又出で、常陸の國の水戸領に修多羅寺を開いて餘生をそこに送つた。逝かつたのは延元二年四月二十六日であるが、世壽は不詳である。



第四 朗門の九鳳

(一) 日像上人

上人は京都妙顯寺の開山で、字を肥後房と言つた。下總葛飾郡平賀の人で、其の先祖は新羅三郎の第三子四郎盛美である。父は忠晴と云ひ、千葉氏の娘を娶つて文永六年八月十日に生だのが即ち上人で、幼名を萬壽丸と名づけた。忠晴夫妻は熱心な高祖の信徒で、上人を生むだ翌年その第宅を捨て、日朗上人に奉り長谷山本土寺と言つた。建治元年二月上人七歳の時日朗上人の門に入り、十一月携へられて身延山に登り高祖に謁して位一磨の名を與へられた。同二年、弟龜王磨(後に出家して日輪上人と云ふ、九鳳の一人として名あり)も登山して上人と共に高祖に師事した。同五年九月、高祖池上に赴むかれた時隨ひ往き、京都弘法の事を委囑せられたが、間もなく高祖寂せらるゝや、上人乃ち鎌倉比企ヶ谷に往つて日朗上人に従ひ、同六年老ひたる母を憂ふる

のあまり平賀に歸つて本土寺に居た。日像と言つたのはその翌七年の四月八日日朗上人から手度を受けた時に與へられた名である。翌年又鎌倉に歸り、それから屢々下總相摸の間を往來して、師に仕へ、母の安危を訪ぬる事頗る懇ろであつた。正應三年四月法華經全部を手寫し、五年諸説の異同を比較して秘藏集三卷を著はした。上人前々より謂へらく、「京都弘通の事は高祖の遺訓なれば水火を冒すとも行はざるべからず。然れども最初是他宗の僧侶信徒等の反目嫉視に逢つて大難を蒙むらん事必定なれば、豫め堅忍持久の精神を養つて之れに備へざるべからず」と。依つてその年の十月二十六日より一百日を期して、晝は比企ヶ谷の一室に籠りて法華經を寫し、寒氣肌を擗くが如き間に在つても一點の火を用ひず、夜は由比ヶ濱の海水に入りて壽量品を唱ふる事一百回、朝日出づるに及むで歸るを常としてゐた。朔風顔を破り、堅氷膚を裂くも忍辱の力牢として抜くべからざるものがあつた。翌永仁元年二月七日無事に素願満ちて靈驗を感じたので、愈々意を決して京師遊説の途に登らんとし、先づ池上に到つて日朗

上人に見え、その決心を述べたので、塔中并座の本尊並びに高祖がみ手づから刻まれた像及び舍利を與へられた。その月の中旬平賀に歸つて母に別れを告げ、安房に赴むいて誕生寺清澄寺を巡錫して高祖の靈跡を拜し、小松原を過ぎて鎌倉より伊豆に渡り、高祖が鑄居の跡に涙をそゝいでから次いで身延山に登り、祖塔を拜する事一七日に及んだ。それより越後の寺泊に到つて佐渡に渡り、此處でも高祖が苦艱の數々を偲びまゐらせて日滿上人等と相語りやがて能登へ船出の纜を解いた。偶々船中に乗り合はした年若い行者が、上人の四個格言を口にするを聞いて詰り寄つたので、上人諄々として説く事極めて懇ろに遂に行者を柝伏した。折から一天俄かに掻き曇り、颶風波を捲いて今にも船が覆らうとしたので、乗合の人々色を失ひ何れも戰々恟々としてゐた。上人時に泰然として少しも騒がず、やがて舷に突つ立上つて聲も朗らかに妙法を讀誦すると、不思議にも怒濤靜まり風收まつて、海は鏡のやうに風ぎ平らいだ。衆皆餘りの奇瑞に感嘆措く所を知らなかつたが、中にも先きの若い行者は心から法華經の妙法に感服してしまつて上人の門下となつた。

行者曰く、
「吾れは泰澄の法孫にして不動山の學存房といふものなり、上人願はくば巡化して一山の人々の迷ひを開き給へ」と。上人も快く承知した。
やがて船が能登の七尾に着くや、學存房と共に福壽村の某の家に到つてその主人を歸信せしめ、間も無く不動山に登つて妙法の演説をした。一山の衆徒上人を惡み罵つて果ては殺さんとまでしたが、加賀太郎左衛門兄弟なるもの、上人を救つてその身は共に代り討つたので、上人はその間に厄難を逃れた。(後郷人加賀兄弟の爲め本土寺を創立してその志を繼いだ)。路に西馬場村を過ぎ、上人又路傍の石に踞して法華の教法を説いたが、此所でも聽衆の中に上人を害せんとしたものがあつたので又も逃れて瀧谷に行き、更に甲斐に入つて白山廟下の一勝地に到つた。上人は此所で此の時まで附き隨がつて來た學存房を顧み、持つてゐた杖を岩間に倒しまに立て、「我れ密かに心に誓ふところあり、若し此の杖にして根を生せば此の地に一寺を建立せよ」と言つて相別れた。然るに幾ばくもなくして、其の杖芽を生じ葉を生じ枝を生じて

槐樹となつたので、學存奇異の思ひを成し、直ちに資財を募り集めて一寺を建てた。金榮山妙成寺之れである。

上人は學存と別れてから今濱村といふところに行き、宿の主の眞言信者なるを説服して法華にし、尋で夢生法輪寺の哲源をも歸依せしめて名を日源と改め、寺は本尊を直して妙宗を興へ、妙法輪寺と言はしめた。夫より加賀の國に入つて河原市村の妙珍、藥師村の乘蓮、直江谷村の井家莊太郎など言へる人々を信徒とし、井家氏が建て、上人に奉つた寶乘寺を妙珍に興へ、上人は又も飄々と巡錫を引きながら行手を急いだ。倉谷といふ所では崖の巨石に一々題目を書いて残し、大野村に到つて尙玄阿闍梨を化し、順路越前の國に到るまで、人を導き寺を建てた事少くなかつた。舟路敦賀に入つてから眞言宗の僧學圓と對論して之れを伏し、其寺を法華宗に改めて妙顯寺と言つた。其の外日禪日善等皆上人の教へに服して弟子となつた。永仁二年四月丹波を経て京都に入つたが、洛中洛外の人々、僧侶たるも俗人たるも問はず何れも上人が高祖の法弟で法華宗たる事を知つてゐるので一夜の宿りをも借さな

かつたが、偶々石清水に詣でた時、神官が靈夢に感じて上人に宿をかしたので、漸く壘の上に眠る事を得た。それのみか京都の商人某神託を受けて上人の教へに歸し檀越となつたので、それからやゝ力を得て説法教化に努めると共に、比叡山、三井寺の高祖の舊跡を巡禮して、過ぎし昔の跡を弔ひ歩いたが、遂にその月の二十八日宮城の東門に立つて朝日を拜し、四個格言を唱へて妙法を説き、夕べに到るまで諄々と説いて止まなかつた。五月十三日十字街道に立ち、聲高らかに、

「念佛は無間地獄に墮し、禪は天魔なり、眞言は國を亡ぼし、律は國賊なり、諸宗道を行ふ者なく地獄に墮つるの根源となる。唯一の妙法のあるあり、汝等これに依つて成佛するを得ん」と喝破したので、聽衆何れも上人を以て狂愚の邪僧と罵り呼ばはり、石を投じたり瓦礫を飛ばしたりしたが上人は毫も撓まず、日を経るに従つて東西を論せず貴賤を問はずに一心不亂に法華の妙法を説き、他宗を惡罵痛論したので、市中の上下次第に物騒がしく成り、毀貶誹謗の聲日を追うて高まつて行つた。

然し此の時既に一方には正法の理に服し、法華の徳に感じて信心の門に入るものが出て來た。殊に京都の北なる將軍邑の人々は歸信する者多く、遂に草堂を結んで上人の住居としたので、上人住いて此の草堂を十如是堂と名づけた。此の堂に入るの初め、十如是を講じたからである。此の時松崎なる勤喜寺の實眼僧都と云ふ人、上人が三條の石上に踞して妙法を説いてゐるのを聞き、後屢々來つて論難し、果ては深草法身莊嚴寺の實典といふ僧をも伴ひ來つて、如何かして上人を屈服させやうと思つたが、いつも却つて上人に説破されて、遂に永仁三年に到つて、二人とも上人の門に入り弟子となつた。之れ等と相前後して室町小野某、五條中興某等も亦歸信し、漸やく勢ひを増して來た。

上人、ある日松崎に往いて歸途下加茂を過ぎると、途に井上某なるものに逢ひ、その家に招かれて行つてみると、親族知友等相會してゐた。上人即ちその席上で懇ろに正法の教を説いたので、井上氏始め親族等何れも上人に歸依し、子院を興して講筵に供した。後に大妙寺と言つたのは即ち此所である。

又此の頃、濱士の日昭上人から手書の本尊に添へて上人が教化の盛大を祝する賀状を送られた。永仁四年の春、寸暇を利用して奈良に赴き、高祖歴遊の諸寺を巡拜しての歸途、宇治金久弘の家を過ぎて、久弘夫妻を教化した。久弘上人の徳に感じて、直ちに家の傍に草庵を結び上人に止まらん事を請うたので、上人も暫らくそこに起臥してゐたが、未だ決して安心して止まつてゐるべき時で無いので跡を法弟微妙房に譲つて京都に歸つた。此の草庵は後改めて直行寺と言つた。然るに徳治元年に到り、松崎の實昭が死んだ時、その門徒等上人に請うて法華の妙法を聞かうとした、上人喜んで諾し、七月十四日より十六日迄大いに法華經の功德を説き聞かせたので、人々皆感じ入つて全村悉く法華宗に改めて他宗を捨て、寺の名をも妙宗寺と變へた。

斯う言ふ風にして上人の努力は次第々々に世の中に認められ、法華に歸依するもの日を追つて多くなつたので、比叡山及び諸寺の僧徒は捨て置いては大事になると思つたのであらう、遂に徳治二年、上人を邪法の惡僧にして他宗を亂し害するとの名の下に官に訴へた。そこで朝廷でも五月二十日に大納

言宣房に命じて京都から上人を放逐しやうとした。上人其の非を鳴して再三願つたが許されなかつたので、止むなく京を出て西方に遊び、向日神の祠の傍に止まつて日夜法華經の弘通に力めた。それより雞冠井邑といふに行くところの三郎四郎といふ者、草木成佛の理を疑つて上人に尋ねたので、上人極めて明快に説明してやると、四郎は甚く感心して歸依し、自分の家に留まらん事を請うた。その間、里人の來つて教へを聞くもの多く、聞いて法華宗に改ためるものも頗る多かつた。眞言寺の實賢、深草の良桂等も來て上人と對論したが、何れも上人の説に伏した。延慶元年に上人の母、老ひ先の長からざるを知つて上人に逢ひたいと言つて來たが、上人も思慕の情止め難きものありとは言へ、追放の身であるからそれもならず、止むなく自分の姿を刻むでそれを母に贈つた。

然るにその年八月二十八日に到り、朝廷では上人を許して妙法弘通を許可したので、檀越小野氏は妙覺寺を興し、中興氏は妙蓮寺を建て、皆上人に與へ、上人は之れに依つて益々教法の流布に力めたが、延慶三年に到り又諸寺

の訴ふる所となつて再び京都を追はれた。此度は單に上人のみならず眞廣寺も同罪の名の下に同じ厄を蒙つたのである。そこでその月の二十八日心血を注いだ表を朝廷に奉り、法華の妙理を述べたが許されず、母の喪を聞いても赴むくことが出來ず、泣いて天下の非理非法を訴へた。四月十五日には先きに上人追放の勅使となつた中納言定資が、上人の檀越にして有名なる人三十三人及び庶民數百人を放逐して、全たく京都の地から法華の勢力を逐ひ拂はうとしたが、偶々應長元年に成つて皇太子御不例に渡らせられ、誰れ言ふとなく、法華經の行者を放逐した爲めだとの説が立つたので、朝廷では再び議してその年三月七日又上人を許して京都に入れしめた。

上人ある日嘆じて曰く。

「吾れ法の爲めに東奔西走して日朗師に見えざる事二十一年に及ぶ。法敵上下に蔓こりて明日をも知れ難き生命なれば、今の間に往いて他所ながらお暇乞いたし且つは故郷に赴むいて母の菩提を弔はうや」と。一笠一杖、姿も軽く心も軽く、櫻花さく京都の地を去つて鎌倉に入り、日朗上人に謁して、斷

えて久しき對面に互ひに無事なりしを喜び合つた。共に今後とても妙法の爲め身命を捨て、教化に盡さんことを誓ひ合ひ、行く手を急ぐ身なればとて飽かぬ別れを惜しみつゝ、故郷平賀に歸り、自分の家を寺として妙泉院と號し、亡母の像を刻して追悼の法筵を開いた。旅衣、馴れし故郷に來て見れば心も身體も自づと寛ろいで快き言ふばかりなく、成らば此のまゝ、故郷の樂土に安靜な生涯を送りたき願ひは山々ながら、法の爲め、衆生の爲め一身を捧げ盡した身の、まだ前途に爲すべき事の多々あるを思ひ、留まる事僅々、法筵の終るを待つて再び京都に志した。行き／＼て堅田より木濱に到る船中で彦左なる者に出逢つたところ、懇ろに上人を請ひ勸めたので、即ち今濱に到つて法を説き、夥だしい信徒を得た。後守山の本像寺、岩倉の妙感寺、今濱の法華堂等は主に此の時の信者に依つて建てられた者である。その他駿河興津の高光山石塔寺、府中の妙像寺等も此の旅に於ける上人教化の力に依つて出來たものである。遠州端場の妙恩寺は、上人が知己なる日如尼を訪ねて行つた時、日如尼が客寓の主なる金原左近を唯一夜の説法に歸依せしめて造らし

めた寺である。以て上人が旅中匆忙の間に在つても、如何に正法の弘通に力を盡したかを知り得やう。かくて無事京都に着くや、それから日夜教化に怠りなく、益々信徒檀越の數を増した。正和元年十二月二日に、日朗上人は遙かに遠く鎌倉の空から手書の本尊、並びに法語二帖を贈り來り、正和二年には、嵯峨大覺寺の妙實及び其の法弟智覺、正覺、祐存等歸信した。「法華宗旨問答鈔」を著はしたのも此の年である。翌三年には檀越本妙居士の寄附によつて三原に本妙寺を開き、文保二年正月十三日には高祖の「祈禱鈔」を註して諸弟子に授けた。元應元年には大曼荼羅を書して妙實に與へ、文保二年師の日朗上人から贈られた「本迹勝劣」の口決を註して高弟等に與へた。元應二年正月日朗上人比企ヶ谷で逝去したとの報を聞き、哀悼措く能はず、元享元年正月路程遙々鎌倉に赴いてその忌筵に列し、間も無く又西歸した。その年の夏大に早し天下何れも餓に苦しみ悩むだのを見て、上人は末法の罪となし、盛んに諸宗を罵つたので、諸宗又聯合して上人を朝廷に訴へた。十月二十五日朝廷又中

納言宣房に命じて上人を京師の地より逐んとしたが、時恰かも京中に怪異夥しく起つて人心皆穩やかでなかつたので、上人追放の事を思ひ止まり、却つて日野大納言に勅して上人を召し給ひ種々法華經の事などを御下問あり、十二月に到つて上人の徳を賞する爲め御溝の傍に安居院を賜うて居らしめた。元享二年、法弟日禪鎌倉より來つて錫を止めたので、檀越某寶國寺を建て、日禪に與へた。翌三年の春、高祖の入寂された日を紀念する爲め、法華講式を作り、毎月十三日大衆をして音樂を奏して伽陀を稱し、高祖の恩法を謝せしめたが、それより此の式は定例となつて長く續いた。元弘元年になつて天下に又不思議な怪異が打ち續いた。上人朝廷に上表して二王並立の前徴とし、速かに法華經を信奉して其の災を避けられん事を請ふたが、間も無く不幸にも此の豫言が當つて天下は亂れた。後北條高時が隠岐に天皇を配流し奉る時、上人護良親王の令旨に依つて祈禱し奉つた。之れ等の功に依り建武元年勅して妙顯寺を勅願寺としたまふた。足利尊氏軍を起して南北兩朝に分立した時、上人は屢々光明天皇の勅を奉じて祈禱し、度々

賞賜を蒙むつた。曆應四年七月十四日法規六章を定め、法嗣を選んで六上首を定めたが、康永元年高祖が入寂の甲子に當つてゐるので東行して身延山に登り祖塔を拜し、又鎌倉比企ヶ谷を經、武藏池上を過ぎて故郷の平賀に歸り父母の墓を拜した。その秋再び久しく住み馴れし京師に還つたが、最早老先きの長く無い事を知つて後事一般を托し、法弟たちを誠しめて靜かに死期を待つた。十二月十二日愈々病ひ革たまるや病室に大曼荼羅を掛け、香を焚き、經文を誦して夜を徹し、十三日の天未だ全たく明けきらず、地に曉の光ほの／＼と清らかな時、眠るが如く從容として、努力精進の長く苦しかつた生涯を終られた。壽七十四歳、深草山下に葬つた。延文三年、朝廷生前の功を嘉して菩薩號を賜つた。

(二) 日輪上人

上人は武藏池上本門寺の第三代で、大經阿闍梨と呼ぶ。文永九年下總國葛飾郡風早庄平賀郷に生れた。父は平氏、平賀に居るを以て平賀を氏とし、名を忠晴と云つた。母は千葉氏である。忠晴日朝上人に歸依してその俗弟子となつたが、その二人の子も出家して髪を剃つた。即ち長男は萬壽庵で日像上人と云ひ、次男は龜王庵である。即ち日輪上人である。一に治部卿とも言つた。正應四年九月日朝上人、上人に命じて本門妙本兩寺の主たらしめたが、上人はその時まだ僅かに二十一歳の若年であつた。それから常に日朝上人に付き随つて愛顧を蒙る事頗る篤く、従つて奉仕する事も又懇ろであつた。文保二年、日朝上人が七十四歳の高齡に達したので池上南の窪に一小庵を結んで閑生涯に入り、次いで元應元年に死するや、上人は頽齡に及ぶまで妙法弘布の爲めに谷に赴むき茶毘に附した。其の後、上人は頽齡に及ぶまで妙法弘布の爲めに餘年もなかつたが、延文四年四月四日病ひ革たまるや法嗣日山上人を擧げて

(三) 日善上人

兩寺の主たらしめ溢然として逝かつた。時に年八十八である。上人の開山にかゝる寺には、下野國宇津宮郷妙勝寺、相摸國大磯の妙輪寺がある。

日善上人は常陸大法寺の開山にして、大法阿闍梨と呼ばれた。俗性は平氏、北條義隆の孀孫濱名次郎光成の男である。幼少の時から俗世の煩き事を厭ひ、遂に日朝上人の門に入つて出家となり、大法房日善と言つた。間もなく常陸に安中山大法寺を築き、長い間此の寺に在つて正法の弘通に力めた。後比企ヶ谷に歸つたが、正和四年碑文谷の日源上人を招いて大法寺第二代の主とした。上人時に年五十三歳であつた。元應二年の春日朝上人死するに及び、比企ヶ谷の傍に實成寺を構へて喪に服する事三年の後、元享二年の夏京都に赴むいて日像上人を龍華院に訪ひ、五歳の間に舊跡を巡拜して悠悠々々風月を友

として。後檀越新たに寶國寺を築いて上人の居らん事を切に請ふので、止むを得ず入りて暫らく止まり、後又去つて碑文谷に還り、元弘二年九月二十二日に入寂した。壽七十歳。

(四) 日傳上人

上人は下總本土寺の第二代である。大圓阿闍梨と呼ぶ。越後の人で、俗姓は藤原氏、幼少の時から出家の志あつて同國柏崎の天台寺に入つた。文永十一年僅かに十八歳にして法華玄義講師となつたが、偶々日朗上人が高祖の佐渡の鑄屋を訪ひ此の地に宿るに當り、滞留の間寺に在つた。その間上人常に日朗上人に侍して法華經の教理を聞き、遂にその門に入つて法弟となり、俱に佐渡に渡つて高祖に謁した。日傳の名はその時高祖から授けられた名である。建治三年曾谷の日禮北谷山を築いて日朗上人を開山に請うたが、日朗上

人は固く辭して赴かず、上人を代りに命じて往かしめ本土寺の名を興へた。その時別に、手書の大曼荼羅、高祖から賜はつた九條の袈裟、水晶の念珠等を送つて寺寶となさしめた。上人別に日朗上人の塔院を造つて妙泉院と云つた。師の滅後、日輪上人が上人より若い事二十五歳、幼より上人に學ぶ所多かつたので頗る愛し、後進の爲め、日輪上人の爲めに、天台の章疏、高祖の遺書手書等を大成して比企ヶ谷の藏中に納めた。一夏は日輪上人の故郷なる平賀に送り、一夏は比企ヶ谷に安居してゐたので、世の人呼んで半年阿闍梨とも言つた。上人ある時岩部村に宿つた時、村の人々多數上人の爲め教化せられたので、それに酬ゆる爲めその地に寺を造つて安興寺と呼び上人を招いた。上人居る事暫らくにして歸つて妙泉院に退き、閑寂な晩年を送つた。逝かつたのは曆應四年三月六日、壽を重ねる事九十五の多きに及んだ。

(五) 日範上人

日範上人は丹波常照寺の開山で、大善阿闍梨と言つた。もと眞言宗の僧であつたが、日朗上人に謁して説を聞いてから法華宗に改めた。後丹波福知山に遊んだ時、其の地に小室と呼ばれてゐる信士があつた。元甲斐國小室の人で、嘗て高祖の教化を受けて信徒となり流居して此の地に來たり住むであつたが、上人が尋ねて來たのを見て大いに喜び、自分の居る所の若加山を供した、村民も亦力を合はせて寺を建て上人を開山とした。福知山常照寺之れである。其の歸路、伊豆船田村に行くとき、その村民亦寺を建て、上人に與へた。本教寺である。其の他相摸國雜末村にも長妙山圓教寺を開いた。元應元年正月日朗上人の逝去を聞いて悲愁措く能はず、直ちに喪に籠つて追憶の涙に咽んでゐたが、その爲めか病を得て遂に其の年の三月十五日に寂した。年齢は詳かでない。

(六) 日印上人

上人は本成寺派の開祖として名高い。俗姓は朝倉氏だこの説もあるが詳かでない。越後國三島郡寺泊の生れで、文永八年十月、高祖が佐渡へ配流の途中寺泊を過ぎられた時、謁して摩訶一九の名を授けられた。後ち同郡石瀬村天台宗青龍寺の智觀法橋の弟子となつたが、永仁二年鎌倉に遊び、日朗上人の摩訶止觀を講ずるを聞いて感心し、忽ち舊宗を捨て、その門下となり、名を摩訶一阿闍梨日印と改めた。時に十一歳であつたといふ。同五年越後蒲原郡大藻の庄薄會根村に精舎を營み青蓮寺と號し、徳治元年には同郡東島村に妙蓮寺を建てた。延慶二年、年四十六歳の時、越中國天台宗の學匠淨信法印舊宗を捨て、歸依した。正和三年、五十一歳の時師日朗上人を開祖に仰ぎ且つ山門の號を請ひ、元應二年には大光山本國寺を鎌倉松葉ヶ谷に建てた。嘉暦二年、年六十四歳の時本成寺を以て本門三大秘法の根本道場と定めたが、晩年に到り本成、本國の兩寺を嫡弟日靜に附し兩寺統一の貫主とした。その

後故あつて本成寺では日静を除歴した。嘉暦三年十二月、齡六十五で逝かつたが、終焉の地は鎌倉とも言ひ、又越後の妙蓮寺とも言つて分明でない。

(七) 日澄上人

上人は尾張國本遠寺の開山で大乘阿闍梨と呼ぶ。相摸小田原の人、俗姓は平氏、濱名豊後守時成の子である。三歳の時父母を失ひ祖母妙珍に育てられた。妙珍の死後は郷の山寺に入つて手度を受け、後ち比叡山に登つて天台の章疏を學んだが、間も無く鎌倉に来て日朗上人の弟子となつた。文永元年師と共に高祖が故郷房州に歸られるお伴をして隨ひ往き、小松原の難に危うき一命を取り止めて常野の地を巡化した。翌二年高祖が房州天津の領主故工藤吉隆の父行光に招かれた時、その地の眞言宗某寺の寺主、宗義を詰つて論戦を挑むたので、上人は高祖の命に依つて往いて寺主を説服し、遂にその寺

を改めて天津山日澄寺とせしめた。文永十一年比企ヶ谷の傍なる眞言宗の寺正覺院を法華に改宗せしめ、大巧寺と改めたのも上人の功である。高祖身延山に入り、日朗上人比企ヶ谷に住してからは常に師の傍に隨侍して本門弘通に努むる所頗る多かつた。元應二年日朗上人の喪に逢つてからは悲哀痛苦措く能はず、翌元享元年父母の舊地に寺を造り冥福を祈つた。後に妙珍山蓮昌寺と號したのは此の寺である。尾張の國に遊化して熱田に一寺を開き妙光山本蓮寺と稱して此所に在つたが、嘉暦元年八月朔日八十八歳を以て歿した。上人の開山の寺には、其の他武州池上に大坊本行寺がある。

(八) 日行上人

上人は佐渡本光寺の開山である。妙音阿闍梨と呼び、又松林院と號した。幼少の時から日朗、日像の兩上人に師事し、日朗上人の歿後は専ら日像上人

に從つて京師に遊んだが、後高祖が苦行の跡を慕つて佐渡に渡つた。その地に日朗坂と言つて日朗上人の舊跡がある。上人をここに一寺を開いて師を紀念する爲めに日朗山本光寺と言つた。元徳二年二月五日入寂、年六十二歳。

(九) 朗慶上人

上人は下總國法蓮寺の開山で、越中阿闍梨と呼ばれた。父は源氏、武州藤原の藤原左衛門佐義宗と言つた。高祖に歸依する事頗る篤く、弟子の禮を執つて身命を惜しまなかつたが、遂にその末子を日朗上人の門に入れて剃髮せしめた。即ち朗慶上人である。義宗の歿後、上人地を中延に卜して一寺を構へ神像を奉じた。今の八幡山妙法蓮寺是れである。逝去の月日は正中元年二月二十八日であるが年齢は詳かでない。



第五 名利歷代略傳

(一) 身延山歷代

第二代日向上人及び第三代日進上人の傳記は共に前に出て居るから茲には省略する。

第四代 日善上人

日善上人は第三代日進上人の弟で大寶阿闍梨と呼ばれた。七歳の時父日元に別れ、弘安元年高祖に謁して髮を剃つたが、同五年年末十二歳の時高祖の入滅に逢つた。正安年中兄の日進上人が駿河國に竹養山正法寺を開いたのでその跡を嗣ぎ、身延山竹の房の主となつてゐた。建武元年冬日進上人が歿したので竹の房を弟日上に托して身延山の方丈に入り第四代の主となつた。とき大檀越波木井氏の春乙磨出家を乞うて剃髮したので名を授けて日臺と言つ

た。

貞和二年十二月二十二日年七十七歳で入寂した。駿河國蘆原郡小島なる寶榮山善立寺は上人の開山である。

第五代 日臺上人

上人は字を鏡圓と云ひ、宮内卿と呼ばれた。本姓は源氏、身延山の檀徒波木井六郎實長の曾孫、信濃の刺史長氏の子である。元享元年甲斐國波木井村に生まれたが、幼少の時から佛を信じ、童形を以て日進上人に仕へてゐた。日進上人の逝去後は日善上人の許に在り忠實々々しく仕へてゐたが、延元二年日善上人年老ひて餘命幾ばくもなきを信じ、上人を手度して日臺の名を與へた。時に年僅かに十七歳であつたといふ。

貞和二年日善上人が寂してから身延山の主となつたが、其の逝去の年月年齢は不詳である。

第六代 日院上人

上人は一に實教阿闍梨と呼ぶ。甲州巨摩郡梅平村の人であるが、其の姓は詳かでない。幼少の時から高祖の門に入り、後研學の爲め比叡山に登り、南都に遊び、その他諸宗を歴巡つて研究する事三十餘年にして身延山に歸つた。爾來日臺上人に隨つて益々法華經の奧儀を究めたが、遂に日臺上人の後を嗣いで同山第六代となつた。應安六年六月二十五日逝去、年六十二歳であつた。

第十一代 日朝上人

日朝上人字は鏡澄、加賀阿闍梨と呼び、行學院と號した。應永二十九年を以て伊豆那賀郡宇佐美郷に生れた。幼にして風姿人に勝れ、性質又伶俐であつたから三島の日出といふ僧、上人の父母に請うてその法弟としやうとした。初めは父母惜むで背かなかつたが、上人傍に在つて泣いて出家になりたがつたので遂に日出の弟子とした。時に八歳であつた。手度を受けて後比叡山に

學び南都に遊び性相の諸學問を研究して歸つたが、身延山の日延上人の傳に在つて教文を受け、神童の稱があつた。永享八年日が出が上人を三島本覺寺の主たらしめた時などは僅かに十五歳であつたといふ。長祿三年日出死んでからは、その遺命に依つて鎌倉の本覺寺をも兼ね治め教化大いに振つた。寛正元年日延上人が退隱するに及び、上人招かれて身延山第十一代の主となつたが、これより今迄の寺内が狹隘で大衆を容れる事が出来なかつたのを憂ひて寺塔を増建し、又身延山への路險しくして老者の參詣する能はざるを憂ひて、高祖の舍利を分つて鎌倉本覺寺に塔を築き、東身延山と稱した等、治績頗る見るべきものがあつた。寺務四十年倦まず携ます宗務の爲めに盡したが、明應八年職を辭して山下に庵を結び閑生涯に入つた。入寂したのは翌九年六月二十五日、年を重ねる事七十九歳であつた。上人の生處は後ち寺となつて妙秀山朝善寺と呼ばれた。その他上人の開基の寺は甲州八代郡法來寺を始め十有餘ヶ所の多きに及んでゐる。著作も又頗る多い。

第十二代 日意上人

上人は字を法鏡と云ひ、圓教院と號した。初めは天台宗比叡山の僧で勢州桑名村妙蓮寺にゐたが、後ち身延山に登り、第十一代日朝上人と三晝夜に亘る法戰の後遂に其の説に服して法華宗に改め、名も日意と變へた。爾來日朝上人に師事する事篤く、その退隱後身延山第十二代として主座に在る事二十年の後、病を得て西谷に退き靜養した。今の圓教坊之れである。永正十六年三月三日入滅、年齢は明らかで無い。

第十三代 日傳上人

上人は幼少の時から日朝上人の門に入りその死後日意上人に就て學び遂にその死後を繼いで身延山の座主となつた。時に甲斐の國主武田信虎檀越となつて寺を造り上人に捧げた。今の甲府の信立寺之れである。身延山が官寺となつたのも此の時からである。上人は又相州小田原北條氏の臣宇野定治の造

つた光淨山玉傳寺、尾張名護屋の城下なる妙瑞山大光寺の開山である。天文七年十二月十日、年六十七にて入寂。上人は別に寶聚院の號がある。

第十四代 日鏡上人

上人は善學院と號した。幼少の時から日意上人の門に入り、その寂後は日傳上人に仕へ、本化の奥儀を究めて遂に身延山の主となつた。弘治の頃武田の家臣にして朋友の交り篤かつた原美濃守信知、小幡山城守信貞と相談して信州海津の城下なる高祖檀越久能氏の宅を寺とし上人を請うて開山とした。久能山蓮乘寺之れである。別に甲斐篠原村にも八幡山法久寺を建てた。かつて徳川家康が開運の符を請うて武運長久を祈つたが、幾ばくもなく關八州及び甲斐信濃の主となるに及び、自から身延山に詣で、謝したといふ。上人晩年に到り西谷に退隱し、永祿二年四月二十五日年五十三で逝去した。

第十五代 日叙上人

上人は寶藏院と號した。幼にして日傳上人の弟子となり、後日鏡上人の囑を受けて身延山第十五代となつた。此の時天下大いに亂れて法衣を着てゐる身でありながら劍戟を手にするものも多かつたが、身延山は静かによく治まつてゐた。在職十九年の後日整上人に位を讓つて西谷定林寺に退き、天正五年五月二十二日五十五歳にして逝かつた。初め武田信玄身延山の地勢の峻嶮なのを見て、居城を此所に移さんと欲し、禮を篤くして上人に願つたけれど上人は高祖の靈跡を汚すに忍びずとて頑然之を却けた。信玄大いに怒り、元龜三年四月十一日兵を以て山を圍むだが、直ちに病ひを發して退いたので、一山事無くして濟むだ。

第十六代 日整上人

上人初め字を琳光院と言つたが、後字を以て院號とした。下總の人である。當時天下麻の如く亂れ、群雄割據して互ひに雌雄を争ひ一日も安き日が無かつたので、上人心中に之れを憂ひ、ある日密かに家を出で身延山に登り日傳

上人の門に入つた。後日鏡日叙の二上人に歴仕し、日叙上人の後を繼いで主座となつたが、在職僅かに七年の後、天正元年八月二十日逝去した。年七十三である。

第十七代 日親上人

日親上人字は純慧、號を慈雲院と言つた。甲州巨摩郡諏訪村の人である。幼少の時から日傳上人に仕へ、その死後は日鏡上人に依つて得度し、偏く諸國の名高い寺々を廻り具さに辛酸を嘗めた。後京都の妙法華寺に住し、又藻原の妙光寺に在つたが、天正中日整上人に招かれて身延山に登り主座となつた。寺務十五年、文祿元年九月十一日、年五十八で入寂した。初め徳川家康身延山に參詣し、莊田一千石を寄附せんと言つたから、上人曰く、「當山は高祖の精神の止まり棲み給へる靈地なれば白毫相光淨界に滿ち、自然に餘裕あつて飢餓、寒さ等に冒さるゝ事なし。閣下他日幸運を得て都城を築き給はゞ、その時座具の地を給へ」と。

後家康江戸城を開くに及び、上人を召して身延山擁護の任に當らん事を誓ひ、飯高、中村、小寺諸談林の俸地を割いて江戸に停住の地を與へた。因つて上人此の地に瑞林寺を開いた。その門下に名僧多く、順藏院日逝、妙雲院日賢、法雲院日道、中正院日友、慈昭院日慧等の諸上人は皆何れも有名である。

第十九代 日道上人

日道上人は法雲院と號した。日親上人の門下教藏院日生上人に隨つて學び、その命に依つて下總飯高談林に至り、蓮成院日尊上人を助けた。慶長二年その跡を嗣いで飯高の化主となり、同四年身延山に主となつて、居る事三年の後、即ち慶長六年の冬閏十二月に逝去した。壽五十であつた。

第二十代 日重上人

上人は一如院と號した。京都の人某の子であるが、生まれたのは若狹であ

る。幼少の時京都の本國寺に投じて出家し、次いで和泉堺に赴いて、口説、日誦、日詮等の諸上人から天台三大部を學む。歸つてから又本國寺に住して日々天台教を講じたが、講席日に盛んになつたので本國寺の大衆等相議して本國寺内に求法院を設け上人を請じた。天台教の講義を續くる事七年の後小庵を結びてその中に隠れ住み、慶長七年に身延山から迎へられても固く辭して受けず、高弟日朝上人を遣はして座主としたが、身延山では上人の功を賞して身延山第二十代とした。上人閑居して事を避けてゐる間も教へを聞きに集ひ來る人々座に満ちて斷えず、上人又叮嚀に祖書等を説き聞かせた。常に質素を貴むで華美の風を嫌ひ、その死に到る迄粗末な生活に甘むじてゐた。元和九年八月六日壽七十五歳にして歿した。その一生を通じて説法した事五百四十餘座、讀經一千五百七十部に及び、遺著に、見聞恩案記二十四卷、崑玉集十卷、同撮要集、空過致悔集、法華神書一名三十番神抄各二卷、和語鈔十卷、立正安國論開書一卷等がある。

第二十一代 日朝上人

上人字を孝順、號を寂照院と言ひ、俗姓は塚本氏である。父某は越前の人であつたが零落して若狭小濱に到り、同國長深寺の日欽上人に仕へた。父の歿後上人は母に従つて京都に上り、本國寺の日重上人に學んだ、時に年十二歳であつた。爾來六年間天台三大部を講究し、遂に三井の園城寺に遊んで俱舍を學び、南都の諸大寺を歴遊して法相戒律等を修めた。後本國寺に歸つて六條談林に講席を開き、本滿寺の主となつた。慶長七年身延山から日重上人を招いた時、上人代りに推されて座主となり治績の見るべきものがあつた。同年十月「宗門綱格」一卷を著して後陽成天皇に奉り、後女御中和門院等の旨を受けて屢々宗門を説き紫衣を賜はつた。翌年八月一度本國寺に退いたが、十四年に到り再び山に登つて主となり、四年にして辭して西谷に隠れた。元和四年又西上して攝津能勢に覺樹院を築いて隠棲したが、同六年紀伊侯の夫人養珠院が駿河の松野寺を紀伊有度郡沓谷に遷して蓮永寺と號するに

及び、禮を厚くして上人を招いたので、入つて同寺の中興となつた。寛永二年寺務を日遠上人に譲つて再び能勢に隠れたが、同五年池上本門寺の日樹上人不受不施の異議を唱ふるに方り、日遠上人と共にその鎮壓に力を盡したので同七年その功に依つて幕府の命により京都妙満寺の主となつた。然し此の度は長くは止まらず寺務七年の後三たび能勢の舊庵に歸つたが、寛永十二年十月二十七日京都の本満寺で逝かつた。時に年七十六。遺著に「實旨雜記」「書拾草」各二卷、「宗門綱格」「宗門大意」「一筆草」各一卷、「西谷各自個條」三卷等がある。

第二十二代 日遠上人

日遠上人は字を堯順と云ひ、號を心性院と言つた。別に一道といふ名もある。俗姓は石井氏、京都の人で父を了玄と言つた。上人に了雅、了具といふ二人の兄があり、皆學問に秀で、和歌に巧みであつた。上人は幼ない時に、父を喪つたので六歳の時母に従つて本國寺に到り、日重上人の弟子となつて

専ら天台教を學んだ。伶俐聰明學問の進歩著るしく、十六歳にして早、既に法華經を講じ、尋いで文句止觀を講じた。後南都に遊んで俱舍唯識戒律等を究め、京都に歸つて東山大藏經を讀み、鈔錄三十卷を作つた。二十八歳の時下總國飯高談林より招かれて出發し文句言義等を講じた。三十三歳の時身延山の主となり、山内に立正會を開いて大いに學事を奨勵した。偶々當乘院の日經上人淨土宗の僧に難を構へられたので、上人自ら駿河に到り徳川家康に謁して論を決せんとしたが許されなかつた。上人は心中面白からず思ひ、去つて身延山を辭して大野に隱棲し本遠寺を開いた。元和元年家康の命に依つて再び身延山の主となつたが、一年にして退いて又大野に隱れた。寛永七年池上本門寺の日樹上人不受不施の異議を唱ふるに當り、上人日乾上人等と共に鎮定に力を盡したので、その功に依つて本門寺を幕府から與へられたが、此所にも居る事僅一年にして鎌倉の經ヶ谷に隱棲した。寛永十九年二月池上に赴いたが、その以前からの病氣が重つて三月五日に此の世を去つた、壽七十一歳。

第二十三代 日祝上人

號は慧眼院、日遠上人の門人である。幼にして日重、日乾、日遠の三上人に親炙し、後西谷談林の化主となつた。慶長十三年日遠上人身延山の主席を辭して大野に隠れたので、命を受けて代つて庵主となつたが、翌年病に罹つたから退いて醫藥を服した。乃ち、日乾上人再び主位に就いたが、七年にして退いたので、日遠上人代りに又出で、庵主となつた。これを乾遠二度の進山と言つた。上人は病ひ遂に癒えずして元和元年五月七日に瞑目した。年僅かに四十九歳であつた。

第二十四代 日要上人

號は顯是院、日遠上人の門人である。初め正東談林の講主となり、京都の妙傳寺に住してゐたが、後に甲斐小金の妙法寺に遷つた。元和元年、師の日遠上人が家康の命に依り再び身延山の主となつたが間も無く退くに及び、上

人を擧げてその後任たらしめた。在職九年、慶長九年七月五日に歿した。壽四十八歳である。身延山の高二丈の五重の塔は上人の建てたものである。

第二十五代 日深上人

上人號を妙寂院と云ひ、日乾上人の門人である。幼にして出家し、六條談林で多年の苦學を積むた後、日遠上人の囑を受けて京都の本満寺に居たが、元和九年の秋日要上人の後を受けて二十五代の主となつた。寛永四年十二月二十八日寂、年五十四。

第二十六代 日暹上人

字は隆恕、智見院と號した。日遠上人の門下であつたが、日乾上人の選に依つて鷹峯談林の化主となり、後京都本満寺に移つた。日深上人の後を繼いで身延山の座主となるや在職二十二年の長きに涉り、不受不施の異議を鎮定した、慶安六年五月二十九日、六十三歳にして歿した。

第二十七代 日鏡上人

上人は字を徹長と云ひ、通心院と號した。正東談林の化主である。慶安元年身延山に主となつてから十二年、その間萬善堂を改造した。時に平賀の日述、小湊の日匡、碑文谷の日晴、奥津の日遵、谷中の日誠等の諸上人黨を結んで邪義を唱へたので、承應元年上人遂に幕府に訴へてその黑白を訂さうとしたが、まだ終らない中に亡くなつてしまつた。萬治二年十月二十八日、時に年五十八であつた。

第二十八代 日鏡上人

上人は字を義道と云ひ、號を妙心院と言つた。正東談林の化主で能登瀧谷の妙成寺に瑞世し、萬治三年四月二十八日日鏡上人の遺命を受けて身延山に住した。その職に在る事八年、寛文七年七月二十三日に六十七を一期として逝なつた。上人は前住の日鏡上人當時の法亂の黑白がまだ終らなかつたので

第三十代 日通上人

その志を繼いで専ら糺命に力を盡くした。又上人は法務の餘暇に丈六堂、三光殿等を造營し、山上に家康の社を祀つた。その他、加賀泉野の千部山常樂寺、卯張の弘法山三寶寺、妙法山蓮華寺、能登柳田の淨心寺、越中新川の法光山妙輪寺等は皆上人の開山である。

上人は字を玄海と云ひ、寂遠院と號した。俗姓は松田氏、初め妙傳寺の日勇上人に師事して鷹峯談林に學んだが、次に山科談林に至つて談林の講主となり、やがて又飯高談林の化主となつた。摩訶止觀解、指要鈔解は此の時の著である。次いで長興、長榮兩山の主となり、間もなく身延山の第三十代目となつたが、在山八年の後、延寶七年二月二十一日武藏國瑞林寺で入寂した、時に年六十六。京師西岡の真如寺、相摸金井の法傳寺は上人の開山にか

第三十一代 日脱上人

上人字は空雅、一圓院と號し、遊明子とも呼ぶ。加賀の人で俗姓は逸見氏、日理上人の門に入つて出家し、後下總の飯高談林に遊學して苦學二十年の後遂に山科談林の講主となつた。後又飯高談林の化主となつたが、「記事一圓記」はその時の著である。延寶八年身延山に登り、元祿四年賜紫の詔を拜した。逝去したのは同十一年九月二十二日、その時年七十三歳であつた。駿河國富士郡香久山妙法寺、武藏國久良岐郡榮玉山常清寺、甲斐國原島一圓寺、飯野の了圓寺等は皆上人を崇めて開山とした。

第三十二代 日省上人

上人は幼少の時から善立寺主十如日行に投じ、十三歳の時、飯高談林に入つた。修學二十餘年の後立義講主となり、後山科の請に應じて妙傳寺に住したが、間もなく飯高談林の化主となつた。天和二年四十七歳の時鎌倉扇ヶ谷

第三十六代 日潮上人

に幽棲したが、元祿二年徳川光圀卿が禮を篤くして迎へたので水戸に在る事三年、去つて會津に往つた。同十一年招かれて身延山に入つて座主となり、十四年紫衣着用を許された。職に在る事七年の後東谷に退隱し、享保六年六月十三日に歿した。壽を保つ事八十五歳。

上人は字を海音と云ひ、號を六牙院と云つた。一に瑞松堂松岩といふ名もある。八歳の時恵明日焼上人の門に入つて出家し、十九歳にして飯高談林に入り、三十五歳にして首座の位に上つた。その翌年山城國松崎談林の請に應じて法華文句を講じ、享保五年飯高談林に招かれて出講した。天文元年幕府の命に依つて身延山に昇り、在山九年、寛保三年に京都に赴むき天皇に拜謁して御扇子を賜はつた。時に身延山の祖塔朽ち殿堂傾むいたので上人力を奮つて修繕した。延享元年十一月職を辭して退院し、翌二年九月二十日年七十五歳にして逝つた。著作に「本化宗牒感得記」一卷、「大菩薩記」二卷、「本化別頭佛

祖統記二十八卷、蒙古對治曼茶羅記一卷がある。

第七十三代 日薩上人

上人字は文嘉、號を容月と云ひ、後文明院と言つた。上野桐生の人新井宗右衛門の六男である。九歳の時武藏國秩父郡淨蓮寺の日軌上人の弟子となり、十九歳にして加賀金澤に遊んで優陀那日輝師に仕へ、二十七歳江戸に往つて藤森弘庵の塾で儒學を學んだ。後駒込の蓮久寺に住して學問の譽次第に高くなつて行つた。明治五年教部省に召されて一宗の教務を執り、後身延山の座主となつて大教正に任せられた。それより又日蓮宗務院を設置して大いに宗徒の教育に力を盡し、且つ諸宗の高僧と相談の上福田會育兒院を興して孤兒を救濟する等治績少からずあつた。晩年に到り池上本門寺に住したが、明治二十一年八月二十九日、壽五十九歳にして逝去した。遺著に「法華宗日鑑」一卷がある。

第七十五代 日修上人

上人は圓政と字し、心妙院と號した。備後福山の人中村源助の子で文政六年三月四日に生まれた。幼名は萬吉、七歳の時備中花尻村普門院の日現上人について得度し、京都妙顯寺日合上人の弟子となつた。東訊西問使を勤め、優陀那日輝師に就いて學問大いに進むだ。日輝上人示寂の後は一先づ故郷へ歸つたが、明治五年大阪に出で、講席を張り、後ち本國寺に住し、次いで身延山の第七十五代となり大教正に補せられた。明治二十四年五月十七日入寂世壽六十九を重ねた。

第七十六代 日阜上人

日阜上人字は秀泰、號は春應院と云つた。越中國新川郡堀川村中田氏の子で、九歳の時福山大法寺の日清に就いて得度し、十四歳にして下總の中村談林に學んだ。加賀立像寺日輝上人の風を慕つてその門に學ぶこと八年の後、

再たび中村談林に學び、二十五歳の時相摸國三浦の本住寺に住した。後大光山妙藏寺に主となり、次いで岡山中教院、大阪中教院、東京大檀林の教授に歴任して、明治二十五年六月五十七歳の時身延山の座主となつた。先代日修上人の志を繼いで大學院を設立し一宗の教育に力を盡したが、二十六年八月病ひを得、同月二十六日逝去した。時に壽五十八であつた。

(二) 池上本門寺歴代

第七代 日壽上人

上人は相摸の人で幼名を龜壽磨と言つた。父は長尾氏、母は狩野修理入道叡昌の女で、後髪を剃つて理哲と呼んだ。上人生まれて間もなく日上上人の門に入り、永享六年の夏師の上人が死んでからその後を繼いだ。寶徳元年十

九歳にして美濃に遊び、三光房尊海法印の許に居ること三年、偶々病に罹つたので學養寺に宿つて靜養したのが効無く、享徳元年四月四日に未だ二十二歳の若さを以て逝かつた。

第八代 日調上人

上人は上總國伊保藏向臺の人である。父は狩野氏で法名を明舜と云ひ、母は下野足利郡の人で幸善と呼んだ。幼少の時から兩上常住院主日隆上人に依つて出家し、二十五歳の夏第七代日壽上人の囑を受けて本門寺主となつた。此の時山家氏、庄内氏等が皆檀越となり、俗兄の法蓮が弟子と成つた。此の法蓮といふ人は、上人の一時他處に居た時、火災の爲め山内の總べて焼亡してしまつたのを、力を盡して舊に復した人である。上人主席にある事五十年の後文龜元年十月八日に入寂した。世壽詳かでない。

第十二代 日惺上人

上人は佛乘院と號し、天文十九年を以て備前國福岡に生れた。出家して後、遍く名僧を訪うて修業し、殊に本化の宗義に通じた。時に本門寺主十一代の日現上人が歿してから同山に主なき事二十一年の久きに及び、本行寺、本行院の兩主が交互に役を務めてゐたが、兩人共日愷上人の學徳勝れてゐた事を聞いて相談の上迎へて主とした。時に上人の年三十二歳であつた。後箱根軍旅の時徳川家康から命せられて攘災の符を奉つた。家康江戸城を築くに及び是れより以前には本門寺主は主に比企ヶ谷に在つて池上を司つてゐたのが、それより池上に常住せしめる事となり、且つ府内に停住の地五ヶ所を與へられたので、其地に寺を造られた。興榮山朗性寺、鎮護山善國寺、朗昌山蓮久寺、眞立山正覺寺、實光山蓮長寺之れである。慶長三年七月六日、四十九歳で歿した。

第十三代 日尊上人

上人は字を文甫と云ひ、蓮成院と號した。出家して六條本國寺の日補上人

に師事し、命に依つて比叡山に登り天台の學を修めた。後日愷上人死して本門寺に主を缺いたので招かれて招かれて主席となり、居る事六年、慶長八年三月十六日に此の世を去つた。年齢不明。

第十四代 日紹上人

日紹上人は字を無間と云つた。その生國は詳かでない。池上十三代の日尊上人の弟子となりて譽れ高く、後通生院の日祐上人が小西談林を開くに及び招かれて文句を講じた。慶長八年日尊上人の歿後、上人嗣いで十四代となつた。徳川秀忠が寶塔一基を送つたのは上人の慶長十三年で、上人が在職中の事である。後大峰法性寺を中興し、同寺に主座たる事十五年の後、元和三年四月十九日に四十九歳を以て逝つた。著作に「四教義集解要文」八卷、「顯正錄要文」四卷、「四教義要文」各五卷、「文心解要文」、「觀心記」、「智者一代訓善」各二卷、「草木成佛記」一卷がある。

第十五代 日友上人

上人は中正院と號し、俗姓は佐藤氏、武藏國武射郡湯坂村の人である。初め飯高談林に遊學し、講習の傍ら法華玄義を講じてゐた。今の法華玄義招釋は上人が當時の講義を、圓韓なるものが竊かに盗み記して出版したものであるといふ。後に日遠上人に會つて弟子の禮を執り、學徳益々進むで元和三年の夏日紹上人の後を繼いで庵主となつたが、居る事僅かに二年、同五年の六月十四日に逝かつた。年は詳かでない。

第十八代 日耀上人

日耀上人は字を住心と云ひ圓是院と號した。上總國植谷村の人で、鈴木和泉守某の後裔である。上人初めは中正院日友上人の弟子となり、後ち又心性院日院上人の門に入り、飯高談林第十二代の化主となつて、慶安元年飯高大講堂を再建した。此の時本門寺に庵主がなかつたので入りて主となり、明曆

元年十月十二日に歿した。世壽未詳。

第十九代 日豐上人

上人字を維遠と云ひ、號を僧那院と云つた。一説には鷲峰院と言つたともある。俗姓は大河原氏、能登國七尾の人で、慶長五年八月十一日に生れた。十一歳の時加賀の蓮昌寺に投じて得度し、次いで京都妙顯寺の日鏡上人に就いて天台の章疏を學んだ。十六歳にして上總の豐輪寺に學び、禪那院日忠上人の講席に列した。年が若かつたので末席に居たが、梅檀は二葉より芳ばしで自然と異彩を放ち、一時池上の日耀上人と比敵した。數年の後自から玄義を講じ、中村談林、西谷談林等で講義をして大いに聲望を擧げた。四十一歳の時妙顯寺の第十四代となり、明曆の初め本門寺の第十九代となつた。逝去したのは寛文九年六月十五日で、世壽七十。上人は權大僧都の位を持つてゐた。

第二十一代 日養上人

上人は字を高月と云ひ、一乘院と號した。俗姓は蔭山氏、若い時日通上人に随つて出家し、飯高談林で二十餘年の修業を経て玄義の講主となつた。後ち大野本遠寺第五代となり、終に飯高談林の化主となつた。本門寺主となつたのは寛文十二年で、翌延寶元年二月八日年四十九歳で逝かつた。

第二十三代 日潤上人

上人は字を慈雲と云つたが、後ち此の字を院號とした。江戸の人、妙悟院日玄上人の門に入り、飯高談林で學ぶ事二十餘年の後ち、終に教藏院の席を繼いで玄義の講主となり、間も無く本門寺二十三代となつた。寶永七年庚寅の冬池上の厨庫火を失し、不幸にして佛殿祖堂等皆焼亡し、高祖自筆の長策山本門寺といふ勝字も焼失した。上人苦心を重ねて再興に盡し、客殿、方丈、厨庫等を造つて佛殿祖堂等未だ出來上らない中に病を得て享保二年正月二十

七日に逝去した。年齢は明かでない。

第二十四代 日等上人

上人は字を靜慧と云ひ、妙玄院と號した。妙悟院日玄上人の弟子となり、十五歳の時から飯高談林に入つて法教の事を學ぶ事三十年、元祿八年四十五歳にして玄義の講主となつた。駿河國村松海上寺に居ること十年の後ち、飯高談林の化主となり、正徳元年六十歳にして水戸侯に召されて三昧堂の講主となつた。次いで安房の誕生寺主となり、終に兩山の主となつたが、時に火災の後だつたので寺務頗る多く、専ら造營に勤め、將軍の命に依つて深徳夫人の廟を建てなごした。在職十二年、享保十八年十二月二日壽八十二にして歿した。

第六十三代 日昇上人

上人は字を泰山、號を栢庵と云ひ、後に妙乘院と稱した。越後の人で、俗

姓は小林氏である。初めは優陀那日輝上人に仕かへ、後妙光院日京上人の弟子となつてその教へを受けた。佛學、儒學は固より、詩、書畫、琴、笛等の末技に到るまで通じてゐた。在山中も屢々身延山主に推されたが辭して出でず、寺務の傍ら文墨に親むで満足してゐた。明治二十四年十月二十九日入寂、壽六十。遺著に「述門宗義鈔」一卷、「楮庵燕語」、「禪餘書談」各二卷がある。

(三) 京都本國寺歴代

第四代 日靜上人

第一代は高祖聖人、第二代は日明上人、第三代は日印上人である。

上人は妙龍院と號して駿河加島の人である。俗姓は藤原氏、父は上杉修理亮頼重と言ひ、母は足利家の女である。上人幼名を豐義磨と言つたが、幼少

の時から世の中の俗氣を厭つて、同國池田村日位上人の許に投じて出家した。文保二年、上人二十一歳の時師の上人に別れてから鎌倉に遊び、摩訶日印に隨つて師弟の契りを結んだ。元應三年日明上人の喪が終つて師は一旦越後に歸つたが、間もなく病に罹つたので馳せて其の臨終の枕邊に侍し、泣く泣く死水をとつて一度び鎌倉に歸つた。貞和元年、上人足利尊氏と謀つて京師六條の傍に地を相して本國寺を移し、同四年、伊東威應の隨身佛、伊豆佐渡の流罪赦免狀、高祖手書の安國論讓狀等を迎へて大法會を營み、高祖を勸請して開山となし、日明上人を二代となし、日印上人を三代として自から第四代となつた。朝廷から三位僧都を賜はつたのも此の時代で、京都に於ける教化の力も頗る盛んに、尊氏父子も屢々駕を廻らして法會を開いたが、應安二年六月二十七日、壽七十二歳にして逝かつた。塔を東山に築いて大光と言ふ。

第五代 日傳上人

上人は字を大圓と云ひ、建立院と號した。相摸鎌倉の人で、幼少から日靜